

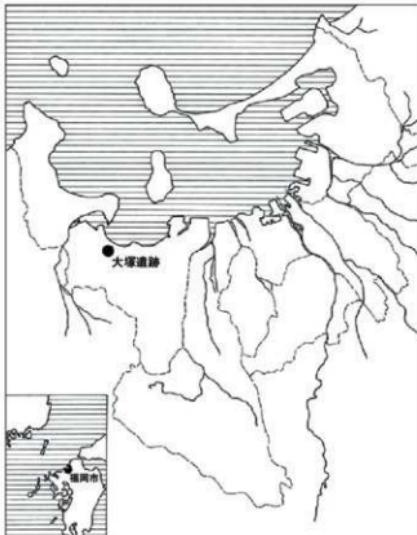
おおつか
大塚遺跡 5

—第16次・17次調査の報告—

2012
福岡市教育委員会

おおつか
大塚遺跡 5

—第16次・17次調査の報告—



遺跡略号 OTS-16 OTS-17
調査番号 0806 0855

2012
福岡市教育委員会



今宿平野（西から）



大塚遺跡合成写真（上が北）



大塚遺跡16次調査全景（北から）



大塚遺跡16次調査全景（西から）



大塚遺跡第17次調査区東部（東から）



大塚遺跡第17次調査区東部（上が北）



大塚遺跡第17次調査区西部（西から）



大塚遺跡第17次調査区西部（上が北）

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならずわが国のかけがえのない財産がありますが、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書は西区の伊都土地区画整理事業に伴い実施した大塚遺跡第16・17次調査の成果を報告するものです。遺跡周辺は、弥生時代の大規模環濠集落である今宿五郎江遺跡や、6世紀の今宿平野の首長墓である大塚古墳など、重要な遺跡が多く知られる地域であり、近年の大規模な発掘調査の成果によって、その具体的な姿や歴史的な移り変わりが明らかになってきました。

本書で報告する調査では、弥生時代後期や古墳時代中期の集落、奈良時代の炭窯、鎌倉時代の墓などがみつかったほか、丘陵上の広がる戦国時代の屋敷群がみつかり、当該期の村落のあり方を考えるうえで、非常に重要な成果をあげることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い行った大塚遺跡第16次・17次調査の発掘調査報告書である。
2. 大塚遺跡第16次の調査と整理は菅波正人が、第17次の調査と整理は森本幹彦が担当した。実測・撮影等の作業を行った者は以下の通りである。
遺構実測：菅波、森本の他、車敏浩（漢陽大學校博物館）梅野眞澄、瀬戸啓治、辻節子、時吉ひとみ、深溝嘉江、三谷朗子（発掘作業員）
遺構実測図製図：16次菅波、熊埜御堂和歌子（技能員） 17次森本
遺構撮影：16次菅波 17次森本
空中写真撮影：写側エンジニアリング
室内整理作業：16次党早苗、近藤美智子、日高ひとみ、吉永知子、17次篠田千恵子、下山慎子、田中ヤス子、村上信子、八木一成（整理補助員）
遺物の実測・製図：16次菅波、熊埜御堂 17次森本、熊埜御堂
遺物の撮影：16次菅波 17次森本
金属器の保存処理・科学分析：上角智希（埋蔵文化財センター）
3. 本書の記述は I・II・IV・VI 章を森本、III 章を菅波正人、V 章を水野哲雄（文化財整備課）が行った。編集は菅波と森本が協議のうえ、森本が行った。
4. 発掘調査から報告書作成に至る過程で、次の方々から指導及び援助を得た。記して感謝いたします（敬称略）。磯望（西南学院大学）、岡寺良（福岡県九州歴史資料館）、佐藤信（東京大学）、下高大輔（彦根市教育委員会）、下山正一（九州大学）、服部英雄（九州大学）、堀本一繁（福岡市博物館）
5. 各調査の基準座標は国土座標（日本測地系）で、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点を使用した。座標北は真北より $0^{\circ} 19' \text{ 西偏}$ する。本書で用いている方位記号は全て座標北である。
6. 本報告の出土資料および記録類は平成24年度に埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。

大塚遺跡 第16次調査		遺跡調査番号	0 8 0 6
地　　番	福岡市西区今宿町	遺　跡　略　号	OTS-16
分布地図番号	112 今宿	調　査　面　積	2095m ²
調　査　期　間		2008（平成20）年4月1日～2008（平成20）年8月18日	

大塚遺跡 第17次調査		遺跡調査番号	0 8 5 5
地　　番	福岡市西区今宿町	遺　跡　略　号	OTS-17
分布地図番号	112 今宿	調　査　面　積	5200m ²
調　査　期　間		2009（平成21）年1月13日～2009（平成21）年8月19日	

本文 目次

I	はじめに.....	1
II	遺跡の立地と歴史的環境.....	2
III	第16次調査の報告	
1.	調査の概要.....	7
2.	調査の記録	
1)	弥生時代の遺構・遺物.....	7
2)	中世の遺構・遺物.....	10
3.	小結.....	46
IV	第17次調査の報告	
1.	調査の概要.....	87
2.	調査の記録	
1)	中世の遺構.....	90
2)	古墳時代から古代の遺構.....	115
3)	出土遺物.....	121
3.	小結.....	144
V	中世末期における大塚遺跡所在集落の性格に関する歴史地理的検討.....	165
VI	まとめ.....	169
Tab 1.	今宿五郎江遺跡・谷遺跡・大塚遺跡の調査一覧	5
Tab 2.	大塚16次遺構一覧	12
Tab 3.	大塚16次出土遺物観察表	42
Tab 4.	大塚17次遺構一覧	119

挿図目次

Fig.1	今宿平野の遺跡分布 (1/25000)	3
Fig.2	大塚遺跡と今宿五郎江遺跡の調査地点 (1/4000)	4
Fig.3	大塚遺跡第16・17次調査地点周辺 (1/1000)	6
Fig.4	大塚遺跡16次調査地点遺構配置図 (1/400)	8
Fig.5	大塚遺跡16次調査地点弥生時代遺構配置 図 (1/400)	13
Fig.6	掘立柱建物実測図1 (1/80)	14
Fig.7	周溝状遺構実測図1 (1/80)	15
Fig.8	周溝状遺構実測図2 (1/80)	16
Fig.9	周溝状遺構実測図3 (1/80)	17
Fig.10	周溝状遺構実測図4 (1/80)	18
Fig.11	周溝状遺構実測図5 (1/80)	19
Fig.12	SX069遺構実測図 (1/100)	20
Fig.13	大塚遺跡16次調査地点中世遺構配置図 (1/400)	21
Fig.14	掘立柱建物実測図1 (1/80)	22
Fig.15	掘立柱建物実測図2 (1/80)	23

Fig. 16 木棺墓、土壤墓実測図（1/20）	24
Fig. 17 土坑実測図（1/40）	25
Fig. 18 周溝状遺構出土遺物実測図1（1/4）	26
Fig. 19 周溝状遺構出土遺物実測図2（1/4）	27
Fig. 20 周溝状遺構出土遺物実測図3（1/4、1/2、1/1）	28
Fig. 21 SX069出土遺物実測図1（1/6）	29
Fig. 22 SX069出土遺物実測図2（1/6）	30
Fig. 23 SX069出土遺物実測図3（1/4）	31
Fig. 24 SX069出土遺物実測図4（1/4）	32
Fig. 25 SX069出土遺物実測図5（1/4）	33
Fig. 26 SX069出土遺物実測図6（1/4）	34
Fig. 27 SX069出土遺物実測図7（1/4）	35
Fig. 28 SX069出土遺物実測図8（1/4）	36
Fig. 29 SX069出土遺物実測図9（1/4）	37
Fig. 30 SX069出土遺物実測図10（1/4）	38
Fig. 31 SX069出土遺物実測図11（1/4、1/2）	39
Fig. 32 遺構出土遺物実測図1（1/4）	40
Fig. 33 遺構出土遺物実測図2（1/4）	41
Fig. 34 大塚遺跡第17次調査地点主要遺構配置図（1/500）	88
Fig. 35 発掘調査時の区分け（1/1000）	89
Fig. 36 付図II～IVの割付図（1/1000）	89
Fig. 37 SD001・004（351）・005・006・007・341・345・356実測図（1/300・1/40）	91
Fig. 38 SD008実測図（1/300・1/40）	92
Fig. 39 SD013（036・037）・014実測図（1/300・1/40）	93
Fig. 40 SD505・506・507・508・509実測図（1/300・1/40）	95
Fig. 41 SD503・504・524実測図（1/300・1/40）	96
Fig. 42 SB2・SA2～5実測図（1/80）	98
Fig. 43 SB1・3・4・SA1実測図（1/80）	99
Fig. 44 SB5・SA6・7実測図（1/80）	100
Fig. 45 SB6・7実測図（1/80）	102
Fig. 46 SB8・9実測図（1/80）	103
Fig. 47 SB10・11・12実測図（1/80）	104
Fig. 48 SB13・14・SA8実測図（1/80）	105
Fig. 49 SB15・16・SA9・10実測図（1/80）	107
Fig. 50 SB17・SB18実測図（1/80）	108
Fig. 51 SB19・20実測図（1/80）	109
Fig. 52 SE049実測図（1/40）	110
Fig. 53 SK003・012・015・024・170・270・279・296・400・405実測図（1/40）	112
Fig. 54 SK511・513・521・523・561・567・568実測図（1/40）	113
Fig. 55 SK574・604実測図（1/40）	114
Fig. 56 木棺墓SM510実測図（1/40）	115
Fig. 57 焼土坑SK514・515・516・517・519・520実測図（1/40）	116
Fig. 58 SC518・SX502・525実測図（1/40）	118
Fig. 59 区画溝出土土器・陶磁器実測図1（1/3）	123
Fig. 60 区画溝出土土器・陶磁器実測図2（1/3）	124
Fig. 61 区画溝出土土器・陶磁器実測図3（1/3）	125
Fig. 62 区画溝出土土器・陶磁器実測図4（1/3）	126
Fig. 63 挖立柱建物柱穴出土土器・陶磁器実測図（1/3）	129
Fig. 64 区画A・B・D柱穴出土土器・陶磁器実測図（1/3）	130
Fig. 65 区画F・K・M柱穴出土土器・陶磁器実測図（1/3）	131
Fig. 66 SE049出土土器・陶磁器実測図（1/3）	132
Fig. 67 土坑ほか出土土器・陶磁器実測図（1/3）	133
Fig. 68 出土弥生土器・古墳時代土器実測図（1/3）	135
Fig. 69 出土埴輪実測図（1/3）	136
Fig. 70 出土須恵器実測図（1/3）	137
Fig. 71 平安時代の土器・陶磁器（1/3）	137
Fig. 72 出土瓦実測図（1/4）	138
Fig. 73 出土木製品・柱実測図（1/4）	139
Fig. 74 出土青銅製品・鉛製品・ガラス製品実測図（2/3）	140
Fig. 75 出土鉄製品実測図（1/2）	141
Fig. 76 出土石鍋・石臼実測図（1/4）	142
Fig. 77 出土黒曜石石器実測図（2/3）	142
Fig. 78 出土土錐実測図（1/2）	143
Fig. 79 出土石製品実測図（1/3）	143
付図I 大塚遺跡16次調査地点遺構配置図（1/300）	
付図II 大塚遺跡17次調査東部遺構配置図（1/200）	
付図III 大塚遺跡17次調査西部遺構配置図（1/200）	
付図IV 大塚遺跡17次調査北部遺構配置図（1/200）	

図版目次

巻頭カラー

巻頭図版 1

今宿平野（西から）

大塚遺跡合成写真（上が北）

巻頭図版 2

大塚遺跡16次調査全景（北から）

大塚遺跡16次調査全景（西から）

巻頭図版 3

大塚遺跡第17次調査区東部（東から）

大塚遺跡第17次調査区東部（上が北）

巻頭図版 4

大塚遺跡第17次調査区西部（西から）

大塚遺跡第17次調査区西部（上が北）

- PL.1 1. 調査前現況（東から） 47

- PL.1 2. 調査前現況（東から）

- PL.2 1. 調査区遠景（北から） 48

- PL.2 2. 調査区遠景（西から）

- PL.3 1. 調査区遠景（西から） 49

- PL.3 2. 調査区遠景（北から）

- PL.4 1. 今宿大塚古墳と調査区俯瞰（南から） 50

- PL.4 2. 調査区俯瞰（南から）

- PL.5 1. 調査区全景（西から） 51

- PL.5 2. 調査区西側拡張区（西から）

- PL.6 1. 調査区遠景（西から） 52

- PL.6 2. 調査区遠景（西から）

- PL.7 1. 調査区遠景（南から） 53

- PL.7 2. 調査区遠景（南から）

- PL.8 1. SB042（東から） 54

- PL.8 2. SB043（東から）

- PL.9 1. SB044、045（北から） 55

- PL.9 2. SB044（北から）

- PL.10 1. SB046（南から） 56

- PL.10 2. SB048、049（東から）

- PL.11 1. SB073（西から） 57

- PL.11 2. SB047（東から）

- PL.12 1. 周溝状遺構俯瞰 1（南から） 58

- PL.12 2. 周溝状遺構俯瞰 2（南から）

- PL.13 1. 周溝状遺構俯瞰 3（南から） 59

- PL.13 2. 周溝状遺構俯瞰 4（南から）

- PL.14 1. 周溝状遺構（北から） 60

- PL.14 2. 周溝状遺構（西から）

- PL.15 1. SD014遺物出土状況（西から） 61

- PL.15 2. SD014遺物出土状況（西から）

- PL.15 3. SD014遺物出土状況（北から）

- PL.15 4. SD014遺物出土状況（西から）

- PL.16 1. SD012遺物出土状況（北から） 62

- PL.16 2. SD012遺物出土状況（東から）

- PL.16 3. SD012遺物出土状況（北から）

- PL.16 4. SD012遺物出土状況（西から）

- PL.17 1. SD012遺物出土状況（西から） 63

- PL.17 2. SD001-d遺物出土状況（北から）

- PL.17 3. SD015遺物出土状況（北から）

- PL.17 4. SD015遺物出土状況（東から）

- PL.18 1. SD015遺物出土状況（東から） 64

- PL.18 2. SD006遺物出土状況（東から）

- PL.18 3. SD006遺物出土状況（東から）

- PL.18 4. SD006石錐出土状況（南から）

- PL.19 1. SD012-aベルト（北から） 65

- PL.19 2. SD013-c土層（南から）

- PL.19 3. SD014-dベルト（西から）

- PL.19 4. SD015-aベルト（西から）

- PL.20 1. SX069掘り下げ状況（東から） 66

- PL.20 2. SX069遺物出土状況（北から）

- PL.21 1. SX069遺物出土状況（北から） 67

- PL.21 2. SX069掘り下げ風景（東から）

- PL.22 1. SX069完掘（東から） 68

- PL.22 2. SX029土器検出状況（南から）

- PL.23 1. SB035（南から） 69

- PL.23 2. SB034（西から）

- PL.24 1. SB036（東から） 70

- PL.24 2. SB037、038（東から）

- PL.25 1. SB039（南から） 71

- PL.25 2. SB041（南から）

- PL.26 1. SX016棺底検出状況（南から） 72

- PL.26 2. SX016棺底検出状況（東から）

- PL.27 1. SX016出土青磁碗（東から） 73

- PL.27 2. SX016出土青磁碗（西から）

- PL.28 1. SX017土層（南から） 74

- PL.28 2. SX017遺物出土状況（西から）

- PL.29 1. SX017遺物出土状況（南から） 75

- PL.29 2. SX017出土青磁碗（西から）

- PL.30 1. SX021完掘（東から） 76

- PL.30 2. SX021土層（東から）

- PL.31 1. SK022土層（南から） 77

- PL.31 2. SK022遺物出土状況（南から）

- PL.32 1. SK024完掘（西から） 78

- PL.32 2. SK025遺物出土状況（南から）

- PL.33 1. SK026土層（北から） 79

- PL.33 2. SK026遺物出土状況（北から）

- PL.34 1. SK054完掘（南から） 80

PL.34	2. SK068完掘（北から）	
PL.35	1. SK070遺物出土状況（西から）	81
PL.35	2. SK071遺物出土状況（西から）	
PL.36	1. SK071土師器出土状況（西から）	82
PL.36	2. 調査区西端溝状遺構（東から）	
PL.37	出土遺物写真1	83
PL.38	出土遺物写真2	84
PL.39	出土遺物写真3	85
PL.40	出土遺物写真4	86
PL.41	1. SD001・005・006周辺（上が北）	145
PL.41	2. SD013周辺（上が北）	
PL.42	1. SD505周辺（上が北）	146
PL.42	2. SD509周辺（上が北）	
PL.43	1. SD503・504・524周辺（上が北）	147
PL.43	2. SD503・504（東から）	
PL.44	1. SD001（南から）	148
PL.44	2. SD001AA' ライン（西から）	
PL.44	3. SD005（東から）	
PL.44	4. SD005JJ' ライン（南から）	
PL.44	5. SD006（南から）	
PL.44	6. SD006JJ' ライン（北から）	
PL.44	7. SD007FF' ライン（西から）	
PL.44	8. SD4・351（南から）	
PL.45	1. SD356付近（南から）	149
PL.45	2. SD008AA' ライン（東から）	
PL.45	3. SB14とSD013南西隅付近（西から）	
PL.45	4. SD013AA' ライン（東から）	
PL.45	5. SD013PP' ライン（東から）	
PL.45	6. SD505北西隅（西から）	
PL.45	7. SD505FF' ライン（西から）	
PL.45	8. SD507周辺（西から）	
PL.46	1. SD503EE' ライン（西から）	150
PL.46	2. SD504（東から）	
PL.46	3. SD504CC' ライン（西から）	
PL.46	4. SD524（西から）	
PL.46	5. SD508周辺（西から）	
PL.46	6. SD509北西隅周辺（西から）	
PL.46	7. SD508AA' ライン（東から）	
PL.46	8. SD509DD' ライン（西から）	
PL.47	1. SB1・2付近（南から）	151
PL.47	2. SB3（北から）	
PL.47	3. SB4・5付近（北から）	
PL.47	4. SB9・10付近（西から）	
PL.48	1. SB6（南から）	152
PL.48	2. SB7（南から）	
PL.48	3. SB19（北から）	
PL.49	1. SB11～13付近（南から）	153
PL.49	2. SB15・16（南から）	
PL.49	3. SB17（西から）	
PL.49	4. SB18・17（南から）	
PL.50	1. SE49（北から）	154
PL.50	2. SE49下部（西から）	
PL.50	3. SE49掘り方近景（北から）	
PL.51	1. SK3（南から）	155
PL.51	2. SK12（南から）	
PL.51	3. SK15（南から）	
PL.51	4. SK270断面（東から）	
PL.52	1. SK279（南から）	156
PL.52	2. SK170（西から）	
PL.52	3. SK296とSD5（南から）	
PL.52	4. SK301（西から）	
PL.53	1. SK400（北から）	157
PL.53	2. SK405（南から）	
PL.53	3. SK513土層（東から）	
PL.53	4. SK513（東から）	
PL.54	1. SK511（西から）	158
PL.54	2. SK521（東から）	
PL.54	3. SK523土層（西から）	
PL.54	4. SK523（西から）	
PL.55	1. SK561（西から）	159
PL.55	2. SK574土層（東から）	
PL.55	3. SK574（東から）	
PL.55	4. SK604（北から）	
PL.56	1. SM510（完掘南から）	160
PL.56	2. SM510と今山（南から）	
PL.56	3. SM510土層（南から）	
PL.56	4. SM510副葬品（南から）	
PL.57	1. SK514（西から）	161
PL.57	2. SK516（南から）	
PL.57	3. SK515土層（北から）	
PL.57	4. SK515（北から）	
PL.58	1. SK517（北から）	162
PL.58	2. SK519（南から）	
PL.58	3. SK520土層（南から）	
PL.58	4. SK520（東から）	
PL.59	1. SC518（北西から）	163
PL.59	2. SC518土層（南から）	
PL.59	3. SC518-P2（南から）	
PL.60	1. SX502上面土師器出土状況（東から）	164
PL.60	2. SX502（東から）	
PL.60	3. SX525焼土面（東から）	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

本書で報告する大塚遺跡の発掘調査は伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立って実施されたものである。伊都土地区画整理事業は福岡市西部の今宿平野東部を対象に計画された区画整理事業で、施工面積は約130haである。

1996（平成8）年11月、都市整備局（現・住宅都市局）伊都区画整理事務所から事業地内の埋蔵文化財について確認調査の依頼があった。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では事業地全体について遺跡の確認のための試掘調査が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、試掘地点の選定を行った。広大な事業地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲確定や、かつての潟湖と考えられる今宿砂丘後背地などの古地形復原を目的として、1996年12月～1997年2月、計68箇所の試掘調査を実施した。この結果、事業地南部の低丘陵や沖積台地上を中心として埋蔵文化財の分布が確認され、事業地北部の大半は砂丘後背湿地に当たり埋蔵文化財分布の可能性はないと判断された。各地点の包蔵地範囲内については、工事工程との調整を行なながら必要範囲について随時、確認調査を行い、遺構密度など埋蔵文化財の内容を確認したうえで、本調査に着手するという手順をとることになった。本調査は2002（平成14）年度の今宿五郎江遺跡の調査から始まった。

本書で報告する大塚遺跡第16次調査は確認調査を2007（平成19）年9月4日～7日に行い、対象地全体で遺構や遺物の散布を確認した。本調査は2008（平成20）年4月1日～同年8月18日に実施した。なお、第17次調査地点との境界の遺構については、第17次調査の開始にあわせて補足的に調査を実施した。第17次調査は13次、16次調査の成果を受けて、確認調査を行わずに本調査を実施した。調査期間は2009（平成21）年1月13日～同年8月19日である。調査報告書作成のための整理はいずれも2010（平成22）年度から2011（平成23）年度に行った。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託	福岡市住宅都市局（旧・都市整備局）伊都区画整理事務所		
調査主体	福岡市教育委員会		
	教育長	酒井龍彦	山田裕嗣（調査時）
	文化財部長	藤尾浩	宮川秋雄（平成21年度）、 矢野三津男（平成20年度）
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課課長	田中壽夫	
	埋蔵文化財第2課調査第2係長	菅波正人	
	埋蔵文化財第2課調査第1係長	杉山富雄（調査時）	
庶務担当	埋蔵文化財第1課 管理係	古賀とも子	
事前協議	埋蔵文化財第1課事前審査係長	宮井善朗（調査時）	
	事前審査係	阿部泰之（調査時）	
第16次調査担当	埋蔵文化財第2課 調査第2係	菅波正人	
第17次調査担当	埋蔵文化財第2課 調査第2係	森本幹彦	

II 遺跡の立地と歴史的環境

今宿平野は糸島平野の東縁部に開ける小平野で、東側を背振山系より北に派生する叶岳・長垂山塊によって早良平野と画され、南・西側を高祖山の山塊によって区切られた東西約6km、南北約2kmの小平野である。今山～長垂間の今津湾に面する海浜部では、弓状砂丘が繩文時代後半期以降に形成され、その後背地には近世の干拓事業まで潟湖ないしは干潟がひろがっていた。南の高祖山山麓は北流する小河川の開析により八手状に丘陵尾根が派生する地形をなし、平野東部では叶岳とのあいだに扇状地が発達している。大塚遺跡（1）の調査地点は高祖山山麓尾根の北部にあり、今津干潟に面するところである。各時代の集落が立地する台地は標高10mに満たないものの、地質的には高位段丘面とみられる。

旧石器時代から中世までの歴史的環境や、伊都区画整理事業に伴う大塚遺跡等の調査概要については、大塚遺跡3（福岡市第1025集）と大塚遺跡4（福岡市第1111集）でまとめているので、ここでは本書の調査成果と関連する、弥生時代後半期以降の歴史的環境について、簡単に触れておきたい。

弥生時代後半期の平野の中心的な集落は今宿五郎江遺跡（2）である。中期後半から後期の環濠集落で、環濠の埋没が進む弥生時代終末期前後には集落域が拡大して、分村が増える。大塚遺跡の最初の集落形成はこの分村であり、遺跡内の各丘陵尾根上に弥生終末期前後の集落が形成される。大塚遺跡16次の弥生時代集落は、そのような分村の中でも、遺構密度が高い。また、14次では終末期前半の鍛冶工房がみつかり、西新町遺跡よりも古い、列島最古段階の竈を有している。水田等の生産域は今宿五郎江遺跡環濠集落周縁の東部から南部に広がっていた可能性が高く、井堰等がみつかっている。南側の谷遺跡（3）3次調査もそのような生産域の一つで、弥生時代後期から終末期の井堰や畦畔が複数面重複している。今宿五郎江遺跡の墓域は不明瞭であるが、大塚遺跡5次調査で弥生時代終末期前後の甕棺や石棺墓が4基みつかっている。また、今宿遺跡（8）では継続して墓が営まれており、銅劍副葬墓（2次）もみられる。

古墳時代中期前半期は、平野内で小規模な集落が増加し、大塚遺跡でも堅穴建物を主体とする集落や旧河川から多量の祭祀遺物が出土する地点がある。14次・15次の集落域は朝鮮半島系土器の出土が多く、渡来人の居住が想定される。女原遺跡（6）も、主にこの時期から集落が形成される遺跡であるが、3次調査では朝鮮半島系土器の出土が多い。

今宿平野周辺の丘陵部には古墳時代前期中葉から後期の前方後円墳や円墳など400基以上の古墳が分布する。大塚遺跡の範囲内にある大塚古墳（H）は墳丘長64mの前方後円墳で、後期前半の首長墳である。一方、大塚遺跡16次・17次調査区など、大塚古墳周辺域には当該期前後の集落がみられない。

奈良時代前後では製鉄関連の遺跡が多くみつかっている。大塚遺跡14次と鈴崎製鉄A遺跡（31）1次では製錬炉と横口付炭窯が、飯氏遺跡（12）8次では製錬炉と鍛冶炉がみつかっており、時期は7世紀～8世紀を中心とするものである。砂鉄に恵まれる糸島地方では奈良時代前後に製鉄が活発になるが、奈良時代後半に軍事拠点として築城される怡土城などに供給されたとみられている。

平安時代は今宿平野でも中国陶器や綠釉陶器が多量に出土する遺跡がみられるようになり、それらには大宰府の外郭施設があった可能性が考えられている。一つは徳永A遺跡（10）で、丘陵部の9世紀代を中心とする包含層から越州窯系青磁等の中国陶器や綠釉陶器がまとまって出土しており、鉄滓、羽口や瓦の出土も少なくない。「周船寺」という地名から周船寺との関連が考えられている。5次調査では上記のような遺物のほか、石製丸瓶や、多くの怡土城系瓦が出土しており、大型建物等はみつかっていないが、鍛冶炉6基や火葬墓などの特異な遺構もみつかっており、遺跡の性格をより特徴付ける成果をあげている。今宿五郎江遺跡でも近年の調査で台地縁辺の包含層から越州窯系青磁等の中国陶器、綠釉陶器、瓦、鉄滓などが多く出土しており、9世紀後半～10世紀を中心とするようである。13次調査では青銅製の「寶」印が出土している。大塚遺跡でも当該期の土坑等がみつかっているほか、17次調



- 1 大塚遺跡 2 今宿五郎江遺跡 3 谷遺跡 4 青木遺跡 5 女原笠掛遺跡 6 女原遺跡 7 德永B遺跡 8 今宿遺跡
 9 今山遺跡 10 德永A遺跡 11 矢舟遺跡 12 斎氏遺跡 13 斎氏引地遺跡 14 運町遺跡 15 丸隈山遺跡 16 山崎遺跡
 17 千里中原遺跡 18 千里深谷B遺跡 19 千里深谷A遺跡 20 女原上ノ谷製鉄跡 21 新開製鉄跡 22 青木城跡
 23 相原製鉄A遺跡 24 相原製鉄B遺跡 25 相原製鉄C遺跡 26 本村遺跡 27 燐山製鐵道跡 28 堀ノ内製鐵道跡
 29 堀ノ内遺跡 30 鶴崎遺跡 31 鶴崎製鉄A遺跡 32 鶴崎製鉄B遺跡 33 ショウガ谷製鉄跡 34 飯氏古墳群A群
 35 飯氏古墳群B群 36 飯氏古墳群C群 37 飯氏古墳群D群 38 飯氏古墳群E群 39 飯氏古墳群F群 40 飯氏古墳群G群
 41 飯氏古墳群I群 42 飯氏古墳群J群 43 德永古墳群B群 45 德永古墳群C群 46 德永古墳群D群
 47 德永古墳群G群 48 德永古墳群H群 50 女原古墳群A群 51 女原古墳群B群 52 女原古墳群C群 53 女原古墳群D群
 54 女原古墳群E群 55 新開古墳群A群 56 新開古墳群B群 57 新開古墳群C群 58 新開古墳群D群 59 新開古墳群E群
 60 新開古墳群F群 61 谷上古墳群A群 62 谷上古墳群B群 63 谷上古墳群C群 64 相原古墳群A群 65 相原古墳群B群
 66 相原古墳群C群 67 相原古墳群D群 68 相原古墳群E群 69 相原古墳群F群 70 相原古墳群G群 71 相原古墳群H群
 72 相原古墳群J群 73 本村古墳群A群 74 燐山古墳群B群 75 鶴崎古墳群A群 76 鶴崎古墳群B群 77 油坂古墳群A群
 78 油坂古墳群B群 79 長垂山古墳群A群 A 飯氏B14号墳 B 兜塚古墳 C 丸隈山古墳 D 山ノ鼻1号墳 E 山ノ鼻2号墳
 F 若八幡宮古墳 G 下谷古墳 H 大塚古墳 I 新開古墳 J 各上B1号墳 K 鶴崎古墳

Fig.1 今宿平野の遺跡分布 (1/25000)



Fig.2 大塚遺跡と今宿五郎江遺跡の調査地点 (1/4000)

査では越州窯系青磁等を副葬した木棺墓がみつかっている。その他にも、女原笠掛遺跡(5)の瓦窯や今山遺跡8次調査の石組護岸のドックなど、平安時代の今宿平野を考える上で重要な遺構がみつかっている。

平安時代末前後では、大塚遺跡北部で建物主軸が南北方向に揃う掘立柱建物群などがみつかっており、当該期に初めて集落が形成されることから、墾田開発関係の集落とみられ、怡土莊（史料初見1131年）との関連も考えられる。鎌倉時代～室町時代では、今宿五郎江遺跡北部で掘立柱建物等の遺

Tab.1 今宿五郎江遺跡・谷遺跡・大塚遺跡の調査一覧

今宿五郎江遺跡							
次数	調査年度 年	弥生時代後半 ～古墳時代初期前半	古墳時代 中～後期	古代	中世	備考	文献
1次	1984・検査	○	○	○	○	1	
2次	1985・ 北台地 南台地	福岡市摩前原線	○	○	○		2
3次	1987・給治所	現地内				未報	
4次	1991・鉄塔				1次調査区内	3	
5次	2000・ツール	現地内		○	○	4	
6次	2001・井手町花			○	○	17	
7次	2001・井手町花			○	○	17	
8次	2002・伊都区調整			○	○	5	
9次	2002・伊都区調整	現地内	○	○	○	5, 6	
10次	2004・伊都区調整	現地内	○	○	○	5, 7, 10 発見中	
11次	2005・伊都区調整	現地内	?	?	?	未報	
12次	2006・伊都区調整	現地内	?	?	?	8	
13次	2007・伊都区調整	現地内		○	○	9	
谷遺跡							
1次	2002・伊都区調整	○	○		調査時は今宿五郎江より改調査	5	
2次	2005・伊都区調整				史跡未上位 をうけた板門 傷害前段水田か	未報	
3次	2008・伊都区調整	後期の水田域	○			未報	
大塚遺跡							
1次	1979・今宿バイパス			○		19	
2次	1979・今宿バイパス	○		○		19	
3次	1981・鉄塔				11次調査区内	11, 15, 16	
4次	1982・今宿バイパス	○		○	○	20	
5次	1982・海場整備	終末の石積や稲作墓	後期六住町付近	鐵門	中世前半の居館	未報 16	
6次	1986・今宿バイパス					12	
7次	1986・朝日住宅					13	
8次	2005・伊都区調整					14	
9次	2006・伊都区調整	河道に遺物多量投棄	河道に遺物多量投棄	○	○	未報	
10次	2006・伊都区調整			○	○	14	
11次	2006・伊都区調整	現地内	○			未報	
12次	2007・伊都区調整			○	○	14	
13次	2007・伊都区調整			○	○	14	
14次	2007・伊都区調整	終末の鐵門、竈	中期前半の集落	鐵門(改修)、鐵門が はつか	○	15	
15次	2007・伊都区調整						
16次	2008・伊都区調整	○	○			本著	
17次	2008・伊都区調整		中世前半	○	中世末の屋敷群	本著	
	大塚占碑	1977・補記調査	既生土器多量出土			未報区	

構が密集するようになり、墓もみられる。大塚遺跡南部の5次調査では当該期の「居館」がみつかっており、北部では、小規模な集落や墓が点在している。この時期に栄えるのが今津湾北部の今津であり、平安時代末から博多と並ぶ貿易や禪宗の大拠点となっている。誓願寺南の調査では寺に関係するとみられる建物、溝、井戸、瓦、鉄鐸などが出土しており、勝福寺付近では古墓が発見され、多量の陶磁器が出土したことが知られている。文永の役のあと蒙古の再襲来に備えて築かれたのが元寇防壁であり、今宿地区は豊前国の担当であった。長垂山の北西麓から今山の東の海浜砂丘上に築かれるが、遺存状況はあまり良くなく、これまで調査は行われていない。

戦国時代は大塚遺跡の盛期の一つである。本書報告の17次調査地点を中心とする丘陵尾根上には、屋敷群が面的に展開しており、当該期の造成は、ほぼそのまま現況の地形につながっているようである。同様の集落は、小規模であるが、徳永B遺跡（7）でもみつかっている。当該期の歴史的環境については、第V章も参照されたい。青木遺跡では大塚遺跡の衰退する16世紀後半以降の集落がみつかっており（4次）、平野東部の堀ノ内遺跡（29）は14～16世紀の開発拠点としての村落と考えられている。

<文献>

福岡市教育委員会

- 「今宿五郎江遺跡」福岡市132集 1986年
- 「今宿五郎江遺跡Ⅱ」福岡市228集 1991年
- 「今宿五郎江遺跡Ⅲ」北水A 遺跡Ⅲ
丸隈山遺跡Ⅰ」福岡市479集 1996年
- 「今宿五郎江遺跡Ⅳ」福岡市127集 2003年
- 「今宿五郎江Ⅴ」福岡市872集 2008年
- 「今宿五郎江Ⅵ」福岡市224集 2009年
- 「今宿五郎江Ⅶ」福岡市1009集 2008年
- 「今宿五郎江Ⅷ」福岡市1066集 2010年
- 「今宿五郎江Ⅸ」福岡市1109集 2011年
- 「今宿五郎江Ⅹ」福岡市1110集 2011年
- 「古跡・大塚遺跡第3次調査」(宮原実紀監修)
福岡市490集 1996年
- 「大塚遺跡・女連跡」福岡市224集 1990年
- 「大塚遺跡第7次調査」福岡市256集 1991年
- 「大塚遺跡第3」福岡市1025集 2009年
- 「大塚遺跡第4」福岡市1111集 2011年
- 「古跡・大塚遺跡第1次調査」(丸隈山古跡Ⅱ)
福岡市146集 1986年
- 「今宿五郎江第6・7次調査」
(福岡市埋蔵文化財年報 VOL.16)福岡市
2003年

福岡市立歴史資料館

- 「古跡の歴史 緊急支援された遺跡と遺物」
齊藤信 1997年

福岡市教育委員会

- 「福岡市西久・赤郡前原町所道跡の調査」
今宿・伊都区開拓5集 1977年
- 「今宿高田跡」今宿バイパス關係10集
1984年

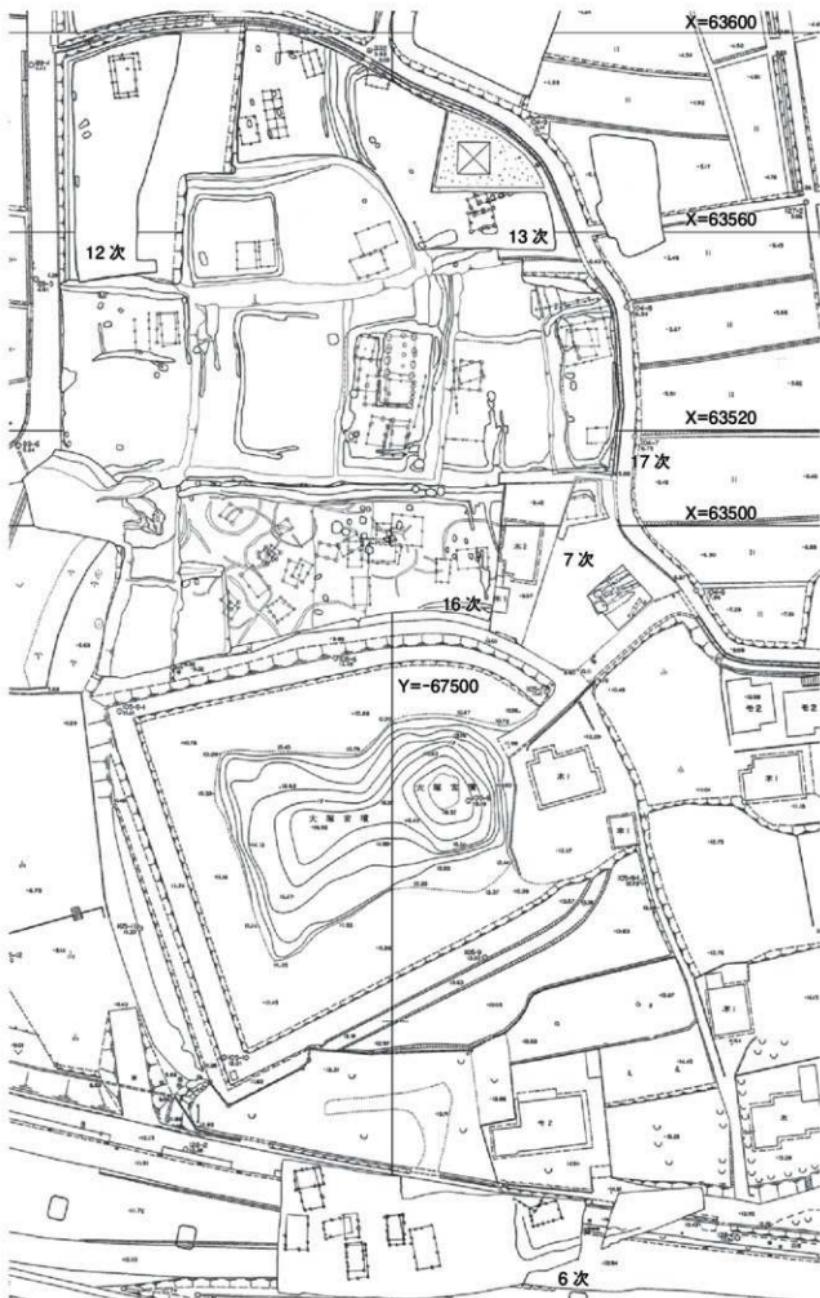


Fig.3 大塚遺跡第16・17次調査地点周辺 (1/1000)

III 第16次調査の報告

1. 調査の概要

本調査地点は大塚遺跡の西側に位置し、標高約8.5m～9.5mの低丘陵に立地する。現況は畠地で、南側隣接地には国史跡の今宿大塚古墳がある。周辺の調査では北側隣接地は第7次、17次調査、西側隣接地には第14、15次調査が行われている。

調査は旧耕作土を除去した地表下約30cmの淡橙色粘質土を遺構面として行った。廃土置場の関係から調査区西端を廃土置場とし、表土剥ぎは東側から行った。東側の調査終了後、廃土置場とした西側部分の調査を実施した。耕作土直下が遺構面であるため、調査区西端斜面を除き、遺物包含層はほとんど検出できなかった。現況の地形は北側と西側に向かって緩やかに下っていく。

遺構は弥生時代後期の周溝状遺構、掘立柱建物、中世の木棺墓、土壙墓、掘立柱建物、溝状遺構などを検出した。弥生時代の周溝状遺構は調査区全面に展開し、直径約10～15mを測る。同様の遺構は大塚遺跡第11次、15次調査などで、掘立柱建物や鍛冶工房などの周囲を巡る状態のものが検出されている。本調査地点では内部に1×1間の掘立柱建物が配置されたものを検出した。この他、1×2間の掘立柱建物を数棟検出したが、周溝状遺構と分布が異なることが注目される。また、調査区西端斜面で廃棄された大量の弥生土器を検出した。中世の掘立柱建物は2×3間の側柱建物で、主軸を東西、南北方向に配置される。調査区東側に集中し、西側には展開しない。これらの建物を区画するように調査区北側で東西溝を検出した。

遺物は周溝状遺構、西端斜面から弥生土器、石錘などが出土した。中世の木棺墓、土壙墓からは副葬された龍泉窯系青磁が出土した。また、中世の遺構から埴輪片が数点出土した（コンテナ31箱）。

今回の調査では弥生時代後期、中世の遺構、遺物を検出した。弥生時代後期の遺構は調査区北東部に展開する環濠集落に重なる時期のものであり、環濠の外側に集落が広がることが確認できた。遺構の分布から今宿大塚古墳の下にも同様の遺構が予想される。弥生時代後期以降は遺構・遺物はほとんど見られず、今宿大塚古墳の築造に関わるような遺構、遺物も確認できなかった。遺跡は古墳築造後しばらくの空白期があり、再び遺構が見られるのは13世紀前後の時期で、溝に区画される建物群の出現は16世紀に下ると考えられる。

2. 調査の記録

1) 弥生時代の遺構・遺物

今回検出した遺構は掘立柱建物13棟+a、周溝状遺構12基+a、土坑、柱穴などがある（Fig. 5）。掘立柱建物の内、周溝条遺構の内部に配置された1×1間の建物は周溝状遺構の項で取り扱う。

掘立柱建物（Fig. 6）

周溝状遺構内部に配置された1×1間の掘立柱建物以外の建物は7基検出した。

SB042 調査区中央に位置し、SB043に切られる。構造は1×2間で、主軸方位はN-60°-Eで、梁行約250cm、桁行360cm、柱間は約200～240cmを測る。柱穴の平面形は楕円形～隅丸長方形で、短辺約30～50cm、長辺約40～70cmを測る。柱の径は不明確である。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

SB043 調査区中央に位置し、SB042に切る。構造は1×2間で、主軸方位はN-75°-Wで、梁行約265cm、桁行430cm、柱間は約180～230cmを測る。柱穴の平面形は楕円形～隅丸長方形で、短辺約50～60cm、長辺約60～90cmを測る。柱の径約20cmを測る。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

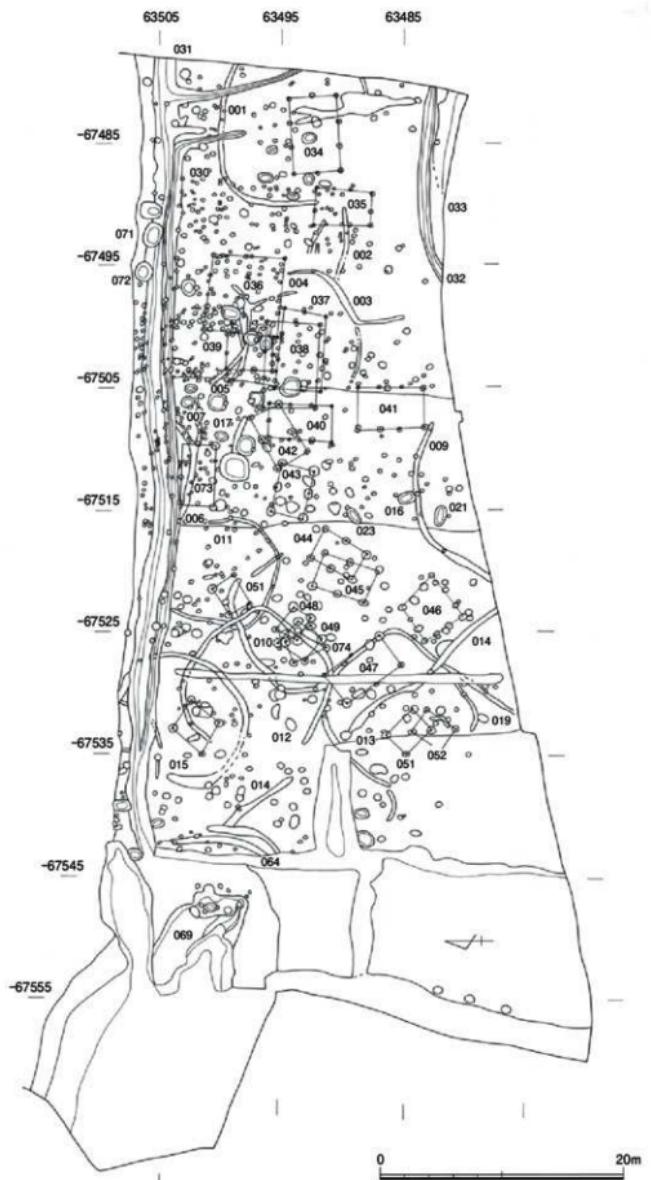


Fig. 4 大塚遺跡16次調査地点構造配置図 (1/400)

SB044 調査区中央に位置し、SB042、043に西側に位置する。SB045と切りあう。構造は1×2間で、主軸方位はN-30°-Eで、梁行約250cm、桁行400cm、柱間は約200cmを測る。柱穴の平面形は楕円形～隅丸長方形で、短辺約30～60cm、長辺約40～60cmを測る。柱の径約20cmを測る。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

SB045 調査区中央に位置し、SB045と切りあう。構造は1×2間で、主軸方位はN-60°-Eで、梁行約280cm、桁行450cm、柱間は約220～240cmを測る。柱穴の平面形は円形～隅丸長方形で、短辺約40～50cm、長辺約40～70cmを測る。柱の径約20cmを測る。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

SB046 調査区西側に位置し、SB043に切られる。構造は3×3間で、主軸方位はN-55°-Eで、短軸長約340cm、長軸長約370cm、柱間は約120～150cmを測る。柱穴の平面形は円形～隅丸長方形で、短辺約40～60cm、長辺約40～70cmを測る。柱の径約20cmを測る。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

SB047 (Fig.11) 調査区中央に位置し、SD013を切る。構造は1×2間で、主軸方位はN-35°-Wで、梁行約300cm、桁行540cm、柱間は約260～280cmを測る。柱穴の平面形は円形～隅丸長方形で、短辺約20～60cm、長辺約20～80cmを測る。柱の径は不明確である。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

SB073 (PL.11) 調査区中央に位置し、SB042、043の北側に位置する。SD006と切りあう。構造は1×2間と考えられるが、北東隅の柱穴が検出できなかった。主軸方位はN-87°-Wで、梁行約270cm、桁行520cm、柱間は約240～270cmを測る。柱穴の平面形は円形～隅丸長方形である。遺物は弥生土器片が出土した。時期は不明確であるが、弥生時代後期と考えられる。

周溝状遺構 (Fig. 7～11)

周溝状遺構は調査区の外側に展開することや削平などにより、全体の形状が把握できないものも多い。平面形は円形～隅丸方形を呈する。周溝内部には1×1間の建物を配置するものもある。ここでは形状が把握できるものを中心に記述していく。

SD001 (Fig. 7) 調査区東側に位置する。溝は調査区東側に広がるが、南側には巡らない。周溝内部には建物などは見られない。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約20cm、幅約40～50cmを測る。現状の内法は東西長約11m以上、南北長約7.5m以上を測る。なお、周溝北側で埋置された甕を検出した。丸底の甕は上半部が削平されていた。周溝状遺構との関連も考えられる。周溝から弥生土器甕、鉢、高坏などが出土した (Fig.18 1～8)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD003～005 (Fig. 8) SD001の西側に位置する。SD005はSD004に切られる。SD003はそれらの南側にあり、切り合い関係は不明である。いずれも溝は南側のみ巡る。また、周溝に長さ約3～4 mの直線的な溝が取りつく。比較的規模がわかるSD003で、東西長約9.5m以上、南北長約4.5m以上を測る。周溝内部には建物などは見られない。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約20cm、幅約40～50cmを測る。周溝から弥生土器甕、鉢、高坏などが出土した (Fig.18 9)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD006, 007 (Fig.9) 調査区中央北側に位置する。SD007はSD006に切られる。溝は北側に広がるが、削平のため、遺存しない。規模は不明確であるが、東西長約8m以上を測る。周溝内部には建物などは不明確。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約20cm、幅約40～50cmを測る。周溝から弥生土器甕、鉢、石錘などが出土した (Fig.18 10, 11)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD011 (Fig.9) 調査区中央北側に位置する。溝は調査区北側に広がる。SD010, 012に切られる。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約20cm、幅約40～50cmを測る。現状の内法は東西長約8m、南北長約8m以上を測る。周溝内部の西側に偏った場所に1×1間の建物が見られる。規模は短軸長約

200cm、長軸長約230cmを測る。周溝から弥生土器片が出土した。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD010 (Fig.10) 調査区西側に位置する。溝は南東側には巡らない。SD011を切り、SD012に切られる。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約40cm、幅約40～50cmを測る。現状の内法は東西長約10m以上、南北長約5m以上を測る。周溝内部に1×1間の建物3棟(SB048、049、074)が見られる。建物は切り合いがあり、SB074はSB049に切られる。SB048は短軸長約200cm、長軸長約220cmを測る。SB049は短軸長約200cm、長軸長約250～300cmを測る。SB074は短軸長約200cm、長軸長約230cmを測る。周溝から弥生土器壺、鉢、高坏などが出土した(Fig.18 12～15)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD012 (Fig.10) 調査区西側に位置する。周溝の北西コーナーは途切れているが、全体の規模は把握できる。SD010、011、013を切り、SD015に切られる。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約40cm、幅約40～50cmを測る。現状の内法は東西長約10.7m、南北長約10.5mを測る。周溝内部には建物などは見られない。周溝から弥生土器壺、鉢、高坏などが出土した(Fig.18 16～21)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD015 (Fig.10) 調査区西側に位置する。溝は調査区北側に延びる。周溝の北西コーナーは途切れている。SD012を切る。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約20～40cm、幅約40～50cmを測る。現状の内法は東西長約10.5m、南北長約11mを測る。周溝内部中央に1×1間の建物2棟が見られる。SB051は短軸長約250cm、長軸長約300cmを測る。周溝から弥生土器壺、鉢、高坏などが出土した(Fig.19、20 31～51)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD013 (Fig.11) 調査区西側に位置する。溝は調査区北側に延びる。周溝の南西コーナーは途切れている。SD012、SD014に切られる。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約20～30cm、幅約40～50cmを測る。現状の内法は東西長約10.5m、南北長約11mを測る。周溝内部の西側に偏った場所に1×1間の建物2棟(SB051、052)が見られる。SB051は短軸長約210cm、長軸長約280cmを測る。SB052は短軸長約200cm、長軸長約280cmを測る。周溝から弥生土器壺、鉢、高坏などが出土した(Fig.19、22～24)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

SD014 (Fig.11) 調査区西側に位置する。溝はSD013を切る。溝は調査区南側から直線的に延びてくる。途中削平されているが、現状で長さ約24m分を検出した。溝の掘り方は逆台形を呈し、深さ約40～50cm、幅約40～60cmを測る。周溝から弥生土器壺、壺、鉢、高坏などが出土した(Fig.19、25～38)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

不明遺構 (Fig.12)

SX069 調査区西端斜面に位置し、幅約3m、長さ5mほどの溝状のくぼみに弥生土器が廃棄されていた。溝状のくぼみは第14、15次調査との間にある谷部に合流する。溜め井などの遺構の可能性も考えられたが、遺構の性格は不明確である。遺構からは弥生土器壺、壺、高坏、石錘などが出土した(Fig.21～31、57～169)。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。

2) 中世の遺構・遺物

今回検出した遺構は掘立柱建物8棟、溝状遺構4条、木棺墓、土塙墓、土坑などがある(Fig.13)。調査区の南端と北端の区画溝と考えられる幅約1mの東西溝(SD031、032、SD032、033)がある。南側にあるSD032、033は今宿大塚古墳の周溝に沿うように掘られている。

調査区掘立柱建物 (Fig.14、15)

SB034 (Fig.14) 調査区東側に位置する、2×3間の東西棟。主軸方位はN-85°-Eで、梁行約

390cm、桁行610cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cmを測る。柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB035 (Fig.14) SB034の西側に位置する、 2×3 間の南北棟。主軸方位はN-4°-Eで、梁行約280cm、桁行500cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cmを測る。柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB036 (Fig.14) SB035の西側に位置する、 2×3 間の東西棟。歪んだ平面形で、主軸方位はN-100°-Eで、梁行約570～610cm、桁行600～640cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cmを測る。柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB039 (Fig.14) SB036の西側に位置する、 2×3 間の南北棟。主軸方位はN-4°-Eで、梁行約280cm、桁行380cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cmを測る。柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB037 (Fig.15) SB036の南側に位置する、 2×3 間の東西棟。主軸方位はN-80°-Wで、梁行約400cm、桁行590～600cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cm、柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB038 (Fig.15) SB037と切り合う、 2×3 間の東西棟。主軸方位はN-4°-Eで、梁行約280cm、桁行380cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cmを測る。柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB040 (Fig.15) SB037の西側に位置する、 2×3 間の南北棟。主軸方位はN-3°-Eで、梁行約290cm、桁行510cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cm、柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

SB041 (Fig.15) SB040の南側に位置する、 1×3 間の南北棟。主軸方位はN-3°-Wで、梁行約350cm、桁行540cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約20～30cmを測る。柱の径約15cmを測る。遺物は弥生土器、土師器片などが出土した。時期は不明確であるが、中世後期と考えられる。

木棺墓、土壙墓 (Fig.16)

SX016 調査区中央に位置する、木棺墓。掘り方の長さ約125cm×幅約75cmを測る。墓壇内からは鉄釘が出土しており、そこから推定される棺の規模は長さ約110cm×幅60cm。棺内の北側に龍泉窯系青磁碗が1点副葬されていた (Fig.33 193～196)。時期は13世紀代と考えられる。

SX017 調査区中央に位置する、土壙墓。掘り方の長さ約170cm×幅約70cmを測る。出土遺物はない。時期は不明確であるが、先述の木棺墓などの同時期か。

SX021 調査区中央に位置する、土壙墓。掘り方の長さ約140cm×幅約70cmを測る。出土遺物はない。時期は不明確であるが、先述の木棺墓などの同時期か。調査区中央に位置する。土壙墓と考えられる。

土坑 (Fig.17)

SK022 調査区中央に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長さ約160cm、幅約150cmを測る。遺物は龍泉窯系青磁碗片が出土した (Fig.33 198)。

SK024 調査区中央に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長さ約145cm、幅約140cmを測る。遺物は土師器片などが出土した。

SK025 調査区中央に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長さ約250cm、幅約220cmを測る。遺物は土師器皿などが出土した (Fig.33 199、200)。

SK071 調査区東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長さ約200cm、幅約150cmを測る。床面で礫混じりの炭、灰層を検出した。遺物は土師器皿などが出土した (Fig.33 201)。

SK054 調査区西側に位置する。平面形は隅丸方形を呈する、焼壁土坑。床面で炭層を検出した。長さ約120cm、幅約85cm以上を測る。

SK068 調査区西側に位置する。平面形は楕円形を呈する、焼壁土坑。床面で炭層を検出した。長さ約100cm、幅約80cmを測る。

溝 (Fig.13)

SD030, 031 調査区北側を東西に延びる溝。SD030はSD031を切る。断面形は逆台形を呈し、幅約1m、SD031は深さ約100cm、SD030は約30～50cmを測る。SD030は東端で南側に折れる。遺物は土師器、陶器などが出土した。時期は中世後半～末と考えられる。

SD032, 033 調査区南側を東西に延びる溝。今宿大塚古墳の周溝に沿うように掘られる。断面形は逆台形を呈し、幅約1m、深さ約30～50cmを測る。SD033からは埴輪片が出土しており、古墳の外側の周溝の肩の掘りなおしの可能性も考えられる。遺物は土師器、陶器などが出土した。時期は中世後半～末と考えられる。

Tab.2 大塚16次遺構一覧

遺構番号	遺構種類	時代	博図 (Fig.)	国版 (PL.)	備考	遺構番号	遺構種類	時代	博図 (Fig.)	国版 (PL.)	備考
0 0 1	溝	弥生	7	1217	周溝状遺構	0 3 8	掘立柱建物	中世	15	24	
0 0 2	溝	弥生		12	周溝状遺構	0 3 9	掘立柱建物	中世	14	25	
0 0 3	溝	弥生	8	12	周溝状遺構	0 4 0	掘立柱建物	中世	15		
0 0 4	溝	弥生	8	12	周溝状遺構	0 4 1	掘立柱建物	中世	15	25	
0 0 5	溝	弥生	8	12	周溝状遺構	0 4 2	掘立柱建物	弥生	6	8	
0 0 6	溝	弥生	9	1218	周溝状遺構	0 4 3	掘立柱建物	弥生	6	8	
0 0 7	溝	弥生	9	12	周溝状遺構	0 4 4	掘立柱建物	弥生	6	9	
0 0 8	溝	弥生		12	周溝状遺構	0 4 5	掘立柱建物	弥生	6	9	
0 0 9	溝	弥生		12	周溝状遺構	0 4 6	掘立柱建物	弥生	6		
0 1 0	溝	弥生	10	12	周溝状遺構	0 4 7	掘立柱建物	弥生	11		
0 1 1	溝	弥生	9	12	周溝状遺構	0 4 8	掘立柱建物	弥生	10		
0 1 2	溝	弥生	10	12,16,17,19	周溝状遺構	0 4 9	掘立柱建物	弥生	10		
0 1 3	溝	弥生	11	17,19	周溝状遺構	0 5 0	掘立柱建物	弥生	9		
0 1 4	溝	弥生	11	13,19		0 5 1	掘立柱建物	弥生	11		
0 1 5	溝	弥生	10	13,17,18,19	周溝状遺構	0 5 2	掘立柱建物	弥生	11		
0 1 6	木棺墓	中世	16	26,27		0 5 3	土坑	弥生			
0 1 7	土壤幕	中世	16	28,29		0 5 4	土坑	中世	17	34	焼土坑
0 1 8	溝	弥生				0 5 5	土坑	古代			
0 1 9	溝	弥生				0 5 6	土坑	弥生			
0 2 0	溝	弥生				0 5 7	土坑	弥生			
0 2 1	土壤幕	中世	16	30		0 5 8	土坑	弥生			
0 2 2	土坑	中世	17	31		0 5 9	土坑	中世			
0 2 3	土壤幕	中世	16			0 6 0	土坑	中世			
0 2 4	土坑	中世	17	32		0 6 1	土坑	中世			
0 2 5	土坑	中世	17	32		0 6 2	溝	近世			
0 2 6	土坑	中世		33		0 6 3	溝	弥生			
0 2 7	土坑	中世				0 6 4	溝	弥生			
0 2 8	土坑	中世				0 6 5	土坑	中世	17		焼土坑
0 2 9	甕棺墓	弥生	7	22		0 6 6	溝	弥生			周溝状遺構
0 3 0	溝	中世				0 6 7	土坑	弥生			
0 3 1	溝	中世				0 6 8	土坑	中世	17	34	焼土坑
0 3 2	溝	中世				0 6 9	溝	弥生		2021.22	
0 3 3	溝	中世				0 7 0	土坑	中世		35	
0 3 4	掘立柱建物	中世	14	23		0 7 1	土坑	中世	17	35,36	
0 3 5	掘立柱建物	中世	14	23		0 7 2	土坑	中世			
0 3 6	掘立柱建物	中世	14	24		0 7 3	掘立柱建物	弥生	10		
0 3 7	掘立柱建物	中世	15	24		0 7 4	掘立柱建物	弥生			

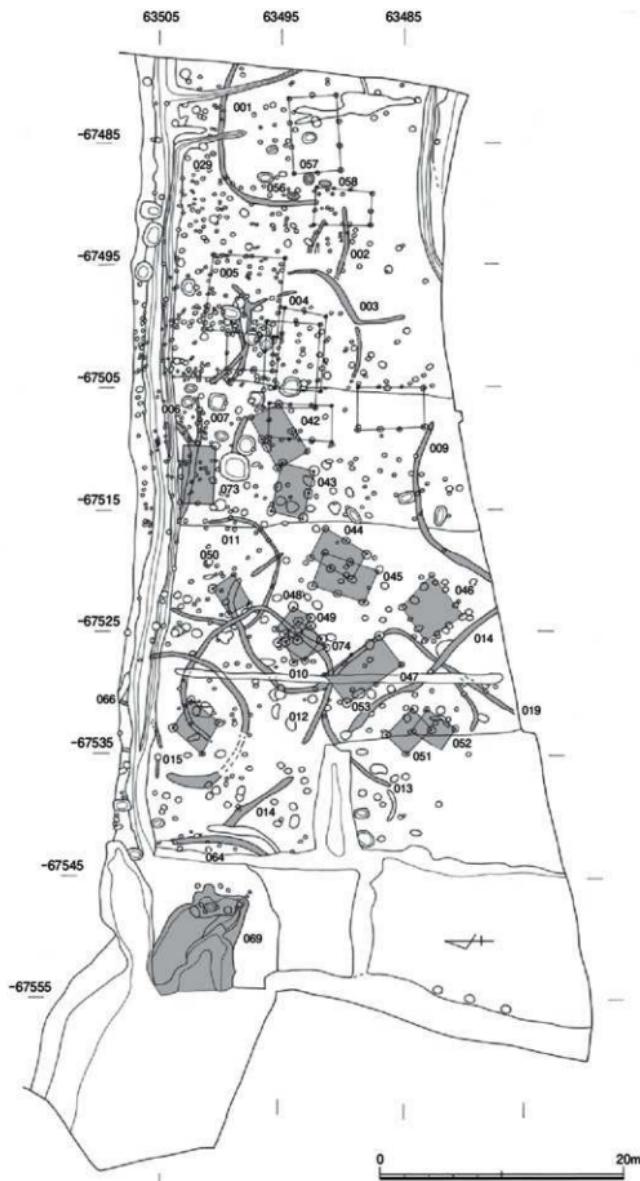


Fig. 5 大塚遺跡16次調査地点弥生時代遺構配置図 (1/400)

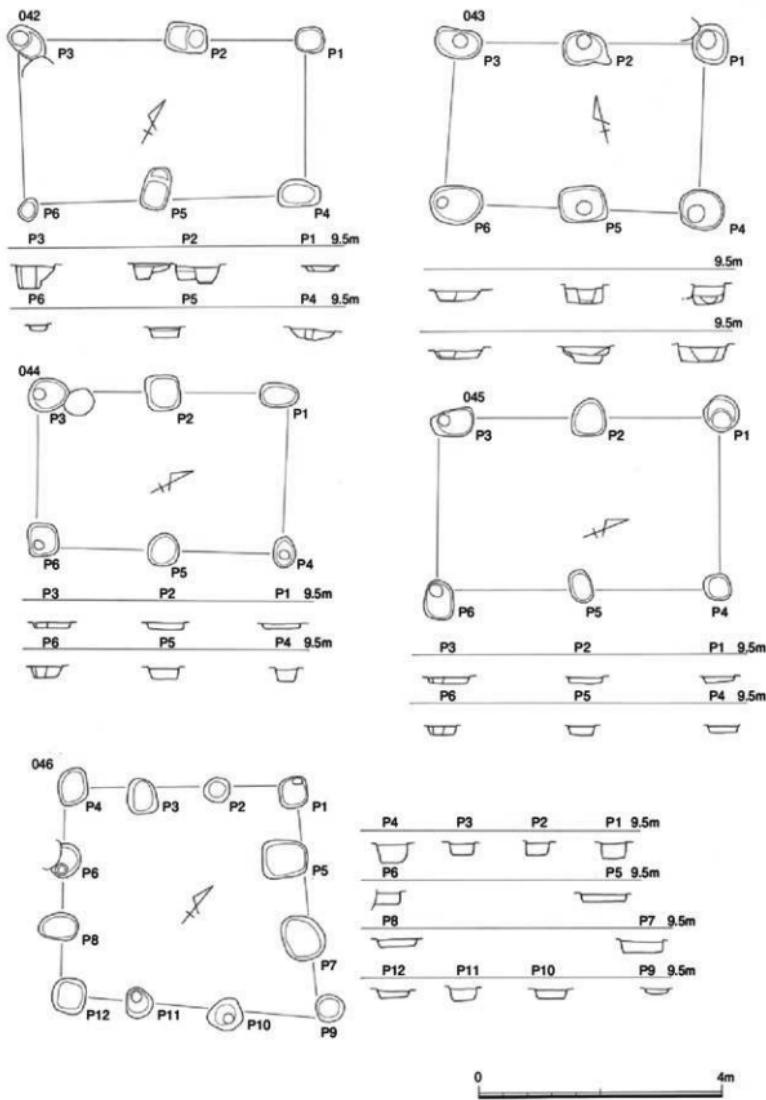


Fig. 6 掘立柱建物実測図 1 (1/80)

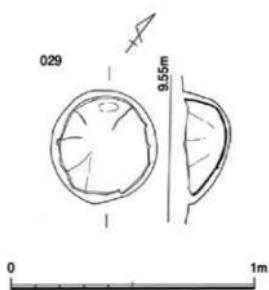
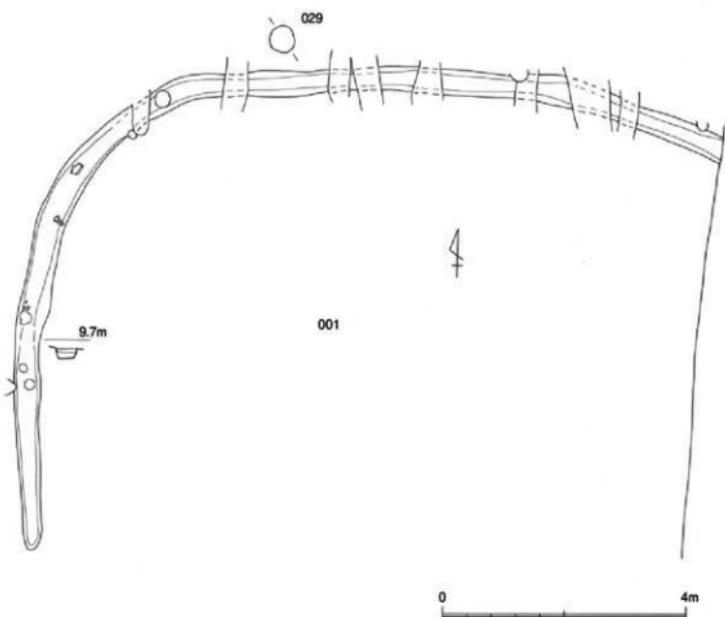
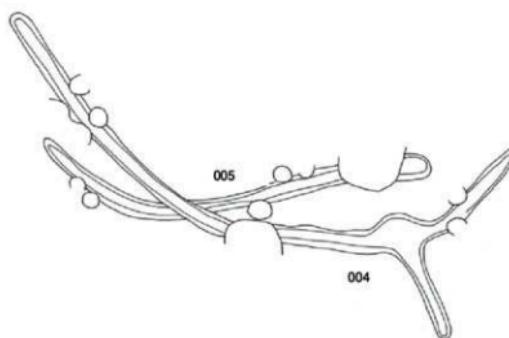
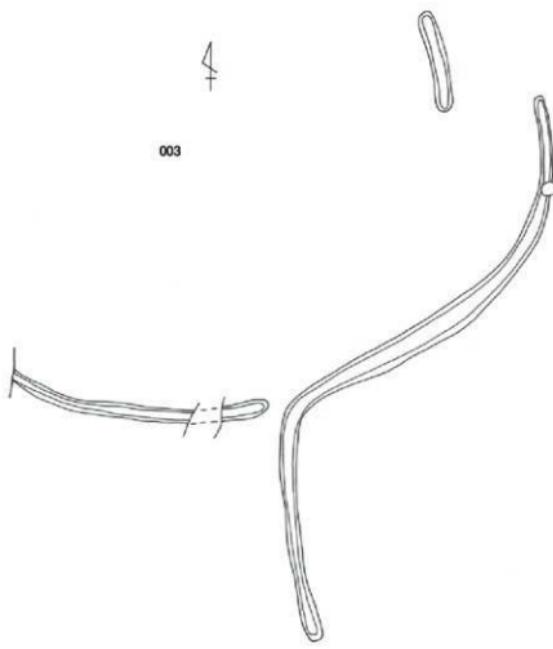


Fig. 7 周溝状遺構実測図 1 (1/80)

003~005



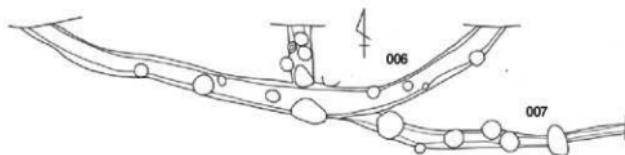
003



0 4m

Fig. 8 周溝状遺構実測図2 (1/80)

006.007



010~012.050

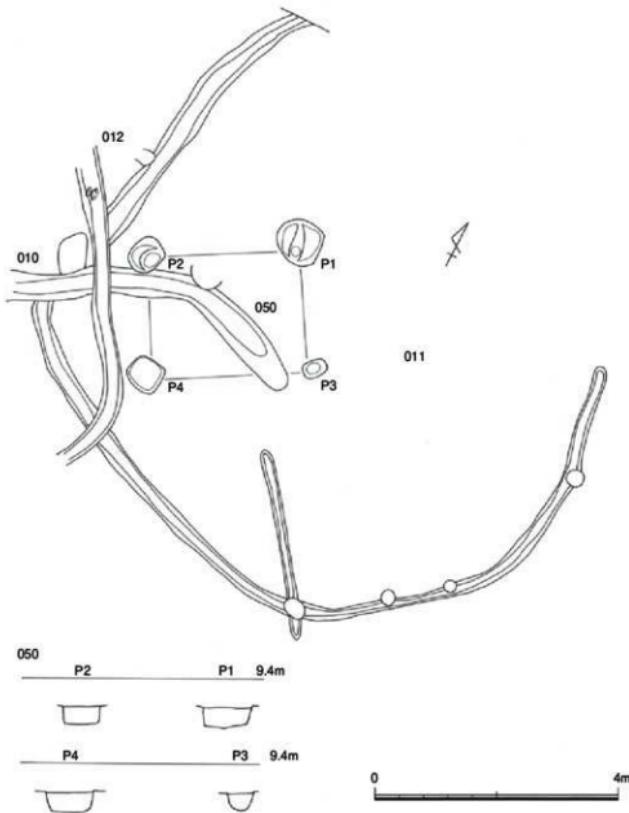


Fig. 9 周溝状遺構実測図3 (1/80)

010.012.015

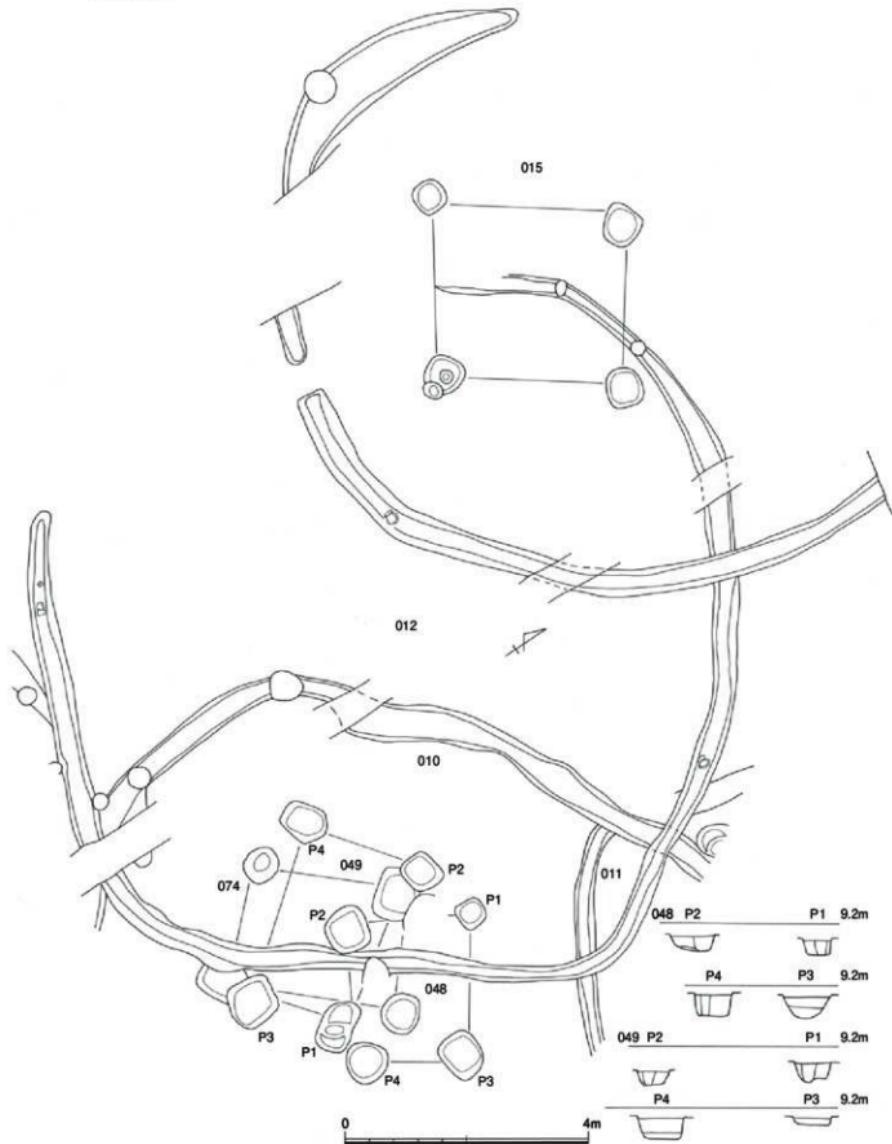


Fig.10 周溝状遺構実測図4 (1/80)

013,014

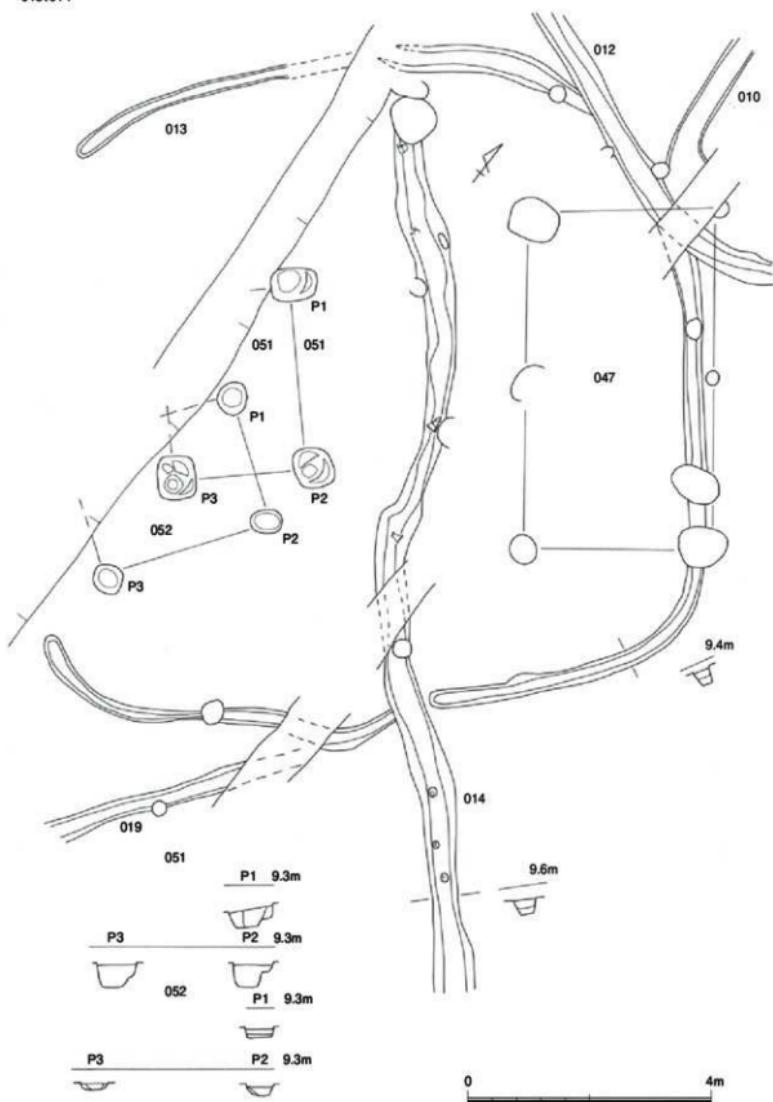


Fig.11 周溝状遺構実測図 5 (1/80)

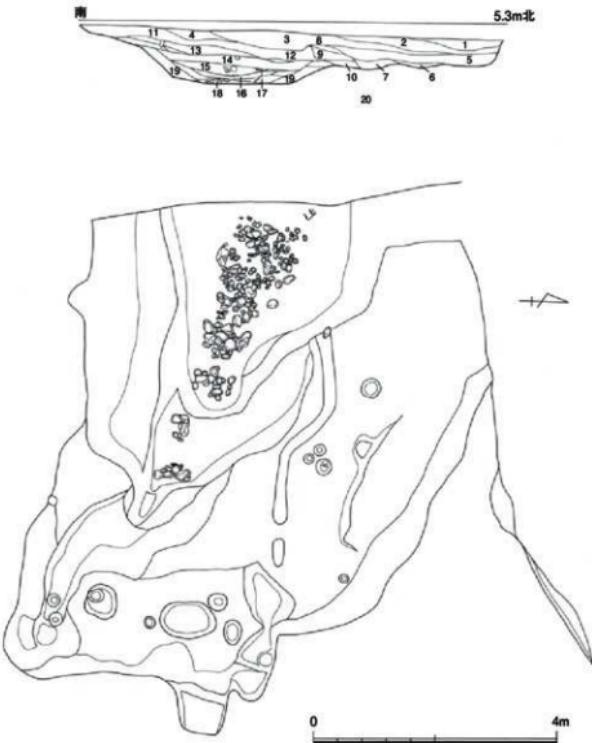


Fig.12 SX069遺構実測図 (1/100)

土層名

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1 赤褐色砂質土（鉄分沈着） | 11 やや暗い青灰色粘質土 |
| 2 嗜灰褐色粘質土 | 12 嗜灰色粗砂 |
| 3 灰褐色粘質土（やや砂質） | 13 黄灰色粘質土 |
| 4 嗜灰褐色粘質土 | 14 嗜青灰色粘質土（炭はじり、土器を少量含む） |
| 5 やや暗い灰褐色粘質土 | 15 嗜黄褐色粘質土（土器を多量に含む） |
| 6 黄灰色砂質土 | 16 嗜黄灰色粘質土（粗砂はじり） |
| 7 黄灰色粗砂 | 17 嗜黄灰色粘質土 |
| 8 嗜黄褐色粘質土（やや砂質） | 18 嗜灰色粗砂 |
| 9 嗜黄褐色粘質土 | 19 緑灰色粘質土 |
| 10 嗜黄灰色粗砂 | 20 黄灰色粘質土（地山） |

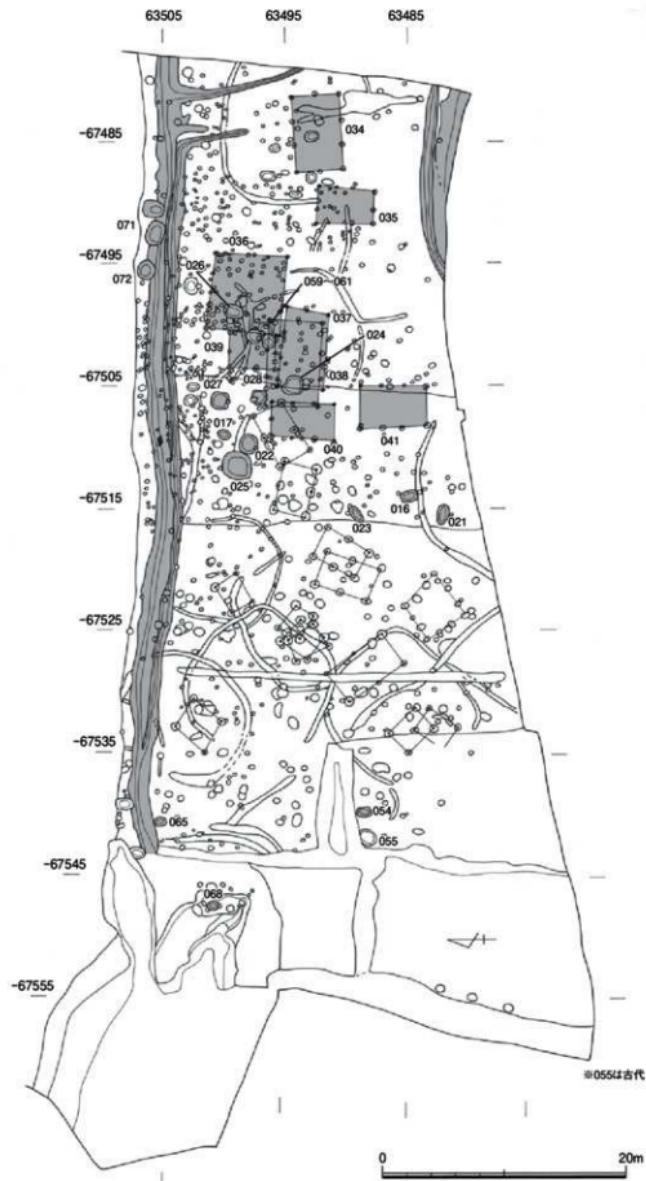


Fig.13 大塚遺跡16次調査地点中世遺構配置図 (1/400)

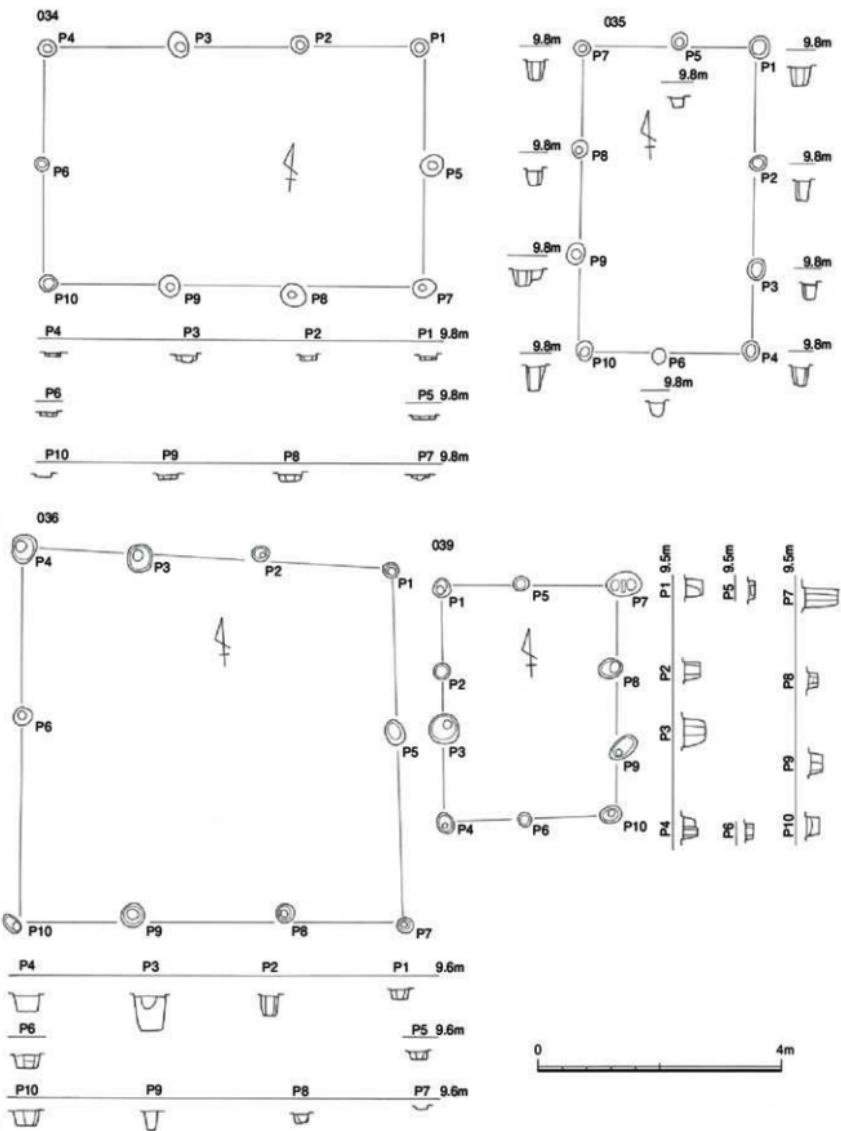


Fig.14 掘立柱建物実測図 1 (1/80)

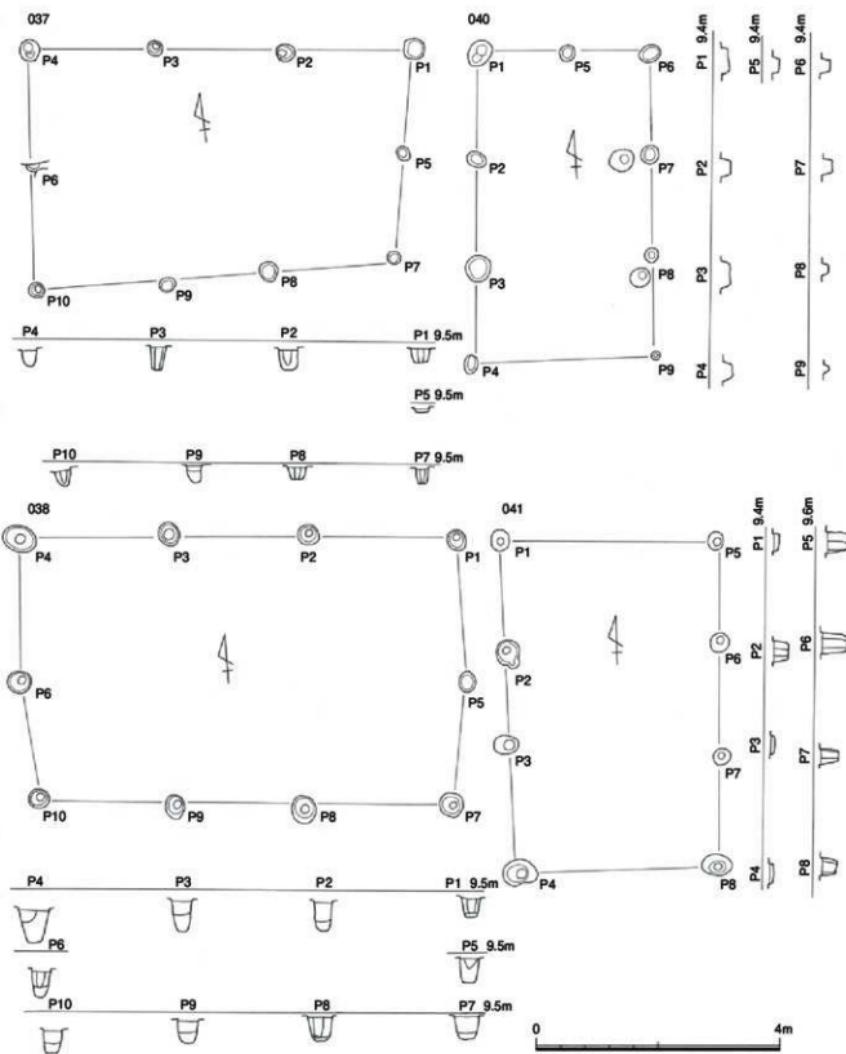


Fig.15 掘立柱建物実測図 2 (1/80)

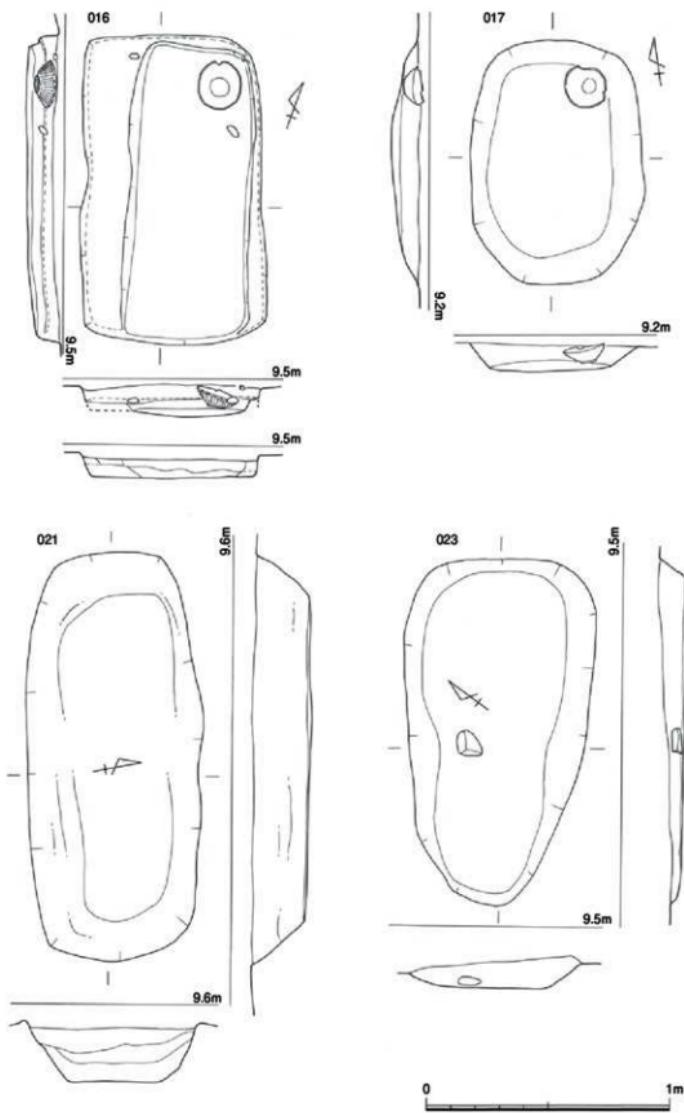


Fig.16 木棺墓、土壤墓実測図 (1/20)

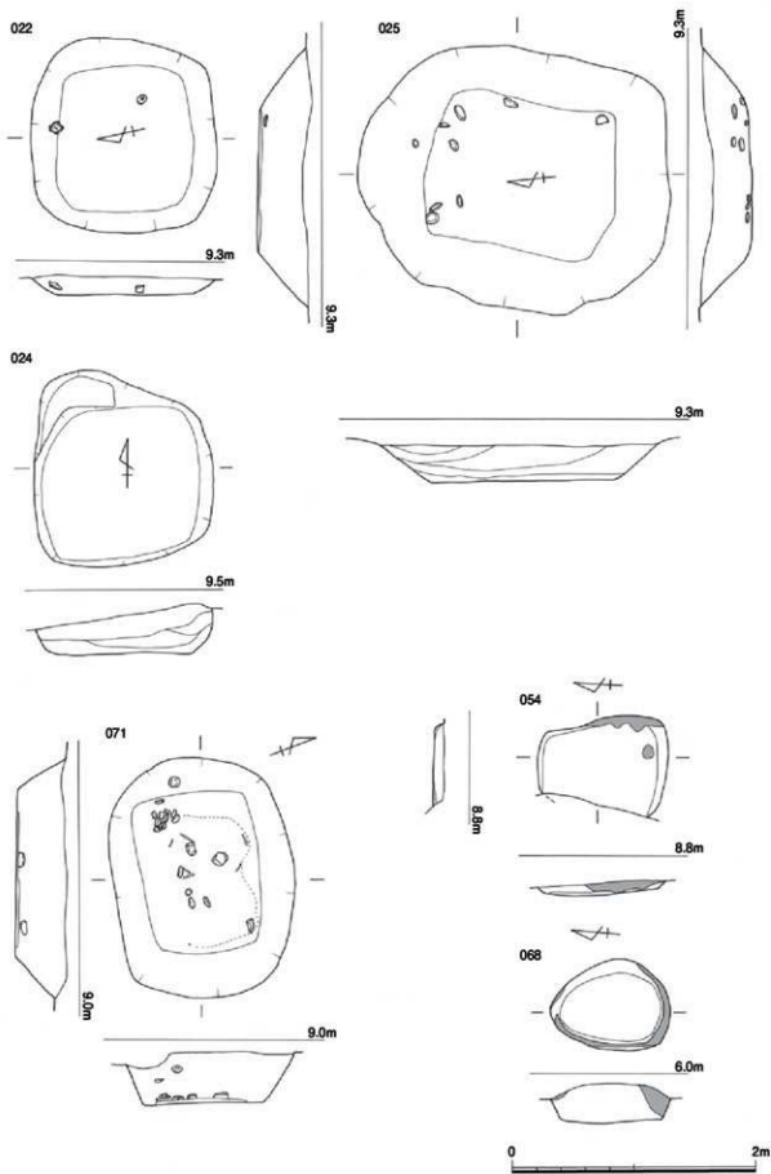


Fig.17 土坑実測図 (1/40)

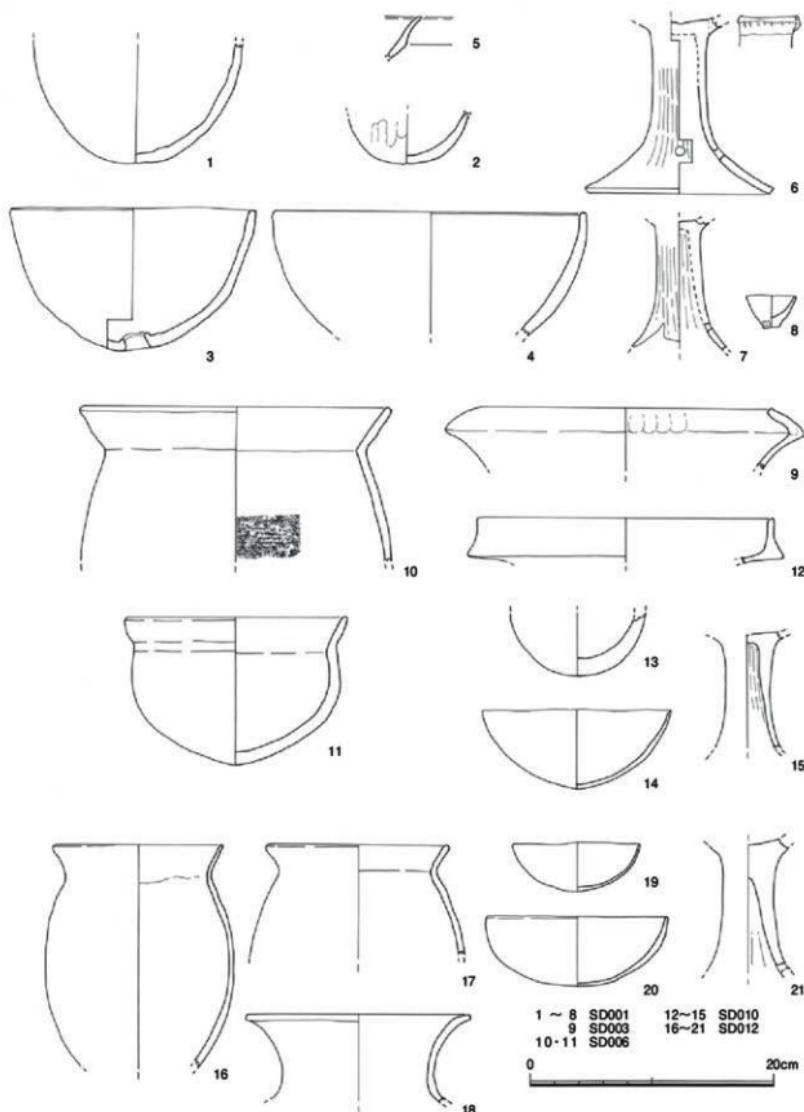


Fig.18 周溝状遺構出土遺物実測図 1 (1/4)

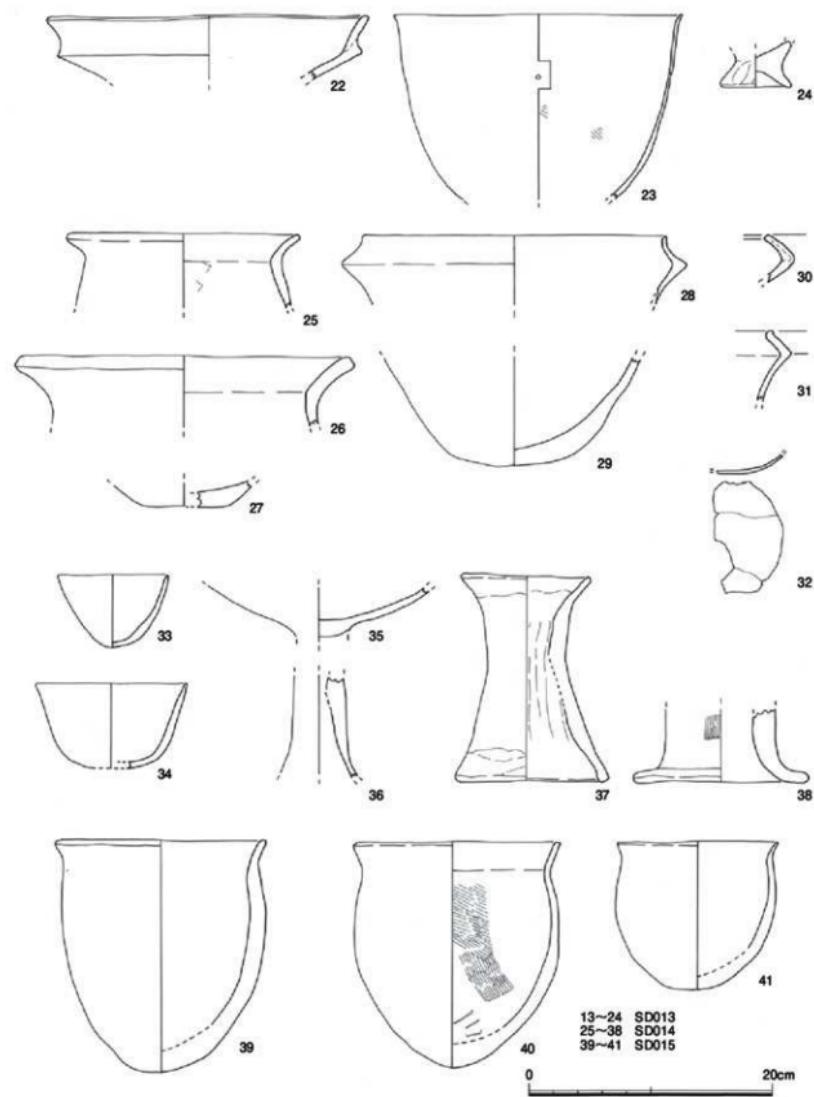


Fig.19 周溝状遺構出土遺物実測図 2 (1/4)

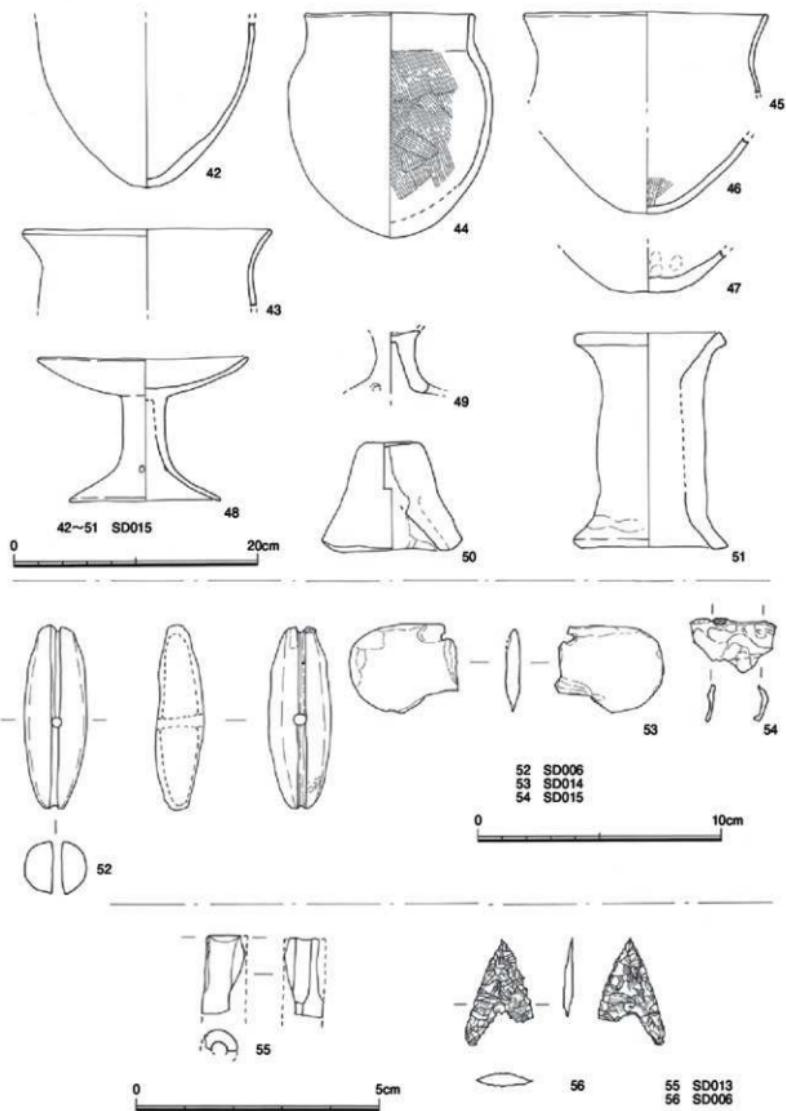


Fig.20 周溝状遺構出土遺物実測図3 (1/4、1/2、1/1)

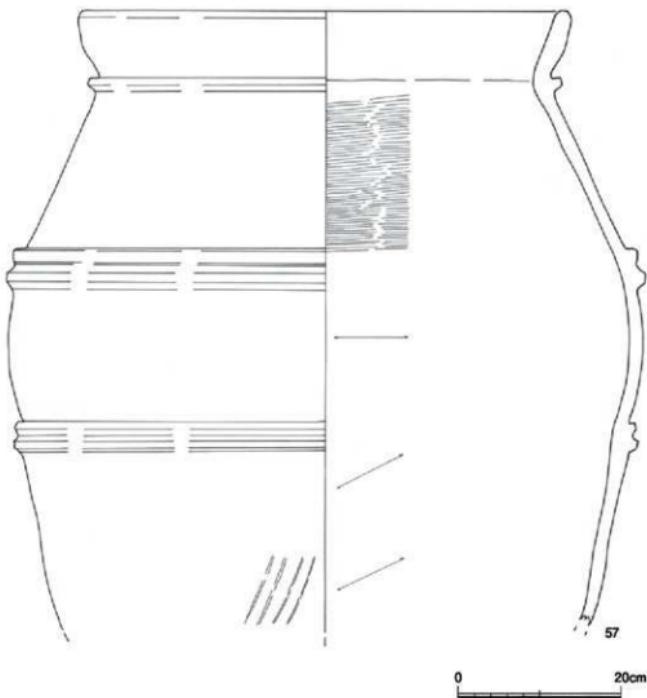


Fig.21 SX069出土遺物実測図 1 (1/6)

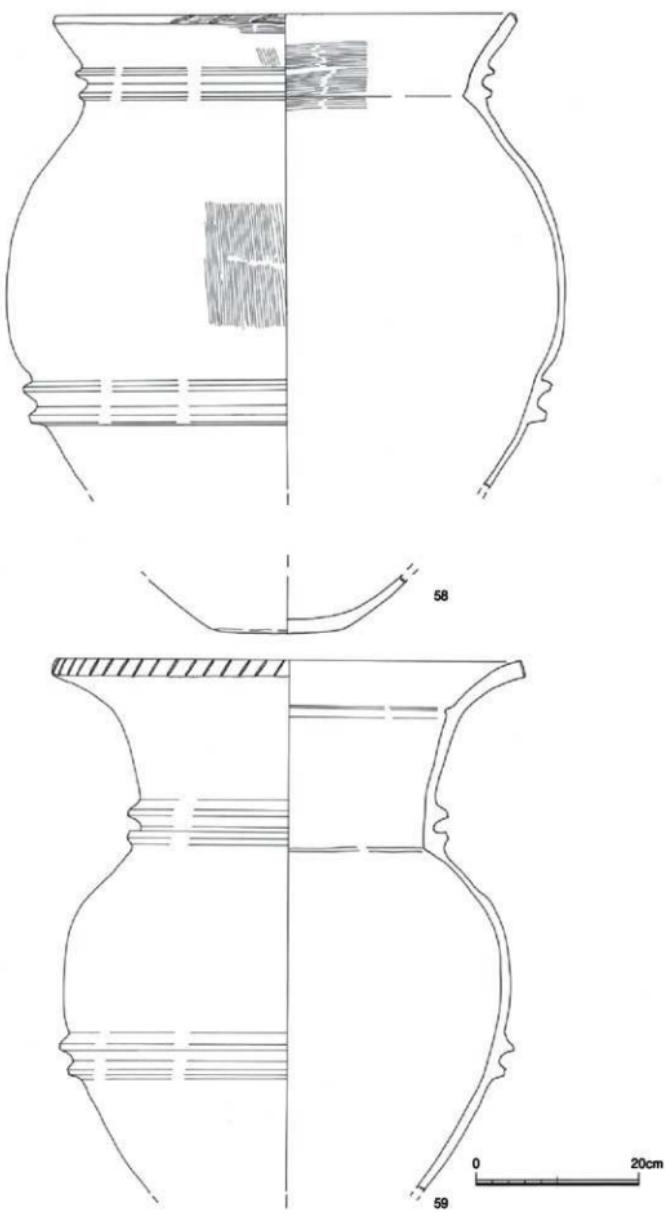


Fig.22 SX069出土遺物実測図2 (1/6)

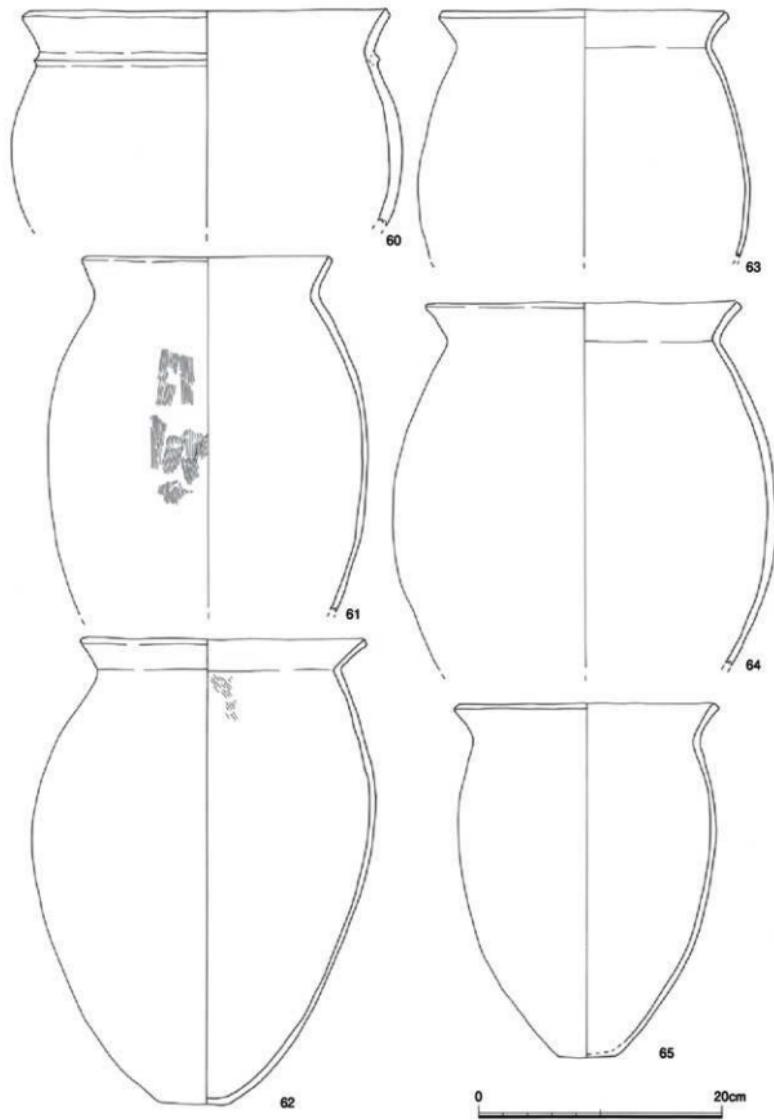


Fig.23 SX069出土遺物実測図3 (1/4)

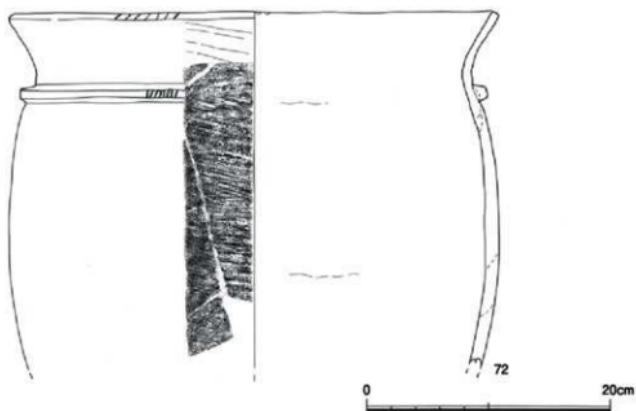
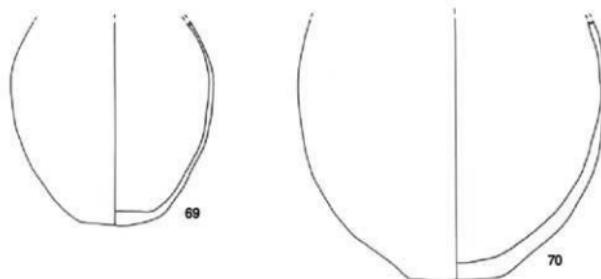
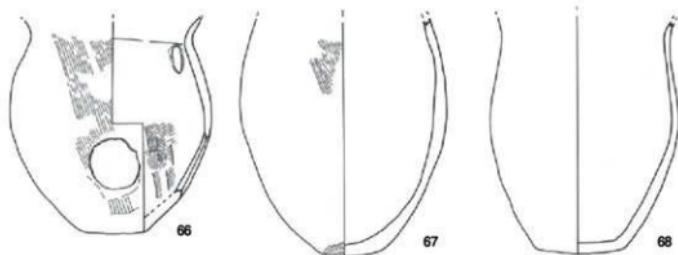


Fig.24 SX069出土遺物実測図4 (1/4)

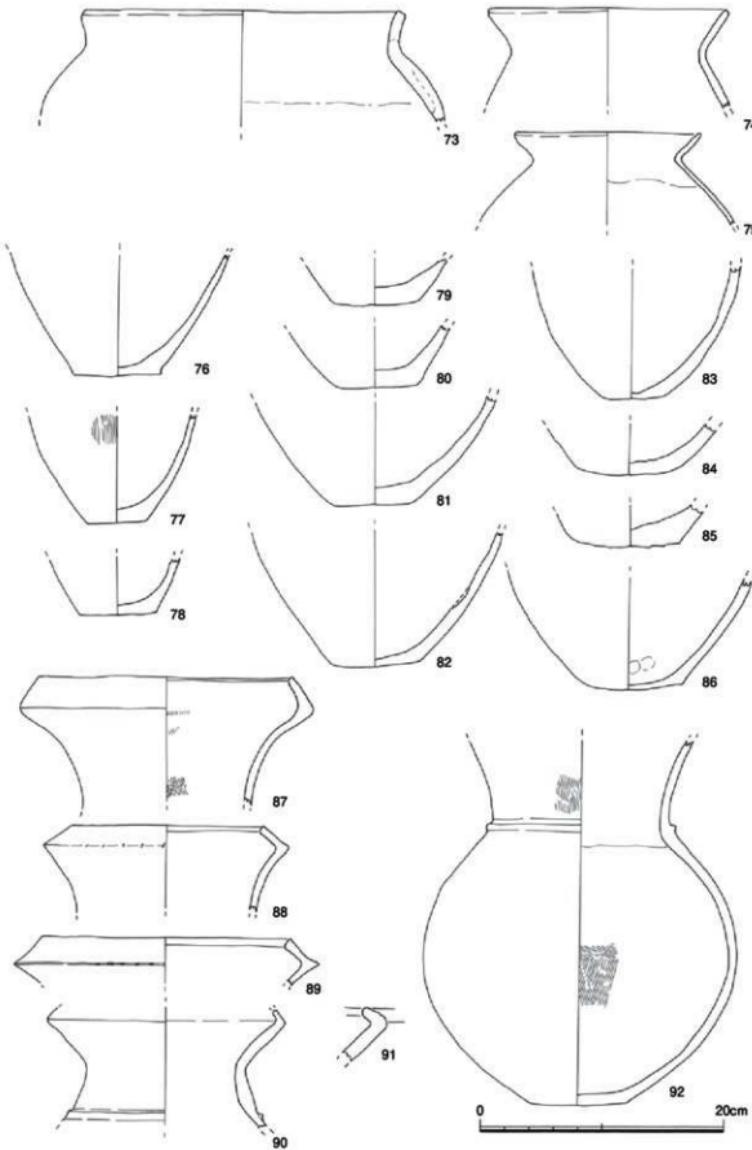


Fig.25 SX069出土遺物実測図5 (1/4)

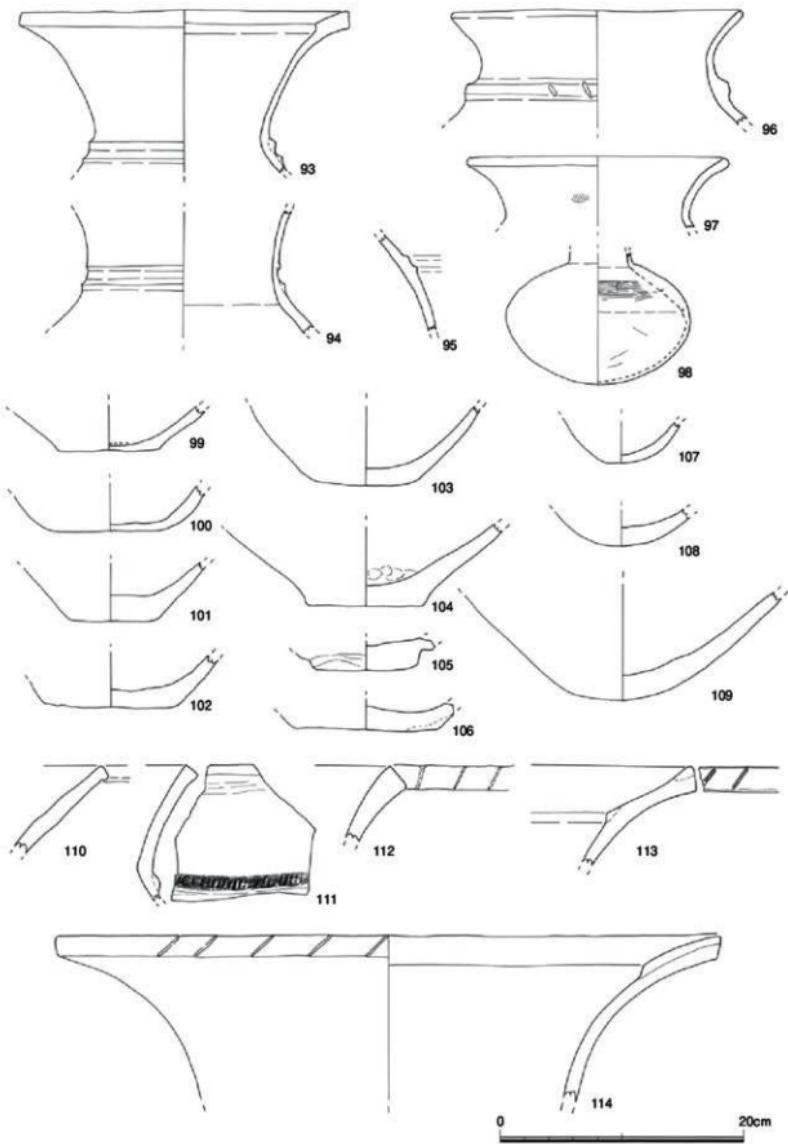


Fig.26 SX069出土遺物実測図 6 (1/4)

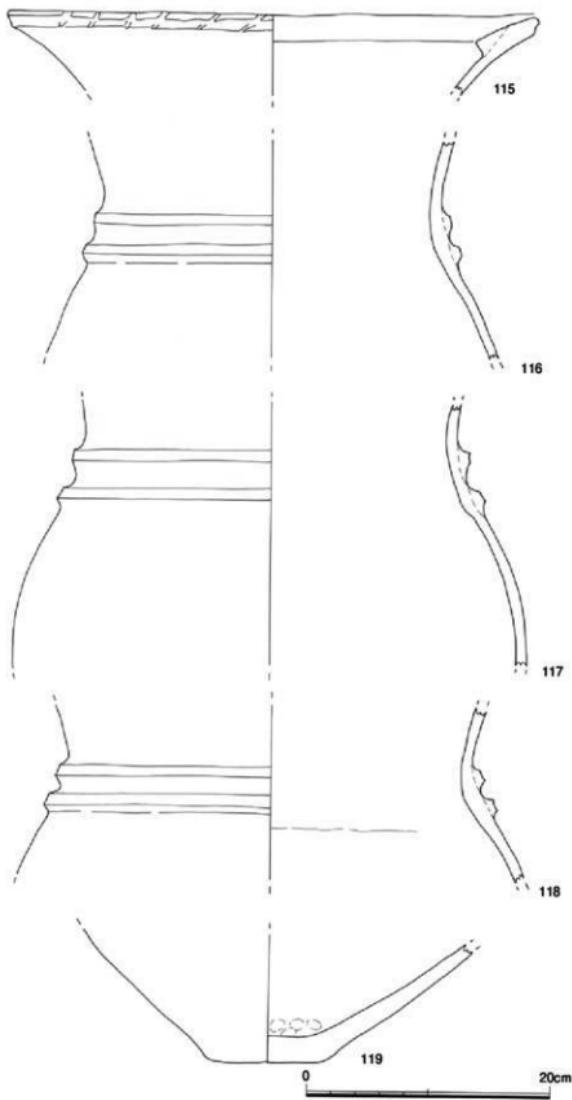


Fig.27 SX069出土遺物実測図7 (1/4)

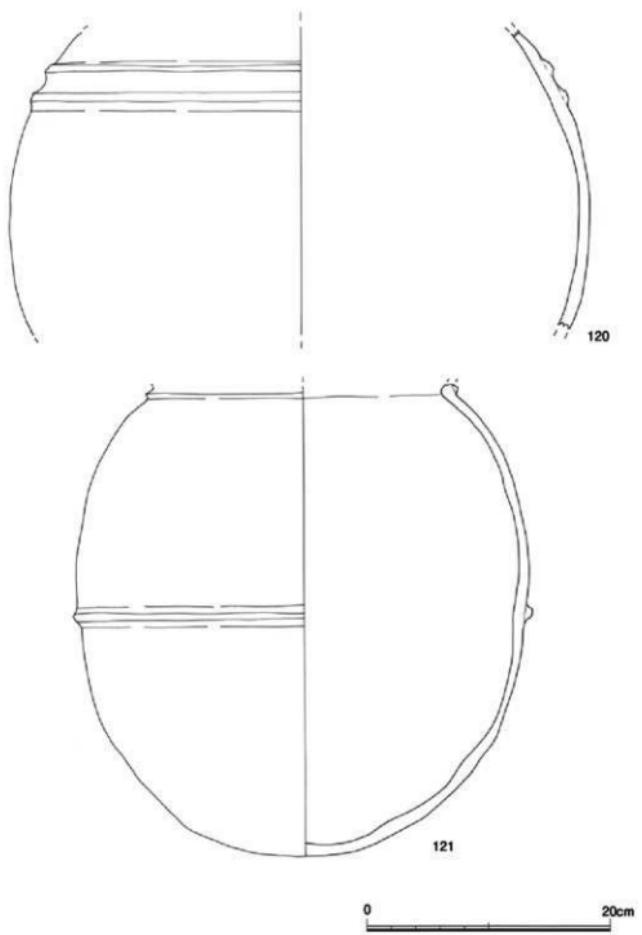


Fig.28 SX069出土遺物実測図 8 (1/4)

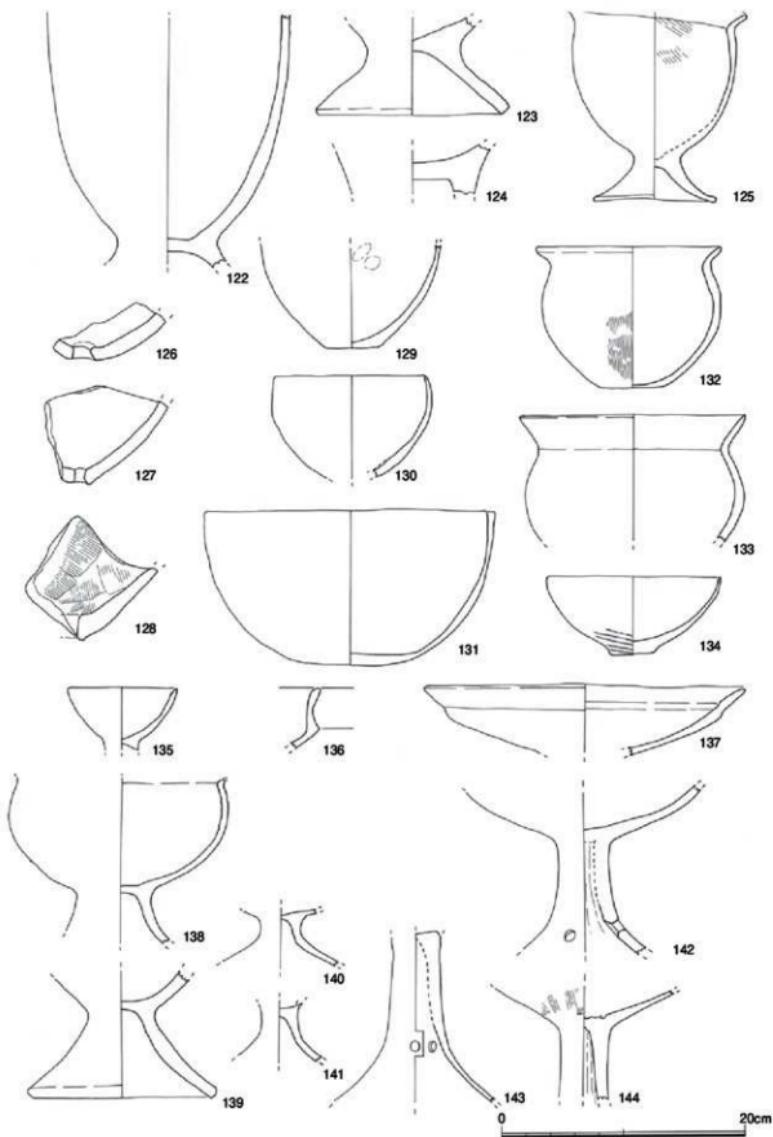


Fig.29 SX069出土遺物実測図9 (1/4)

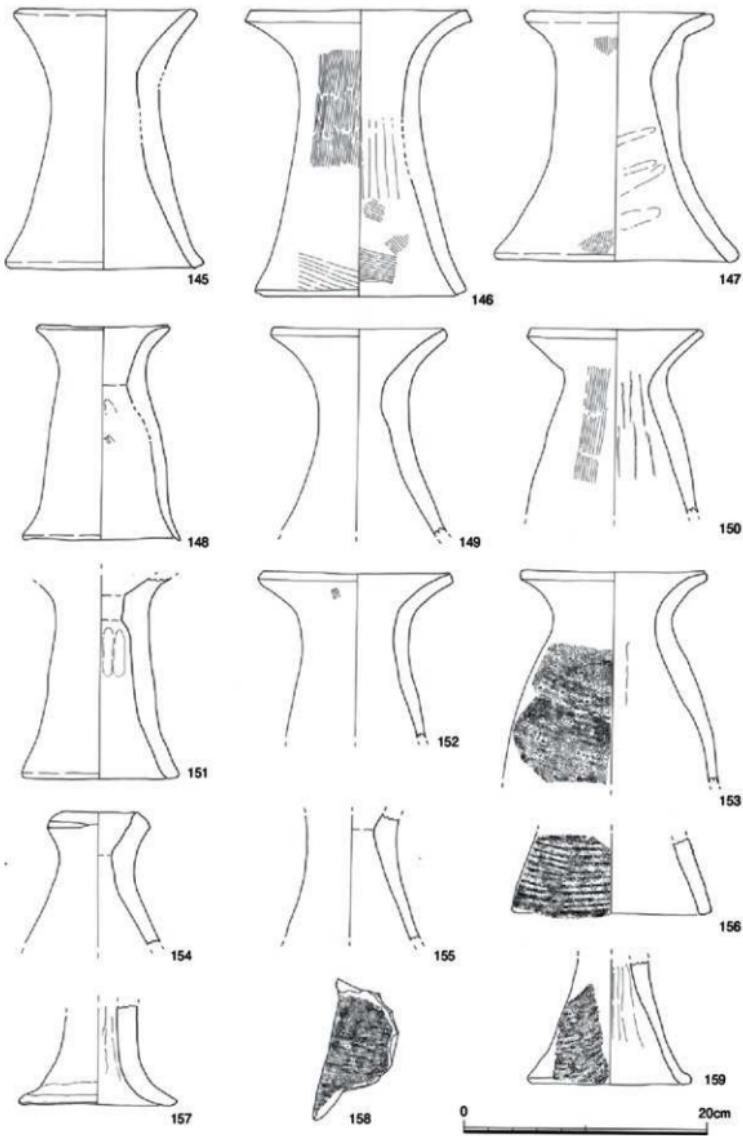


Fig.30 SX069出土遺物実測図10 (1/4)

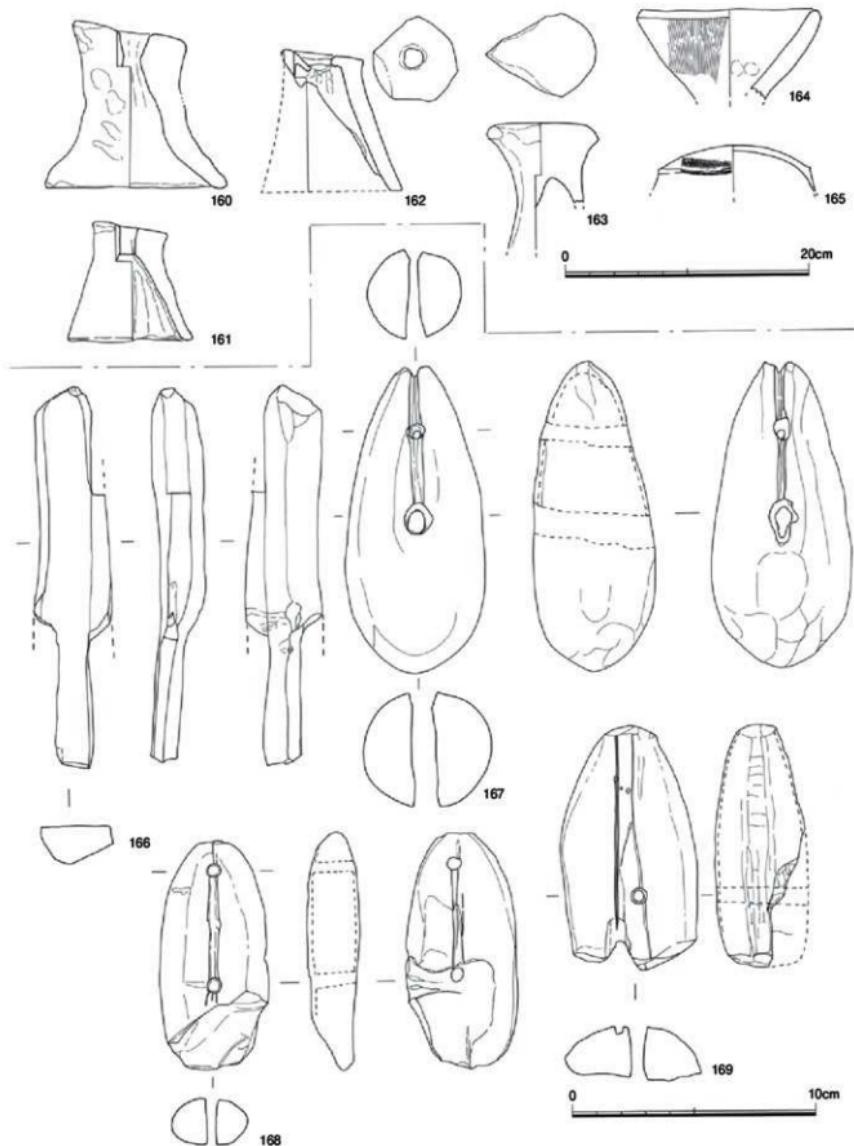


Fig.31 SX069出土遺物実測図11 (1/4、1/2)

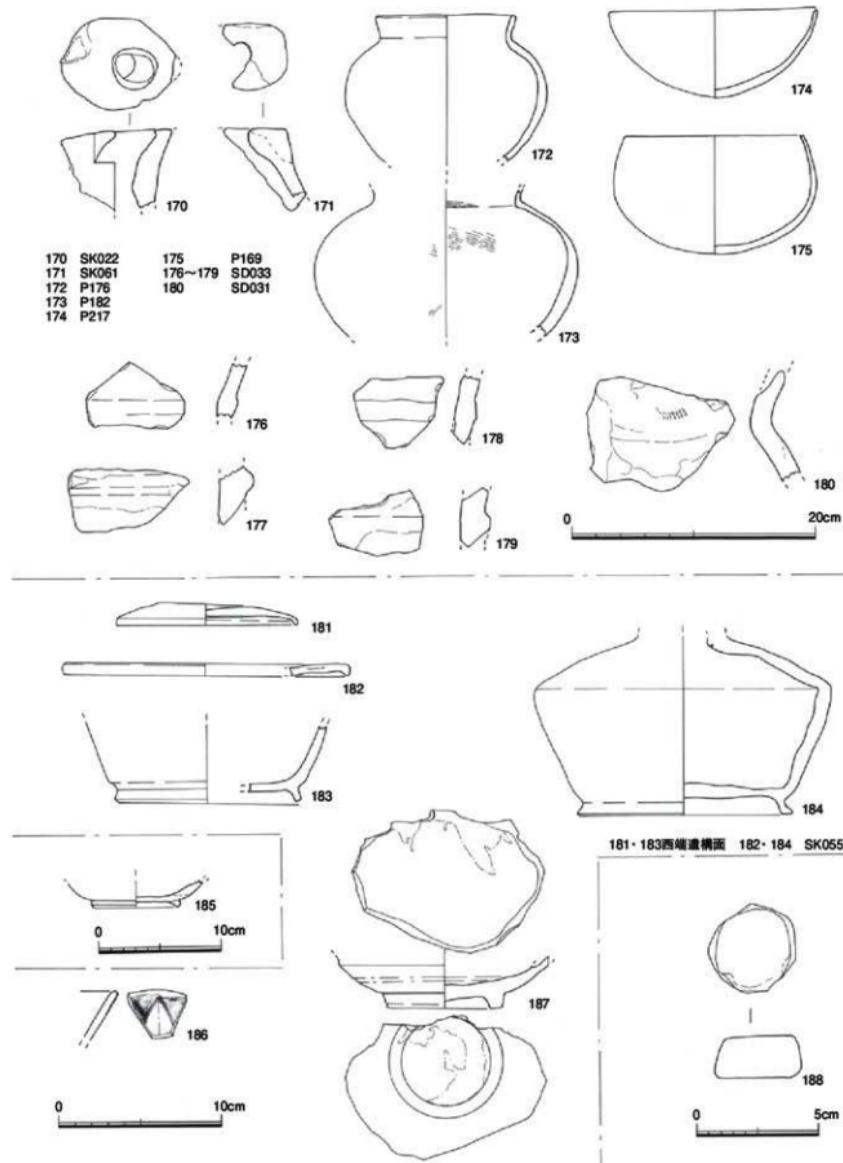
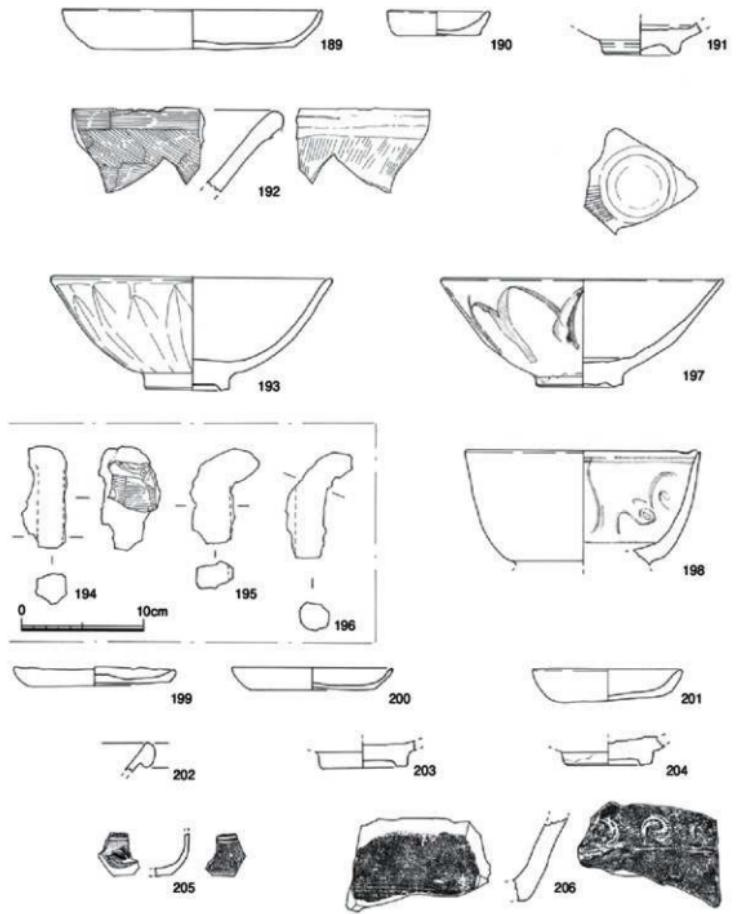


Fig.32 遺構出土遺物実測図 1 (1/4)



189 SB038-P7
 190 P62
 191 P102
 192 P73
 193~196 SX016
 197 SX017
 198 SK022

Fig.33 遺構出土遺物実測図2 (1/4)

0 10cm

Tab.3 大塚16次出土遺物觀察表

件目 (FIG.)	回復 (PL.)	番号	地区・位置・遺構	遺物の種類	器形	法量(高さ/口径) (cm)	特徴	
18	1	001 c ~ d	No1	陶生土器	甕	-/-/-	底部上半を欠く。丸底。褐色。	
18	2	001 c	陶生土器	鉢	-/-/-	底部P.丸底。褐色~にぶい褐色		
18	37	3	001 c ~ d + e	No2	陶生土器	鉢	11.5/20.0~	口縁~底部残存。底部に焼成印の存在。浅黄褐色
18	4	001 c ~ d	No3	陶生土器	鉢	-/25.5/-	底部を欠く。浅黄褐色	
18	5	001 c ~ d	No2	陶生土器	高环	-/-/-	環状口縁。褐色~明黄褐色	
18	6	001 c ~ d + e	No5	陶生土器	高脚甕	-/-/15.4	外腹を欠く。外腹と脚部の間に縦合の跡が見られる。褐色~灰黄褐色	
18	7	001 c	陶生土器	高环	-/-/-	環状口縁。褐色~灰黄褐色		
18	27	8	001 b	陶生土器	ミニチュア土器	26.4/1.3	13倍P.浅黄褐色	
18	9	003 a	陶生土器	甕	-/23/-	複合口縁片。褐色		
18	10	006 b	No4	陶生土器	甕	-/25/-	13倍~底部P.外縁にヨコ方向のタタキ。褐色	
18	11	006 b No3	陶生土器	鉢	12.0/18.2~	13倍~底部が残存。やや中央5周。褐色		
18	12	010 a	陶生土器	甕	-/24/-	複合口縁片。褐色		
18	13	010 a	陶生土器	鉢	-/-/-	底部P.丸底。浅黄褐色~褐色		
18	14	010 b	陶生土器	鉢	-/13.5/-	13倍~底部が残存。褐色~決済色~黒褐色		
18	15	010 b	陶生土器	高环	-/-/-	脚部片。底部の3ヶ所に円形の通かし孔(一部残る)。浅黄褐色		
18	16	012 c	陶生土器	甕	-/13.8/-	底部を欠く。褐色~黑色~黒褐色		
18	17	012 d	陶生土器	甕	-/13.0/-	13倍片。浅黄色~黃褐色。黒斑あり		
18	18	012 c	陶生土器	甕	-/18.3/-	13倍片。褐色		
18	19	012 c	陶生土器	鉢	-/10.3/-	13倍~底部残存。小型品。丸底。浅黄褐色		
18	37	20	012 c	陶生土器	鉢	5.7/14.8~	13倍~底部残存。丸底。浅黄褐色	
18	21	012 a	陶生土器	高环	-/-/-	脚部片。底部の3ヶ所に円形の通かし孔(一部残る)。褐色		
19	22	012 c	陶生土器	甕	-/26.4/-	複合口縁片。褐色~褐色~黄褐色		
19	23	013 e	陶生土器	鉢	-/23.4/-	底部を欠く。側面に穿孔あり。褐色		
19	24	013 d	陶生土器	ミニチュア土器	-/-/5.8	脚部断片。口縁を欠く。にぶい黄褐色		
19	25	014 b	No3	陶生土器	甕	-/19.0/-	13倍片。褐色	
19	26	014 a ~ b ~ e ~ t	陶生土器	甕	-/27.6/-	13倍片。褐色やや外反する。にぶい黄褐色		
19	27	014 a ~ b ~ e ~ t	陶生土器	甕	-/-/6.9	底盤片。やや丸味を帯びる。褐色		
19	28	014 a	陶生土器	甕	-/24.7/-	複合口縁片。褐色		
19	29	014 a ~ No2	陶生土器	甕	-/-/-	底盤片。丸底。大型品。浅赤褐色~にぶい褐色~灰褐色		
19	30	014 d	陶生土器	甕	-/-/-	複合口縁片。にぶい褐色		
19	31	014 c ベルト	陶生土器	甕	-/-/-	複合口縁片。明黄褐色。黒斑あり		
19	32	014 a ベルト	陶生土器	鉢	-/-/-	底盤片。小型品の丸底か。褐色		
19	33	014 a ~ b ~ e ~ t	陶生土器	鉢	5.8/8.9~	13倍~底盤片。黄褐色。黒斑あり		
19	34	014 a ~ b ~ e ~ t	陶生土器	鉢	-/12.3/-	底部を欠く。浅黄褐色。黒斑あり		
19	35	014 b	No3	陶生土器	高环	-/-/-	底盤片。褐色。にぶい褐色~にぶい褐色	
19	36	014 c	陶生土器	高环	-/-/-	脚部。にぶい黄褐色		
19	37	35	014 c	陶生土器	器台	16.7/10.5/12.5	13倍~脚部が残存。褐色~浅黄褐色~灰褐色	
19	38	014 c	陶生土器	器台	-/-/14.2	脚部片。褐色		
19	39	20	015 b	No1	陶生土器	甕	18.7/17.1/-	13倍~底部残存。ほぼ丸底。浅黄褐色~にぶい褐色~黒褐色
19	40	40	015 c	No2 + No4	陶生土器	甕	18.2/16.8/-	13倍~底部残存。丸底や球形の底部。にぶい褐色。黒斑あり
19	41	41	015 c	No1	陶生土器	甕	11.9/13.0/-	13倍~底部残存。丸底。浅黄褐色~黒斑あり
20	42	015 c	No3	陶生土器	甕	-/-/-	側面上半を欠く。丸底や球形の底部。黄褐色。黒斑あり	
20	43	015 c	陶生土器	甕	-/20.4/-	13倍片。褐色やや外反する。浅黄褐色。黒斑あり		
20	44	015 d 球土中	陶生土器	甕	-/13.8/-	13倍~底部残存。丸底。にぶい黄褐色。黒斑あり		
20	45	015 d 球土中	陶生土器	甕	-/20.0/-	褐色片。丸底。にぶい褐色		
20	46	015 d	陶生土器	甕	-/-/-	底盤片。丸底や球形。浅黄褐色~褐色		
20	47	015 d	陶生土器	甕	-/-/-	底盤片。丸底や球形。浅黄褐色~褐色		
20	48	015 h 東端	陶生土器	高环	11.7/17.2/12.3	13倍を欠く。脚部の3ヶ所に円形の通かし孔。褐色		
20	49	015 s	陶生土器	高环	-/-/-	脚部片。底部の3ヶ所に円形の通かし孔。褐色		
20	50	015 c	No5	陶生土器	支脚	8.8/4.5/11.4	受け盤~底盤が残存。褐色	
20	51	015 d 球土中	陶生土器	器台	17.3/11.7/12.5	13倍~底部残存。褐色		
20	52	006 b No10	石製品	石溝	7.5/26/19	基盤部。中位に穿孔。羅斗内に一条の溝が並ぶ。滑石		

井戸名 (FIG.)	位置 (PL.)	番号	地区・位置・過機	過機の種類	形状	法量(高さ/口径 cm)	特徴
20		53	034 a N2	石器	石壺	-/36/0.5	半分に欠損。穿孔が1ヶ所残る
20		54	033 b	鉄製品	不明		
20	37	55	033 b	石器	管玉	-/92/-	半分に欠損している。表面側の穿孔。管玉
20	37	56	006 a	石器	石壺	21/12/0.2	管部の一方を欠く。二等辺三角形。ヌブリは僅い。管部直隣端
21	38	57	069 地土中	微生物土器	壺	-/60/-	口縁一部欠け。口縁付近板、側部の上部・下部に二条の斜面直角の突起。大型
22	38	58	069 畳下層 ①	微生物土器	壺	-/48/-	口縁一部欠け。側部下部は斜面しない。口縁付近板。側部の下部に二条の斜面直角の突起。大型品。口縁一部に欠け。褐色
22	38	59	069 畳下層 ②	微生物土器	壺	-/58/-	口縁一部欠け。側部下部に斜面直角。大型品。口縁付近板
23	60	60	069 畳下層	微生物土器	壺	-/20/-	口縁一部に残存。口縁下部に斜面直角の突起。口縁付近板。側部の下部に二条の斜面直角の突起。大型品。口縁付近板
23	61	61	069 畳下層(同一個体)	微生物土器	壺	-/20/-	口縁一部に残存。口縁下部に斜面直角の突起。口縁付近板。側部の下部に二条の斜面直角の突起。大型品。口縁付近板
23	38	62	069 畳下層	微生物土器	壺	38.1/23.5/2	口縁一部に残存。口縁下部に斜面直角の突起。口縁付近板。側部の下部に二条の斜面直角の突起。大型品。口縁付近板
23	63	63	069 畳下層	微生物土器	壺	-/23.7/-	側部下半を欠く。口縁一部に残存。口縁下部に斜面直角の突起。口縁付近板。側部の下部に二条の斜面直角の突起。大型品。口縁付近板
23	64	64	069 畳下層(同一個体)	微生物土器	壺	-/25.8/-	口縁一部に残存。口縁下部に斜面直角の突起。口縁付近板。側部の下部に二条の斜面直角の突起。大型品。口縁付近板
23	38	65	069 畳下層 ③	微生物土器	壺	28.8/21.6/4.8	口縁一部に残存。口縁付近板
24	38	66	069 畳下層	微生物土器	壺	-/50/-	口縁一部に残存。側面下部に側面後方の穿孔。口縁付近板付近にも穿孔あり。浅黄色～黒褐色
24	38	67	069 地土中	微生物土器	壺	-/5/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。褐色～口縁一部に残存。口縁付近板
24	38	68	069 畳下層(下部)	微生物土器	壺	19.2/-/7.5	側面を欠く。丸底気味の底盤。褐色～口縁一部に残存。口縁付近板
24	69	69	069 前下層(西側)	微生物土器	壺	-/5/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。明黄色～黄褐色
24	70	69	069 地土中	微生物土器	壺	-/7.5/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。明黄色～黄褐色
24	71	69	069 畳下層	微生物土器	壺	-/31.9/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。明黄色～黄褐色
24	72	69	069 畳下層	微生物土器	壺	-/40.0/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。外縁はヨコ方向のタキ。内面はナチュラルな色
25	73	69	069 畳下層	微生物土器	壺	-/26.5/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。浅黄色～黒褐色
25	74	69	069 畳下層	微生物土器	壺	-/136/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。浅黄色
25	75	69	069 畳下層	土壤器	壺	-/15.3/-	口縁一部に斜面直角の突起。内外面ともナチュラル。有留型變化。浅黄色～灰青色
25	38	76	069 畳下層	微生物土器	壺	-/5.2/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。浅黄色～灰青色
25	77	069 畳下層(下部調)	微生物土器	壺	-/5/-	側面を欠く。丸底気味の底盤。浅黄色～灰青色	
25	78	069 畳下層	微生物土器	壺	-/6.3/-	底盤部。平底。口縁一部に斜面直角の突起。褐色	
25	79	069 畳下層	微生物土器	壺	-/6.7/-	底盤部。やや丸みを帯びる。褐色	
25	80	069 畳下層	微生物土器	壺	-/6.8/-	底盤部。やや丸みを帯びる。褐色	
25	81	069 北側立合場	微生物土器	壺	-/6.1/-	底盤部。丸みを帯びた底盤。暗灰黃色～浅青褐色	
25	82	069 地土中	微生物土器	壺	-/5/-	側面下部。丸底気味の底盤。褐色	
25	38	83	069 畳下層	微生物土器	壺	-/4.5/-	側面下半部。丸底気味の底盤。褐色～口縁一部に斜面直角の突起。褐色
25	84	069 畳下層	微生物土器	壺	-/8.2/-	底盤部。丸底気味の底盤。褐色	
25	85	069 畳下層	微生物土器	壺	-/8.5/-	底盤部。丸底気味の底盤。褐色	
25	86	069 畳下層	微生物土器	壺	-/5/-	底盤部。丸底気味の底盤。褐色	
25	87	069 畳下層	微生物土器	壺	-/20.7/-	複合口縁片。底盤部の口縁付近に斜面直角の突起。丸底気味の底盤。褐色	
25	88	069 畳下層 ①	微生物土器	壺	-/15.7/-	複合口縁片。底盤部に丸み。浅黄色	
25	89	069 畳下層	微生物土器	壺	-/20.3/-	複合口縁片。底盤部に丸み。浅青褐色	
25	90	069 地土中	微生物土器	壺	-/5/-	複合口縁片。底盤部を欠く。褐色	
25	91	069 畳下層	微生物土器	壺	-/5/-	複合口縁片。褐色	
25	28	92	069 畳下層	微生物土器	壺	-/8.1/-	口縁一部。底盤部の口縁付近に斜面直角の突起。丸底気味の底盤。褐色
26	93	069 畳下層 ②	微生物土器	壺	-/27.0/-	複合口縁片。口縁内部は底盤。底盤の口縁付近に二条の斜面直角の突起。褐色	
26	94	069 畳下層	微生物土器	壺	-/5/-	複合口縁片。口縁内部に斜面直角の突起。褐色	
26	95	069 畳下層	微生物土器	壺	-/5/-	底盤部。斜面直角の突起。褐色	
26	96	069 地土中	微生物土器	壺	-/23.8/-	口縁一部。底盤部を欠く。褐色	
26	97	069 畳下層	微生物土器	壺	-/21.5/-	口縁片。浅青褐色	
26	28	98	069 畳下層 ③	微生物土器	壺	-/5/-	底盤部を欠く。底盤は縦溝を有する。浅青褐色～口縁一部に斜面直角の突起。褐色
26	99	069 畳下層	微生物土器	壺	-/8.0/-	底盤部。平底。口縁一部に斜面直角の突起。褐色	
26	100	069 畳下層	微生物土器	壺	-/5/-	底盤部。やや丸みを帯びる。浅青褐色	
26	101	069 地土中	微生物土器	壺	-/7.1/-	底盤片。平底。明黄色～黒褐色・褐色	
26	102	069 ラベなし	微生物土器	壺	-/20.8/-	底盤部。大型品。明赤褐色	
26	103	069 畳下層	微生物土器	壺	-/8.5/-	底盤部。丸底気味。浅青褐色	
26	104	069 畳下層	微生物土器	壺	-/9.4/-	底盤部。平底。口縁一部に斜面直角の突起。褐色	

種別 (FIG.)	固有 (PL.)	番号	地区・部位・遺構	遺物の種類	器形	法量(高さ/口径 cm)	特徴	
26	105	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~8.2	底面部、凹窓状を呈する。橙色~明黄褐色~黒褐色。褐色	
26	106	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~11.3	底面部、平底、米白色~淡褐色	
26	107	069	ラベルなし	陶生土器	鉢	~1~6.5~	底面部、丸底、淡黃色	
26	108	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6.5~	底面部、丸底、褐色	
26	109	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6.5~	底面部、丸底、淡黃色	
26	110	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6.5~	口縁部、大型品、にびい黄褐色~褐灰色	
26	111	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6.5~	口縁部、大型品、口縁部に網目目突起、浅黃褐色	
26	112	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6.5~	口縁部、大型品、口縁部に網目目、浅黃褐色	
26	113	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6.5~	口縁部、大型品、内側には斜面三脚形の突起、口縁部には横状凸起による刻み目、浅黃褐色	
26	114	069	墓下層①	陶生土器	壺	~5.5~	口縁部、内側は肥厚する。口縁部には網目目、褐色	
27	115	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6~	口縁部、内側は肥厚する。口縁部には網目目、褐色	
27	116	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6~	底面部~側面部、付け根に二条の断面台形の突起、大型品、褐色~明赤褐色	
27	117	069	墓下層①+②	陶生土器	壺	~1~6~	底面部~側面部、付け根に二条の断面台形の突起、大型品、褐色~明赤褐色	
27	118	069	墓下層③	陶生土器	壺	~1~6~	底面部~側面部、付け根に二条の断面台形の突起、大型品、にびい褐色~暗褐色	
27	28	119	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6~	底面部、丸みを帯びる。大型品、褐色~にびい褐色
28	120	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6~	側面部、側面に上部に三条の断面台形の突起、大型品、明赤褐色~橙色~暗褐色	
28	121	069	墓下層	陶生土器	壺	~1~6~	側面部、側面に上部に三条の断面台形の突起、大型品、明赤褐色~橙色~暗褐色	
29	122	069	墓下層	陶生土器	附口壺	~1~6~	口縁部と側面部を欠く。褐色~にびい黄褐色。側面に黒斑あり。	
29	123	069	墓下層	陶生土器	附口鉢か	~1~6.5~	鉢形部、米白色~黑色。黒斑あり	
29	124	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	環部、大型品、にびい黃褐色	
29	125	069	墓下層④	陶生土器	附口壺	15.6/13.2/10.0	口が尖る。浅黃褐色~灰褐色、口縁に黒斑あり	
29	126	069	墓下層	陶生土器	鉢	~1~6~	底面部、側面の穿孔あり。白色	
29	127	069	墓下層	陶生土器	鉢	~1~6~	底面部、側面の穿孔あり。白色	
29	128	069	墓下層	陶生土器	鉢	~1~6~	底面部、底部に焼成痕の穿孔。浅黃褐色	
29	129	069	墓下層	陶生土器	鉢	~1~6~	側面に手字大く。平底。褐色~深褐色	
29	130	069	墓下層	陶生土器	鉢	~1~22~	底面部を欠く。にびい黄褐色~褐灰色。底面に黒斑あり	
29	131	069	墓下層	陶生土器	鉢	12.5/23.7~	口縁~底面部にびい褐色~一期色	
29	132	069	墓下層	陶生土器	鉢	11.4/35.1/5.2	口縁~底面部、やや丸みを帯びた平底。灰黃褐色~褐色	
29	133	069	苗原	陶生土器	鉢	~1~8~	底面部を欠く。浅黃褐色	
29	134	069	墓下層⑤	陶生土器	鉢	6.1/14.1/3.5	底面部、小さな平底、外側にタタキの跡痕、褐色~にびい赤褐色	
29	135	069	墓下層(西側)	陶生土器	高环	~1~6~	小型品、側面に大く。褐色	
29	136	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	口縁部、にびい褐色	
29	137	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	口縁、内部に段。褐色~一期色	
29	138	069	墓下層	陶生土器	附口鉢	~1~6~	口縁部と側面部を欠く。口縁はくの字形に彎曲。にびい褐色~深褐色~褐色	
29	139	069	墓下層	陶生土器	附口鉢か	~1~6~	鉢形部、褐色	
29	140	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	鉢形部、にびい褐色	
29	141	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	鉢形部、浅黃褐色	
29	142	069	土中+北側含合層	陶生土器	高环	~1~6~	口縁~底面部を欠く。底面部の3か所に円形の透かし孔。明赤褐色	
29	143	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	側面、側面に云う字形に彎曲。褐色	
29	144	069	墓下層	陶生土器	高环	~1~6~	底面部と側面の結合部、浅黃褐色	
30	145	069	埋土中	陶生土器	器台	21.0/14.8/16.2	口縁~底面部、浅黃褐色~褐色	
30	146	069	墓下層	陶生土器	器台	23.2/18.4/17.3	口縁~底面部、にびい褐色	
30	147	069	墓下層	陶生土器	器台	20.2/15.5/20.0	口縁~底面部、浅黃褐色~深褐色	
30	148	069	墓下層	陶生土器	器台	17.3/10.9/12.9	口縁~底面部、にびい褐色	
30	149	069	墓下層	陶生土器	器台	~7.45~	底面部を欠く。浅黃褐色~黃褐色	
30	150	069	墓下層	陶生土器	器台	~7.44~	底面部欠損。淡褐色	
30	151	069	墓下層⑥	陶生土器	器台	~7.12~	口縁を欠く。褐色	
30	152	069	埋土中	陶生土器	器台	~7.60~	底面部を欠く。褐色	
30	153	069	墓下層	陶生土器	器台	~7.52~	底面部を欠く。外側にヨコ方向のタキ。淡黄色	
30	154	069	墓下層	陶生土器	器台	~7.60~	底面部を欠く。褐色	
30	155	069	北側含合層	陶生土器	器台	~7.50~	口縁、底面部を欠く。褐色	
30	156	069	墓下層	陶生土器	器台	~7.62~	底面部、外側にヨコ方向のタキ。にびい褐色	

井戸名 (FIG.)	位置 (PL.)	番号	地区・位置・道標	遺物の種類	形状	法量 (高さ/口径 cm/cm)	特徴
30	137	069	葛原下留	陶生土器	器台	~129	LH縁を欠く。に高い褐色～橙色
30	138	069	葛原下留	陶生土器	器台	~124	側面片、外周にココリ目的のタタキ。淡黄色
30	139	069	葛原下留	陶生土器	器台	~133	LH縁を欠く。外周に真褐色～褐色～橙色
31	140	160	069 葛原下留	陶生土器	背形支脚	126-92-150	ほぼ完形。受け瓶に穿孔。褐色～に高い黄褐色～灰褐色
31	141	161	069 葛原下留	陶生土器	背形支脚	92.8-2.10.1	ほぼ完形。受け瓶に穿孔あり。浅黄色～淡黄色
31	142	160	069 球土中	陶生土器	背形支脚	111.1-~115	受け瓶～瓶底が焼失。受け瓶に穿孔あり。褐色
31	143	069	葛原下留	陶生土器	背形支脚	~124	受け瓶。穿孔はない。灰白色～褐色
31	144	069	葛原下留	陶生土器	器台か	~150	LH縁缺か。に高い褐色～黒褐色
31	145	069	葛原下留	陶生土器	壺か	~124	LH縁を欠く。火葬貝とLH縁の間に棱をもつ。他の上部に側縁を複数。褐色～に高い褐色
31	146	160	069 葛原下留	石製品	砾石	154.4-29.0	欠損している。研磨面は三面。研磨岩か
31	147	160	069 葛原下留	石製品	石溝	126.7-57.9	不整れの錐錐形。2.5cmの穿孔を縱方向の溝が通る。滑石
31	148	160	069 葛原下留	石製品	石溝	93.4-4.22	鉄錐形。1.9cmの穿孔。幅約1.9cmの二条。滑石
31	149	160	069 球土中	石製品	石溝	99.5-4.~	鉄錐形。2.5cmの穿孔を縱方向の溝が通る。滑石
32	150	022	363	陶生土器	背形支脚	~124	受け瓶。褐色
32	151	061	球土中	陶生土器	背形支脚	~124	受け瓶。穿孔あり。浅黄色～褐色
32	152	P126		陶生土器	壺	~114	短縫縫。底部が欠く。褐色～に高い褐色
32	153	P182		陶生土器	壺	~124	短縫縫。底部が欠く。褐色
32	154	174	P217	陶生土器	鉢	7.0-37.0	LH縁と延長残存。丸足。褐色～明赤褐色
32	155	P169		陶生土器	鉢	96-146	LH縁～底盤残存。丸足。褐色～淡黃褐色～暗褐色
32	156	033	理土中	埴輪	円筒埴輪	~124	側面片。調整不明。前面台形の低い突起。褐色
32	157	033	理土中	埴輪	円筒埴輪	~124	側面片。調整不明。前面台形の低い突起。浅黄色～褐色
32	158	033	理土中	埴輪	円筒埴輪	~124	側面片。調整不明。前面台形の低い突起。浅黄色
32	159	179	033 理土中	埴輪	円筒埴輪	~124	側面片。調整不明。前面台形の低い突起。淡黄色
32	160	180	031 c	埴輪	羽根型埴輪	~124	側面片。調整不明。突起が剥落している。浅黄色
32	161	181	西海岸遺跡	埴輪	壺	13-109	ほぼ完形。天井部は壺形へハケツり。灰褐色
32	162	55	扶都那	埴輪	壺	0.8-172	天井部を欠く。LH縁は既に解す。灰褐色
32	163	183	西海岸遺跡	陶製品	壺台形環	~114	LH縁と底盤を欠く。底盤にはLH縁に開く溝台がつく。灰色
32	164	55	扶都那	陶製品	壺臺	~123	LH縁を欠く。底部に底盤をもつ。底部には高台。明赤褐色～灰褐色
32	165	069	上層ハルト中	瓦器か	瓦	~124-72	瓦面片。底盤が低い丸窓。灰褐色～灰褐色
32	166	19		青磁	瓦	~124	LH縁片。側面片。側面片。側面はオーリーブ灰色
32	167	032	古御田地区 北東遺跡	墨绘陶器	瓦	~124-138	LH縁片。内外側に輪郭が一部残る。端は褐色～赤褐色を呈する
32	168	近景4	二次加工品	瓦製品	瓦	~124	瓦を軸用して内側状に仕上げる。灰白色
33	169	189	038 p7	土師器	壺	24'-160'-123	LH縁～底盤残存。底部の凹部は削輪か切り欠き。板状底筋あり。に高い橙色
33	170	P162		土師器	壺	145.6-2.5.1	LH縁～底筋部。底筋の切り離しは削輪か切り欠き。褐色
33	171	P181		細器	鉢	~124-47	LH縁片。輪郭は明オーリーブ灰色。表面質感
33	172	p73		瓦質土器	鉢	~124	玉ねび口片。内外側にハケツ。灰白色～灰褐色
33	173	056 3a1		青磁	碗	6.8-172-5.1	完形。墨绘茶文。墨绘茶系。輪郭はオーリーブ灰色
33	174	056 3a1		陶製品	鉢	規格42	墨绘片。表面は長方形。水質がある
33	175	056 3a2		陶製品	鉢	規格39	墨绘片。墨绘部は長方形
33	176	056 3a3		陶製品	鉢	規格45	墨绘片。墨绘部は長方形
33	177	017 N.1		青磁	碗	6.5-172-5.2	ほぼ完形。細い墨绘茶文。墨绘茶系。輪郭はオーリーブ灰色
33	178	022 N.2		青磁	碗	~143	底盤を欠く。内側に墨文。輪郭はオーリーブ灰色
33	179	025 N.1		土師器	壺	10-99-8.7	ほぼ完形。底部の墨文は不明。褐色
33	180	025 N.2		土師器	壺	13-98-7.7	LH縁～底盤残存。底部の凹部は削輪か切り欠き。板状底筋あり。橙色
33	181	071 N.1		土師器	壺	18-92-7.1	LH縁～底盤残存。底部の切り離しは削輪か切り欠き。灰白色
33	182	035 球土中		白磁	碗	~124	玉ねび口片。輪郭は灰白色。内側に細かいビンホールあり
33	183	030 e		青磁	碗	~124-5.3	底盤片。済み付きは青磁。青磁茶系。輪郭は緑灰色
33	184	067 球土中		青磁	碗	~124-5.3	底盤片。済み付きは青磁。青磁茶系。輪郭は灰白色。ビンホールあり
33	185	031 a		象嵌青磁	壺	~124	底盤片。輪郭はオーリーブ灰色
33	186	031 c		瓦質土器	大鉢	~124	側面片。外側に凹文のスランプ。文様の下部に突起がつく。浅黄色

3. 小結

今回の調査では弥生時代後期～中世末の時期の遺構・遺物を検出した。主な遺構はⅠ期：弥生時代後期後半～終末の周溝状遺構、掘立柱建物などがあり、南側に隣接する今宿大塚古墳の下層にも広がると考えられる。Ⅱ期：13世紀代の木棺墓、土壙墓、土坑など、Ⅲ期：16世紀代の掘立柱建物、溝状遺構などとなる。今宿大塚古墳に関連しては、円筒埴輪などが出土しているが、後世の遺構からの出土であり、古墳に直接関係するものは確認できなかった。古代についても8世紀代の遺物が少量出土しているが、以後はほとんど遺構・遺物ではなく、Ⅱ期までは空白期であったと考えられる。ただ、Ⅱ期、Ⅲ期についても存続期間は短く、Ⅲ期以後はまた空白期を迎えると考えられる。

Ⅰ期では掘立柱建物13棟+a、周溝状遺構12基+a、土坑、柱穴などがある。周溝状遺構は調査区全面に展開し、平面形は円形もしくは不整形を呈する。遺構の削平によるものもあるが、溝が全周するものではなく、途中で切れているものが大半である。溝の内部に墓や堅穴住居跡などは検出できなかつたが、1×1間の掘立柱建物が配置されたものをいくつか検出した（SD010、011、013、015など）。1×1間の建物には建て替えと考えられるものもある。本調査地点では1×2間の掘立柱建物を数棟検出したが、周溝状遺構と分布が異なっている。このような周溝状遺構は周辺では今宿五郎江遺跡2次調査、11次調査、大塚遺跡第11次調査、14次調査などで検出されており、大半が弥生時代後期後半と位置付けられるものである。今宿五郎江遺跡は弥生時代後期の環濠が確認されているが、その内部やその周辺で周溝状遺構が分布している。今宿五郎江2次、11次調査の周溝状遺構は環濠の内部で検出されている。周溝状遺構の内部の遺構は不明確であるが、掘立柱建物が配置されていた可能性がある。大塚遺跡11次調査は環濠内と外側にあたる場所で周溝状遺構が検出されている。遺構の内部には掘立柱建物が検出されている。環濠の西側約300～400mにあたる大塚遺跡第14次調査では周溝状遺構の内部に鍛冶工房として利用された堅穴遺構が検出された。周溝状遺構の性格についてはいくつかの説があるが、ここで見られる周溝状遺構は建物や堅穴住居跡（堅穴遺構）などの周囲を巡るものと考えられるが、溝を巡らせることの意味については今後も検討を要する。

Ⅲ期は掘立柱建物8棟、溝状遺構4条、土坑などがある。そのうち、調査区の南・北端にある幅約1mの東西溝（SD031、032、SD032、033）は掘立柱建物などを区画する溝と考えられる。溝で挟まれた範囲は南北幅約20～30mを測る。南側にあるSD032、033は今宿大塚古墳の周溝に沿うように掘られている。建物には建て替えが見られ、その配置は2×3間の東西、南北棟からなる2群程度のまとまりを呈している。この時期の遺構については今宿大塚古墳の南側にあたる第6次調査で16世紀前半代の掘立柱建物、区画溝が検出されている。調査区北東にある第7次調査では掘立柱建物、溝、井戸などが検出されている。本書で後述される第17次調査では一辺10～20mほどで隅丸方形を呈する区画溝が数群検出されており、その内部には掘立柱建物や井戸などが確認されている。このように本調査地点を含めた今宿大塚古墳の周辺には16世紀代を中心とした区画溝をもつ建物群が分布しており、推測の域を出ないが、今宿大塚古墳についても当該期に大内氏と大友氏が対立していた状況から、戦略的に何らかの利用がなされた可能性は高いと考えられる。

今回の調査では今宿五郎江遺跡の環濠集落を望む西側の丘陵状の集落が広がることが確認され、今宿五郎江遺跡で見られたような周溝状遺構などを検出した。一方、遺物については今宿五郎江遺跡で見られたような国内外の搬入遺物はほとんど出土しておらず、環濠集落との関係が注目される。また、16世紀代の区画溝や建物群の変遷や性格についても今後の調査成果が待たれる。



1. 調査前現況（東から）



2. 調査前現況（東から）



1. 調査区遠景（北から）



2. 調査区遠景（西から）



1. 調査区遠景（西から）



2. 調査区遠景（北から）



1. 今宿大塚古墳と調査区俯瞰（南から）



2. 調査区俯瞰（南から）



1. 調査区全景（西から）



2. 調査区西側拡張区（西から）



1. 調査区遠景（西から）



2. 調査区遠景（西から）



1. 調査区遠景（南から）



2. 調査区遠景（南から）



1. SB042 (東から)



2. SB043 (東から)



1. SB044、045 (北から)



2. SB044 (北から)



1. SB046 (南から)



2. SB048、049 (東から)



1. SB073 (西から)



2. SB047 (東から)



1. 周溝状遺構俯瞰 1 (南から)



2. 周溝状遺構俯瞰 2 (南から)



1. 周溝状遺構俯瞰3（南から）



2. 周溝状遺構俯瞰4（南から）



1. 周溝状遺構（北から）



2. 周溝状遺構（西から）



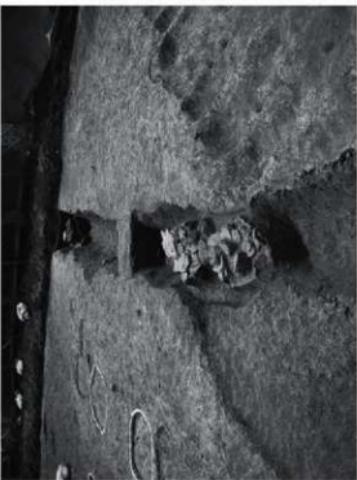
2. SD014遺物出土状況（西から）



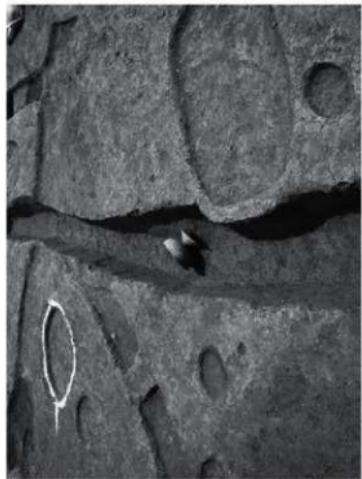
4. SD014遺物出土状況（西から）



1. SD014遺物出土状況（北から）



3. SD014遺物出土状況（北から）



1. SD012遺物出土状況（北から）



2. SD012遺物出土状況（東から）



3. SD012遺物出土状況（北から）

4. SD012遺物出土状況（西から）



2. SD001-d遺物出土状況（北から）



4. SD015遺物出土状況（東から）



1. SD0012遺物出土状況（西から）



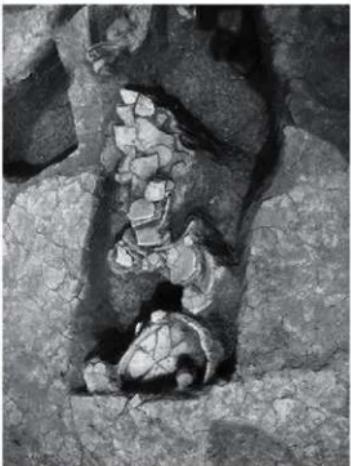
3. SD0015遺物出土状況（北から）



1. SD015遺物出土状況 (東から)



2. SD006遺物出土状況 (東から)



3. SD006遺物出土状況 (東から)



4. SD006石器出土状況 (南から)



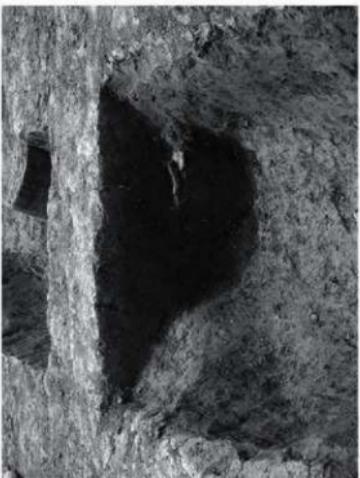
2. SD013-c 土窯 (南から)



4. SD015-a ベルト (西から)



1. SD012-a ベルト (北から)



3. SD014-d ベルト (西から)



1. SX069掘り下げ状況（東から）



2. SX069遺物出土状況（北から）



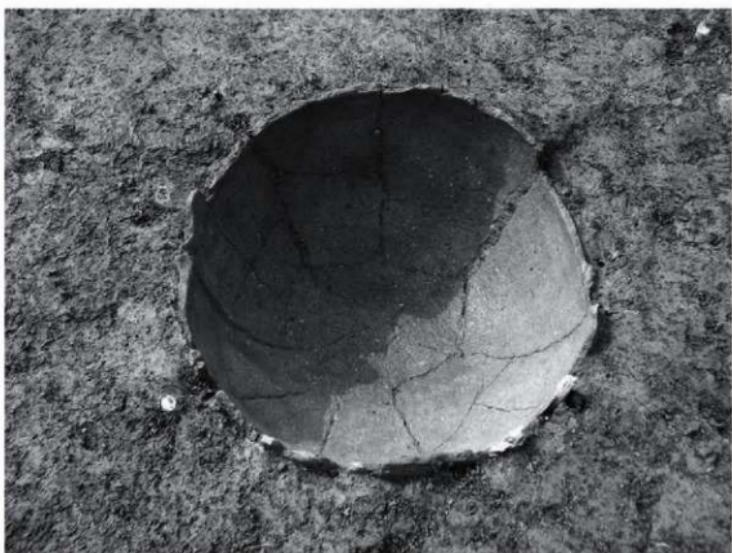
1. SX069遺物出土状況（北から）



2. SX069掘り下げ風景（東から）



1. SX069完掘（東から）



2. SX029土器棺検出状況（南から）



1. SB035 (南から)



2. SB034 (西から)



1. SB036 (東から)



2. SB037、038 (東から)



1. SB039 (南から)



2. SB041 (南から)



1. SX016棺底検出状況（南から）



2. SX016棺底検出状況（東から）



1. SX016出土青磁碗（東から）



2. SX016出土青磁碗（西から）



1. SX017土層（南から）



2. SX017遺物出土状況（西から）



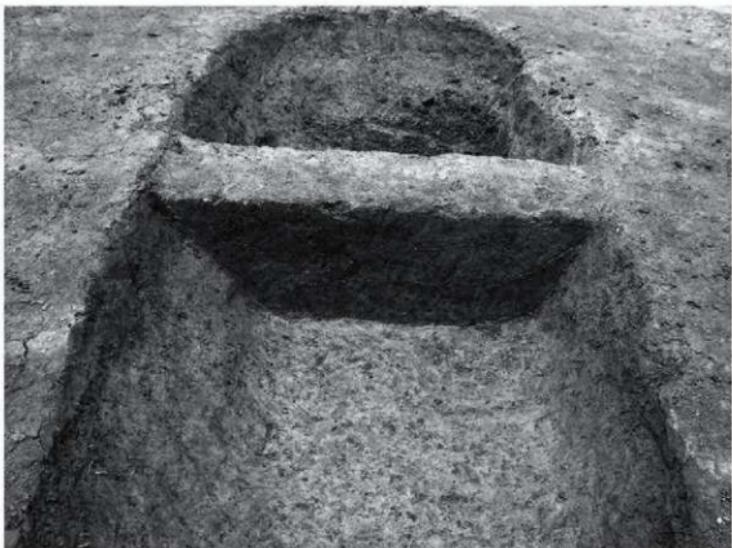
1. SX017遺物出土状況（南から）



2. SX017出土青磁碗（西から）



1. SX021完掘（東から）



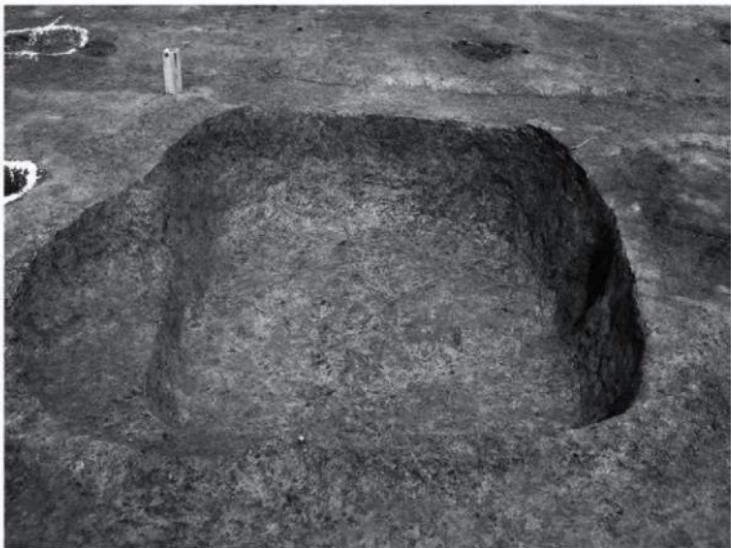
2. SX021土層（東から）



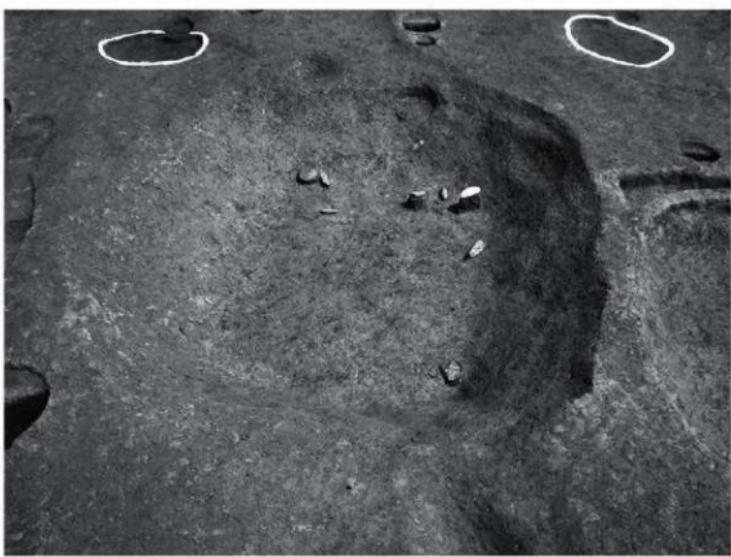
1. SK022土層（南から）



2. SK022遺物出土状況（南から）



1. SK024完掘（西から）



2. SK025遺物出土状況（南から）



1. SK026土層（北から）



2. SK026遺物出土状況（北から）



1. SK054完掘（南から）



2. SK068完掘（北から）



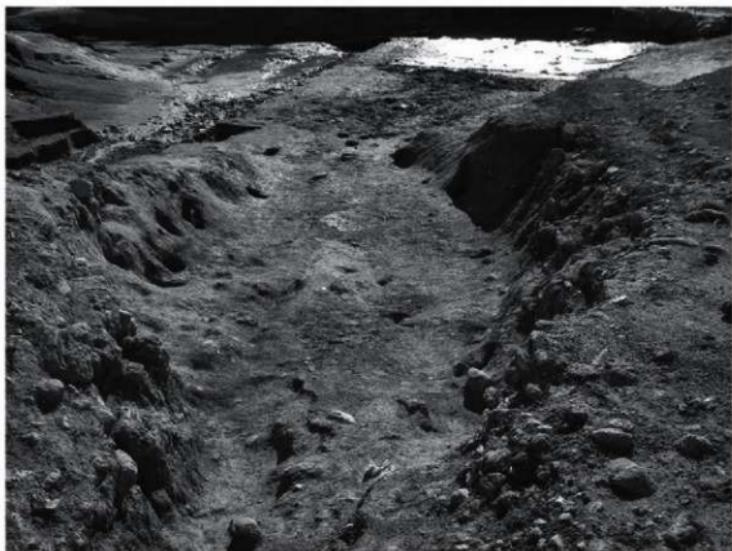
1. SK070遺物出土状況（西から）



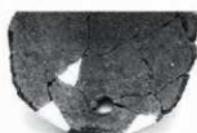
2. SK071遺物出土状況（西から）



1. SK071土師器出土状況（西から）



2. 調査区西端溝状遺構（東から）



3

8



20



33



37



39



40



41



44



46



51



52



55



56

出土遺物写真 1



出土遺物写真2



出土遺物写真3



181



183



189



191



198



193



197



199



200



205

出土遺物写真 4

IV 第17次調査の報告

1. 調査の概要

本調査地点は大塚遺跡の北部に位置し、標高約6.0m～8.0m前後の低丘陵上に立地する。現況は畠地である。南側隣接地が第7次と第16次調査地点で、北側隣接地が第13次調査地点、道路を挟んだ東隣が、平成23年度調査の第18次調査地点である。さらに第16次調査地点の南隣地は国史跡の今宿大塚古墳である。伊都区画整理事業に伴う一連の大塚遺跡の大規模調査の中ではほぼ中央部に位置しており、その調査面積も最大規模である。

調査は旧耕作土を除去した地表下約20cm～50cm前後の淡橙色粘質土や風化砂礫混黄褐色粘質土などの地山を遺構面として行った。花崗岩盤が風化した第三紀層であり、標高10mに満たないが、高位段丘面に該当する。

廃土置場の関係から調査区西半部を廃土置場とし、表土剥ぎは東側から行った(Fig.35のI～III区)。東側の調査終了後、廃土置場とした西側部分の調査を実施した(同IV～VI区)。耕作土直下が遺構面であるため、遺物包含層はほとんど検出できなかった。遺構面の標高はII区やIV区の周辺が高く、東西や北に向かって低くなる。その間のIII区は丘陵尾根上の中央部付近に位置するが、II区やIV区に比べて少し低い地形となっており、遺構の遺存状況も良好である。

検出した遺構の主たる時期は戦国時代の中世末であるが、溝、掘立柱建物、土坑、石組み井戸といった当該期の遺構が調査区全面に展開している。特徴的なのが、1辺15～25m前後の、溝による長方形区画で、当該期の屋敷地の単位を示すものであろう。このような方形に区画された屋敷地が本調査地点では、8群～14群(Fig.34のA～N)存在する。また、当該期の遺構は、大塚遺跡では第13次調査地点を北限として、少なくとも第6次調査地点周辺では広がっている。大塚古墳周辺の丘陵尾根上全面に、このような屋敷群が展開していたと考えられる。各屋敷地は、丘陵をカットする段造成によって、平坦地を確保しているが、おむね中世末の段造成が現況の地形につながっている。このような中世末の遺構のピークは16世紀前半である。後半以降衰退していく、近世以降の土地利用は基本的に田畠であった。

より古い時期の遺構・遺物は本調査地点では極端に少なく、中世末の開発による削平が大きかったものと考えられる。古い時期の遺構としては、平安時代後半(10世紀後半)の木棺墓、奈良時代前後の炭窯とみられる焼土坑、古墳時代中期の堅穴建物等がある。これらの古い時期の遺構はV～VI区でみつかっており、丘陵尾根上の西側縁辺に近いところで、かろうじて削平による消失をまぬがれた遺構である。また、南側隣地の第16次調査地点で検出されているような弥生時代後期の遺構は、一段低くなる本調査地点では全くみつかっていない。

遺物は5000m²を越える調査面積であるが、総量がコンテナケース40箱程度である。中世後半の遺物は区画溝や井戸、土坑、柱穴などから、中国・朝鮮半島産の陶器と国産の瓦質・土師質土器を中心に出土しているが、完形品の出土はほとんどない。土器・陶磁器以外では、刀装具(青銅製、木製)、鎌や馬鍬、鎌、釘などの鉄製品、銅錢(銭種不明)、石鍋、石臼、砥石などがあり、火縄銃の弾丸とみられる鉛玉も出土している。古代以前では、平安時代の木棺墓から越州窯系青磁碗などの副葬品が出土しているほか、古墳時代の土師器や須恵器、大塚古墳から流入したとみられる埴輪、弥生土器なども少量であるが出土しており、さらに三棱尖頭器や台形様石器といった旧石器も出土している。

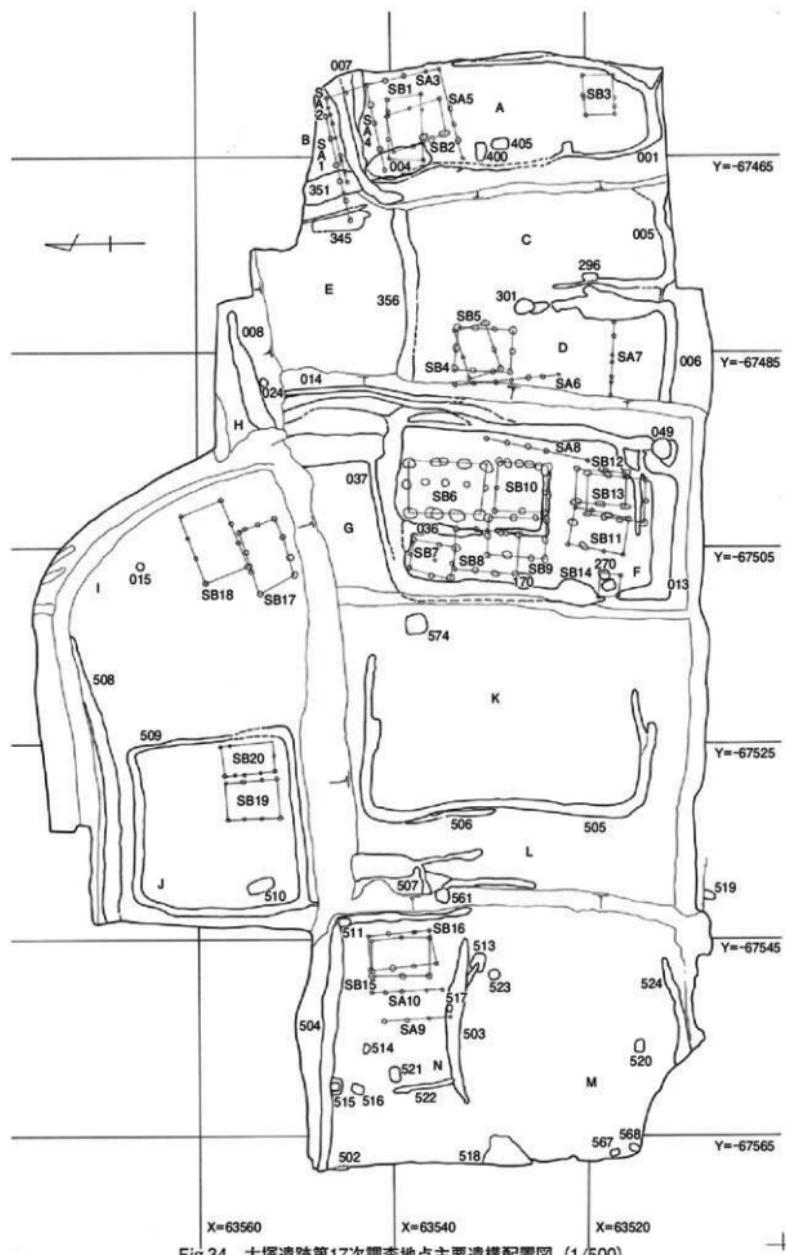


Fig.34 大塚遺跡第17次調査地点主要構造配置図 (1/500)

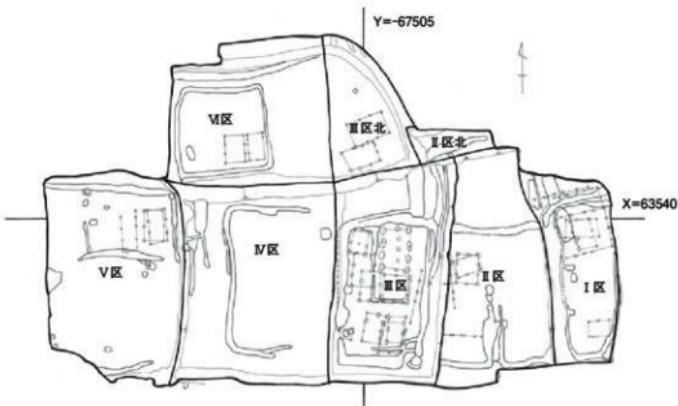


Fig.35 発掘調査時の区分け (1/1000)

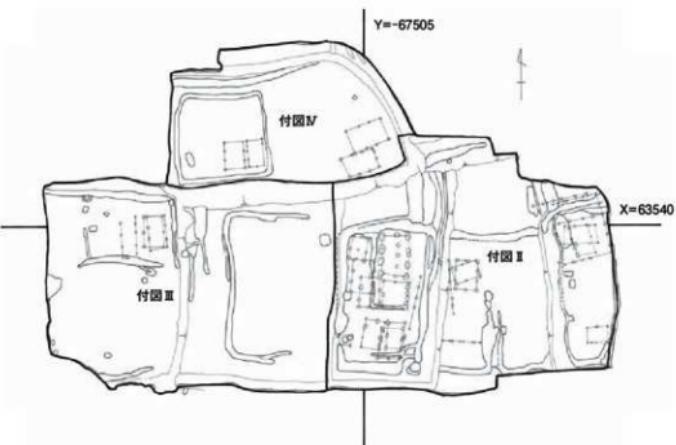


Fig.36 付団II～IVの割付図 (1/1000)

2. 調査の記録

1) 中世の遺構

本調査地点での9割以上を占める戦国時代の遺構から報告していきたい。当該期は溝による区画が屋敷や屋敷配置の基本構造となっており、そのような区画群が10群前後みつかっている。その区画の内外から、掘立柱建物20棟以上、柵列10条以上、石組井戸1基、土坑19基（うち素掘りの井戸または水溜状遺構が2基）である。地点によって、建物などの遺構の遺存状態がまちまちであり、遺構密度の薄い箇所は後世の削平によるところが大きい。

①溝（SD）

SD001、004、007、341、345、351 (Fig.37) 調査区の東部、I区で検出した溝群である。SD001とSD007に囲まれた範囲を区画A、SD007の北側から段落ちまでを区画Bとする。

長方形区画溝のSD001は部分的に削平のため消失しているが、遺存の良い南側では、幅1.2m、深さ20cmで断面形は逆台形である。I区北部の溝と一連のものであるかどうかは定かではないが、東西方向のSD007（古）につながり、SD004を切るものとみられる。これらに囲まれた区画Aは南北約29m、東西9mを測り、標高は南側が7.8m前後、北側が7.5m前後である。南東コーナーから外側に向かって幅20cm、深さ10cm程度の小溝が派生する。SB1～3やSA1～5はこの区画の内外に伴うものとみられる。SB3はSD001に先行する。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀前半である。

SD007（新）は東西方向の溝であるが、その西端で南に折れて、段落ちの裾に沿う。幅1.5m以上で、断面はV字形に近い。底面が東にむかって低くなっている。排水用水路である。時期は近世に下るが、先行する溝（SD007古）がSD001と一連をなすとみられる。

SD004はSD351と一連の南北方向の溝である。幅2.8m、深さ25cmを測る。I区のなかで最も古い溝とみられる。遺物は中国・朝鮮陶磁器、瓦質土器、土師質土器、土錘、鉄釘などが出土しており、15世紀後半である。

SD341とSD345はSD351の西側を平行して走る溝で、近い時期のものであろう。SD341が351を切る。前者の深さは約10cmで、後者の深さは約5cmである。遺物は瓦質土器や土師質土器が出土している。

SD005、006、356 (Fig.37) 調査区の東部、II区で検出した溝群である。SD005とSD356で囲まれた範囲を区画C、SD006とSD356で囲まれた範囲を区画D、SD356の北側から段落ちまでを区画Eとする。

長方形区画溝のSD005は北部や東部が削平のために、消失しているが、遺存の良い南側では、幅1.2m、深さ20cmで断面形はV字形に近い。この溝とSD356に囲まれた区画Cは南北約25m、東西9m以上を測り、標高は南側が8.2m前後、北側が8m前後である。南西コーナーからSD006に向かって幅20cm、深さ10cm程度の小溝が派生する。内部は遺構密度が薄いが、削平のためとみられる。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器、瓦などが出土しており、16世紀前半である。

長方形区画溝のSD006は北部と西部が削平のため消失している。SK301はこの溝の一部か、溝の底面に掘り込まれた遺構であろう。遺存の良い東側では溝の断面形がV字形に近く、幅1～2m前後、深さ30cm前後を測る。この溝とSD356に囲まれた区画Dは南北約25m、東西10m以上を測り、標高は南側が8.1m前後、北側が7.8m前後である。SB4・5やSA6・7はこの区画内に伴うものとみられる。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀前半である。

SD356は区画CとDの北端を東西方向に走る溝である。西端と東端が段落ちにより削平されているが、長さ24m以上を測る。Oライン周辺などは断面形状から複数回に渡る掘り直しがあったとみられる。幅

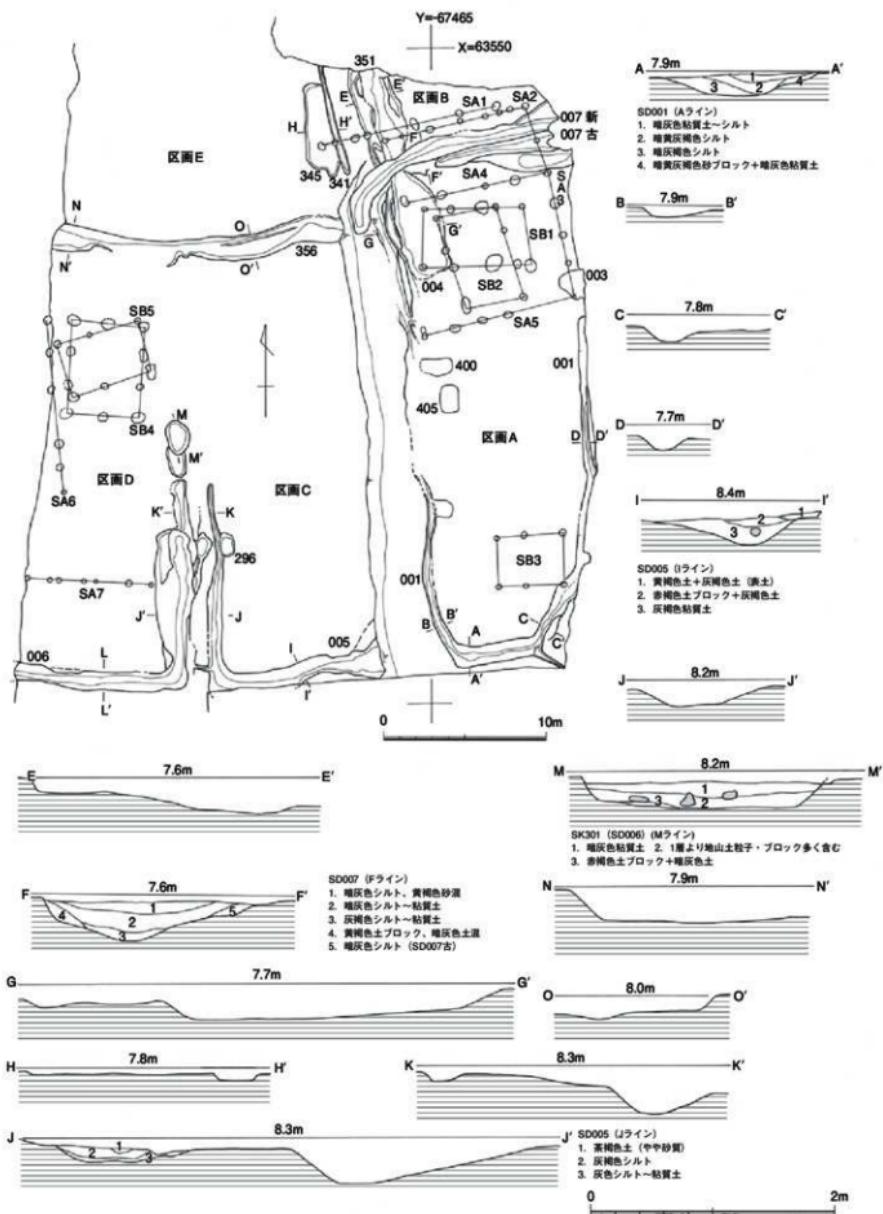


Fig.37 SD001 · 004 (351) · 005 · 006 · 007 · 341 · 345 · 356実測図 (1/300 · 1/40)

1.5m前後、深さ25cm前後で、西側の底面が低くなっている。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀後半までの時期幅がある。

SD008 (Fig.38) 調査区の東部のⅡ区北側で検出した東西方向の溝である。北隣接地の第13次調査区でみつかった中世末の掘立柱建物や竪穴状遺構（地下式貯蔵施設）などの遺構群に伴う区画溝とみられ、それを区画Hとする。遺構面の標高は6.9m前後である。SD008は、断面形が逆台形に近く、長さ12m以上、幅1.6m、深さ20cm前後を測る。西端部は近世以降の溝に切られて消失している。溝の方向は13次調査区の遺構群とはほぼ平行している。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀前半である。また、これを切るSP009からは鉛玉（鉄砲玉）が出土している。

SD013、014、036、037 (Fig.39) 調査区の中央部、Ⅲ区で検出した溝群である。SD013で開まれた範囲を区画F、SD013の北側から段落ちまでを区画Gとする。周囲は丘陵上の中央付近に位置するが、東西に隣接するⅡ区やⅢ区より遺構面の標高が30cm以上低く、尾根上の鞍部に立地する。遺構面の遺存が良好であり、本調査地点で最も遺構密度の高い地点である。

長方形区画溝のSD013は東部が削平のために遺存状況が良くないが、ほぼ全周を検出した。それに囲まれる区画Fは南北約26m、東西15mを測り、標高は南側が7.9m前後、北側が7.5m前後である。さらに区画F内は、SD036などの小溝によって細分されている。

SD013は断面形が逆台形をなし、南辺で溝幅20m、深さ40cm前後を測る。南西コーナーはほぼ直角に屈曲しており、コーナーから約4m北の箇所は陸橋となっている。そのすぐ北側は溝幅が広くなってしまっており、深部は遺構面から約50cmである。陸橋に面するSB14は門状の遺構とみられる。溝の西辺は近世溝（SD035）に切られる。溝の北辺では、複数の溝が重複するが、SD13がある程度埋没してから掘削

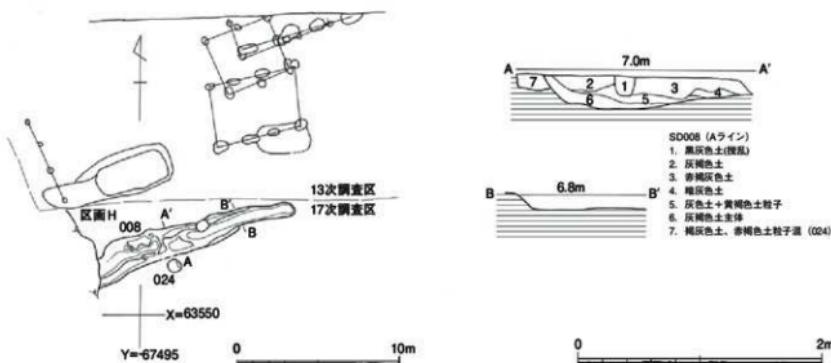


Fig.38 SD008実測図 (1/300・1/40)

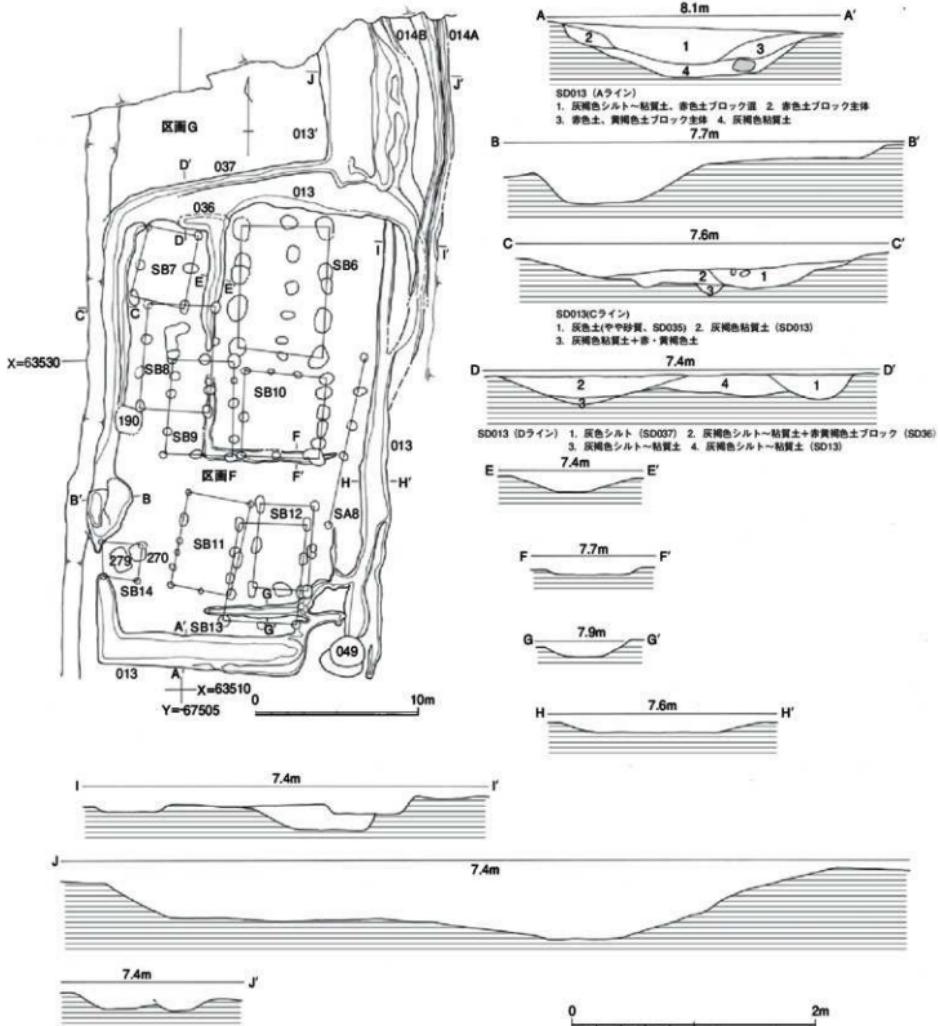


Fig.39 SD013 (036・037)・014実測図 (1/300・1/40)

されたものである（SD036・037）。SD036は、北側ではSD013より深く、約25cmの深さであるが、SB6の周囲を埋む部分は深さ5～10cm前後である。SD037はSD013の北縁に沿って再掘削された幅70cm、深さ20cmの溝である。東で北に伸びるSD013'に通じる。SD013'はSD013の北東コーナーから北に伸びる幅約6m、深さ60cmの溝である。SD013の東辺は、削平や近世に下る可能性の高いSD014に切られて遺構の遺存が悪く、溝の両肩が明瞭ではない。溝の西肩はSD013'の南延長線上で、SB6やSB10のすぐ東を通るラインを想定することもできる。SD013の東辺は、直線的なものと、より東に弧を描いて張り出す溝が重複するが、2回以上の掘りなおしの痕跡とみられる。溝が浅かったために、その切り合い関係を明確に把握することはできなかったが、弧を描く溝の方が新しいと考える。南東コーナー付近は溝が浅くなっている、石組井戸SE049と重複しているが、同時併存とみられる。また、SB11・12のすぐ南側には、深さ約10cmの小溝が東西方向に走っており、SD036等と関連するものであろう。

SB6～13やSA8はこの区画Fに伴う建物である。中心的な建物はSB6で、柱穴を掘り直して建て替えられており、長期間存続したものと考えられる。SD036等、区画F内の小区画溝が存在しない段階では、SB6（古）、SB8・10、SB13などが存在し、区画溝の再掘削がなされる段階では、SB6（新）、SB7、SB11、SA8などが新たにみられるようになると考える。他の建物を切るSB9やSB12もその前後の段階であろう。

遺物はSD013を中心に中国・朝鮮陶磁器や瓦質土器、土師質土器、鉄釘などが出土しており、16世紀代である。

SD508・509 (Fig.40) 調査区の北西部、VI区で検出した溝群である。SD509で囲まれた範囲を区画Jとし、その東側を区画Iとする。区画IIはSD508を北限とするが、東側と南側は近世以降の溝が巡る。

方形区画溝のSD509は東部が削平のために遺存が悪いが、幅1.0m、深さ30cmほどの溝である。断面形はV字形に近いが、非対称で、壁面の傾斜は内側のほうが角度は緩い。区画Jは南北約15m、東西14mを測る、正方形区画である。標高は南東側が6.5m前後、北西側が6.2m前後である。南西コーナーから外側に向かって幅20cm、深さ10cm程度の小溝が派生する。内部は遺構密度が薄いが、削平のためとみられる。SB19・20はこの区画内に伴うものとみられる。遺物は中国・朝鮮陶磁器や備前陶器、瓦質土器、土師質土器、鉄滓などが出土しており、16世紀前半である。

その北側を東西方向に走るSD508はSD509の北辺とは併行している。長さ30m以上、幅1.3m、深さ40cmを測る。底面は西に向かって低くなる。SD509との間隔は約1.2mである。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器、鉄滓などが出土しており、16世紀前半である。

SD505～507 (Fig.40) 調査区の中央部から西部、IV区で検出した溝群である。SD505で囲まれた範囲を区画Kとし、その西側のSD507との間を区画Lとする。

長方形区画溝のSD505は削平のために北辺の遺存が悪く、東辺は消失しているが、幅1.2m、深さ30cmほどの溝で、断面形はU字形に近い。先行するSD506をより深く掘り直したものである。区画Kは南北約27m、東西15m以上を測り、標高は南側が8.0m前後、北側が7.4m前後である。内部は遺構密度が薄いが、削平のためとみられる。SK574がこの区画内に伴うものであろう。遺物は中国・朝鮮陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀前半である。

SD507、561はSD505西辺に平行する南北方向の溝で、西に向かって落ちる斜面に位置する深さ10cm程度の浅い溝である。SD507は北部で幅2.2mを測り、南部で西に折れる溝と南北方向の溝に分かれる。SD507の南西側にも平行する小溝があり、北側でSK561につながっている。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀前半である。

SD503、504、522、524 (Fig.41) 調査区の西部、V区で検出した溝群である。SD503と504で囲まれた範囲を区画Nとし、その南側のSD503とSD524との間を区画Hとする。

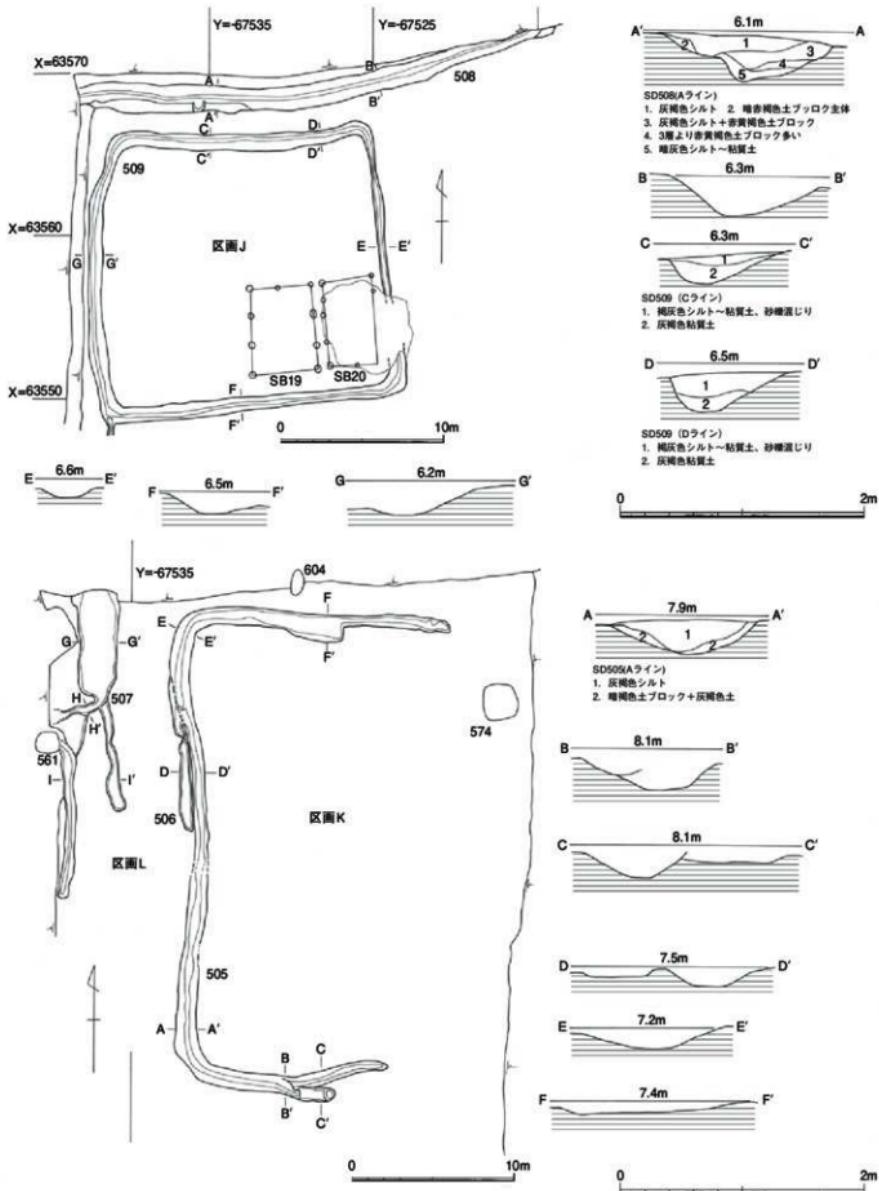


Fig.40 SD505・506・507・508・509実測図 (1/300・1/40)

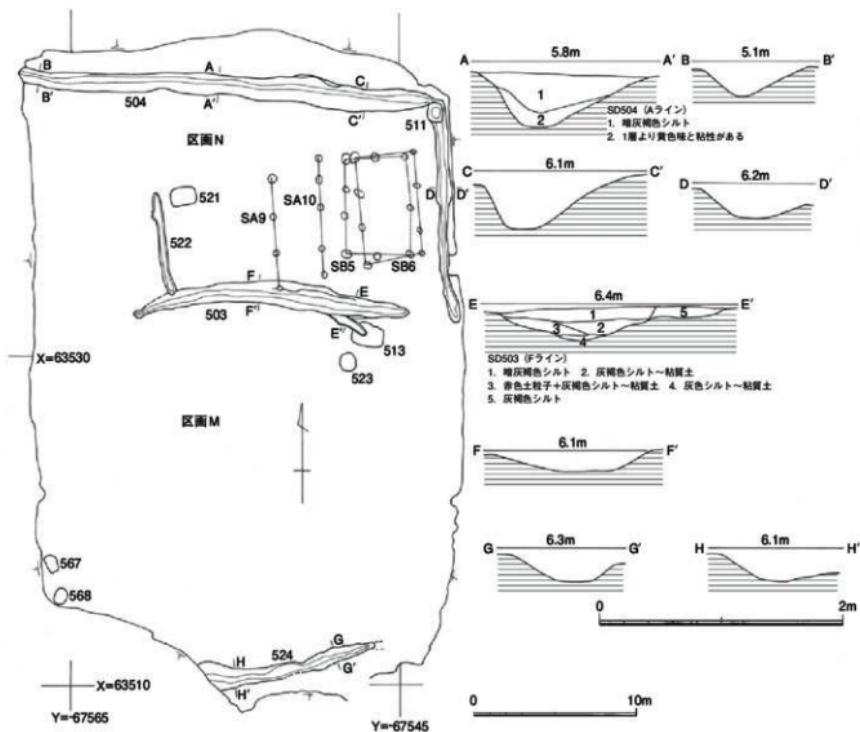
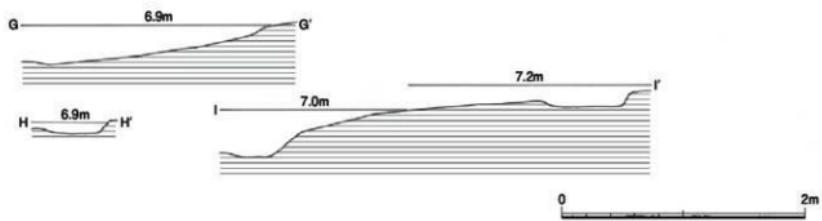


Fig.41 SD503・504・524実測図 (1/300・1/40)

SD503と504は一連の長方形区画溝であり、SD522もその内部を細分する小区画溝とみられる。区画Nは他の区画溝と異なり、東西方向に長いが、東西25m以上、南北11mを測る。SD504と522で開まれる範囲は東西約18mである。区画N内の標高は東側が6.2m前後、西側が5.0m前後であり、西に向かって低くなる斜面に位置する。区画の北東コーナーには土坑SK511があり、南東コーナーは陸橋となっている。SB5・6とSA9、10などがこの区画内に伴う建物であろう。切り合い関係などからSB5・SA9→SB6・SA10の先後関係が考えられる。SD503では先行する浅い溝との重複が確認され、区画溝にも建物の変遷と対応するような付け替えや掘り直しがあったであろう。溝の法量はSD503が幅1.3m、深さ25cm前後で、断面は逆台形に近く、SD504の北辺が幅1.2m、深さ40cm前後で、断面形はV字形に近く、東辺は幅1.0m未満で深さ20cm程度である。遺物は中国・朝鮮陶磁器や瓦質土器、土師質土器、釘、鉄滓などが出土しており、16世紀代である。

V区の南端で検出した東西方向の溝、SD524は出土遺物が少なく、時期が明確でないが、中世末の区画溝である可能性を考え、ここに報告したい。SD503とSD524の間は南北22mである。遺構面は削平を受けているが、古代の焼土坑が遺存していることから、元々遺構密度の薄い地区と考えられる。区画Mの中世の遺構はSK513、523などの土坑のみで、建物はみつかっていない。区画Mの南側は、16次調査でみつかっているスロープ状遺構（丘陵上の集落と西の河道を結ぶとみられる）に面しており、集落全体の共有広場のような区画ではないかと考えられる。

②掘立柱建物 (SB)、柵列 (SA)

中世末の掘立柱建物はいずれも倒柱建物で、 2×3 間が多い。1×3間で、梁行の柱間が3.5mを越えるようなものは、その中间付近に浅い棟持柱が存在した可能性が高いであろう。片方の妻側だけ棟持柱が遺存している建物もある。

SB1 (Fig.43) 区画A北部に位置する、 2×3 間の東西棟。屋内棟持柱を有する。主軸方位はN-88°-Eで、梁行約360cm、桁行660cmを測る。柱間は2.0m前後を測る。柱穴の平面形は円形で、径30～80cm前後を測る。上層に根石状の礫を有する柱穴が2基ある。SB2やSD004と重複するが、先後関係は不明である。遺物は中国陶磁器、土師質土器、石臼などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SB2 (Fig.42) 区画A北部に位置する、1×3間の南北棟。主軸方位はN-18°-Eで、梁行約370cm、桁行590cmを測る。柱間は平均2.0m前後で、1.4～3.7mを測る。梁行の柱間が長いため、中间に浅い棟持柱があった可能性がある。柱穴の平面形は円形で、径約50cmを測る。柱痕を検出できたものは柱の径15～20cmを測る。遺物は土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SB3 (Fig.43) 区画A南部に位置する、 2×2 間の東西棟。主軸方位はN-87°-Eで、梁行約310cm、桁行400cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。上層に根石状の礫を有する柱穴が1基ある。柱穴の一部がSD001と重複するが、同時期であろう。SB1と建物の軸がほぼ同じである。遺物は土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SB4 (Fig.43) 区画D北部に位置する、 2×3 間の南北棟。主軸方位はN-4°-Eで、梁行約440cm、桁行560cmを測る。建物中央付近にも棟持柱が存在する。柱間は1.6～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形で、径70cm前後を測る。SB5に切られる。遺物は中国陶磁器や土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SB5 (Fig.44) 区画D北部に位置する、 2×3 間（相当）の東西棟。主軸方位はN-72°-Eで、梁行約330cm、桁行520cmを測る。西側に屋外棟持柱があるので、東側にも存在した可能性が高い。南辺も、

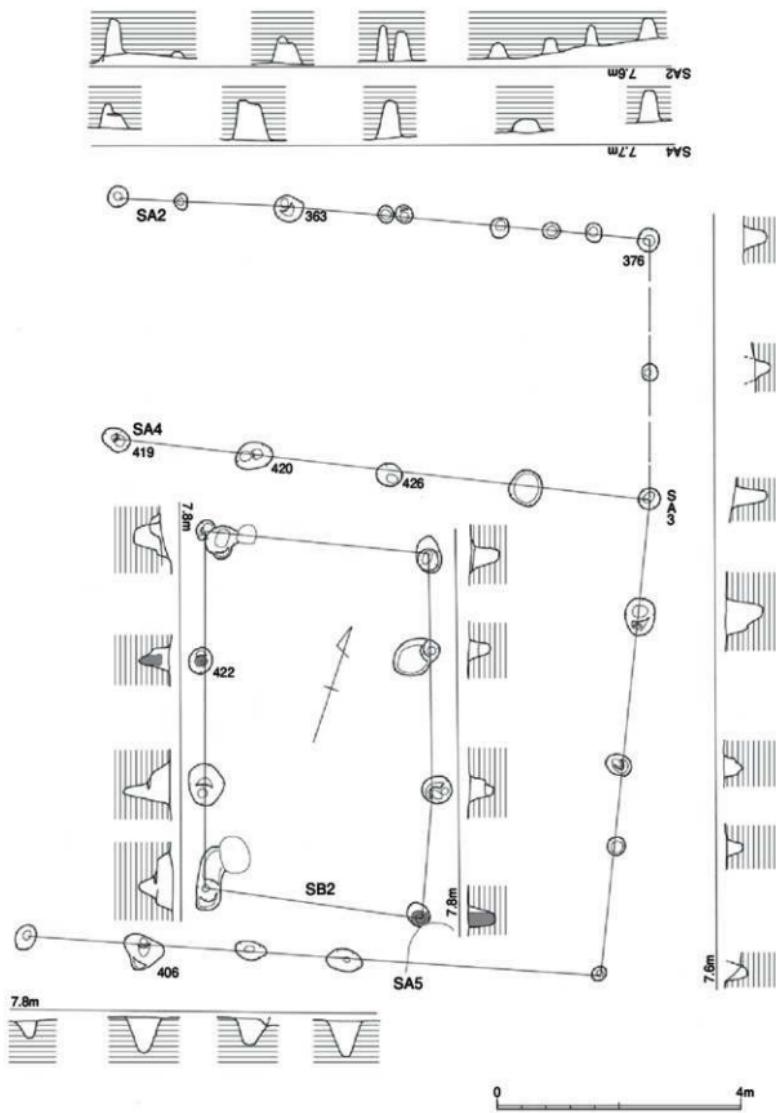


Fig.42 SB2・SA 2～5 実測図 (1/80)

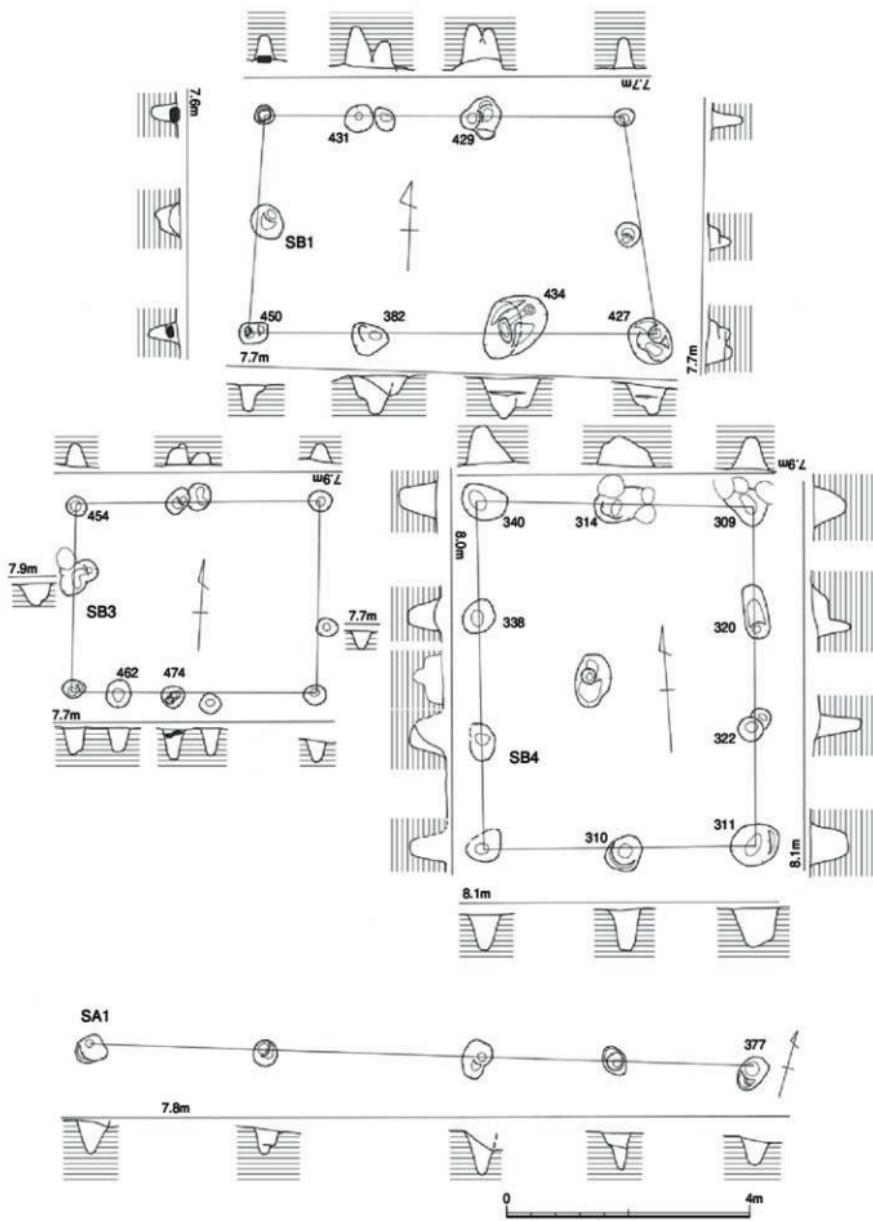


Fig.43 SB1・3・4・SA1実測図 (1/80)

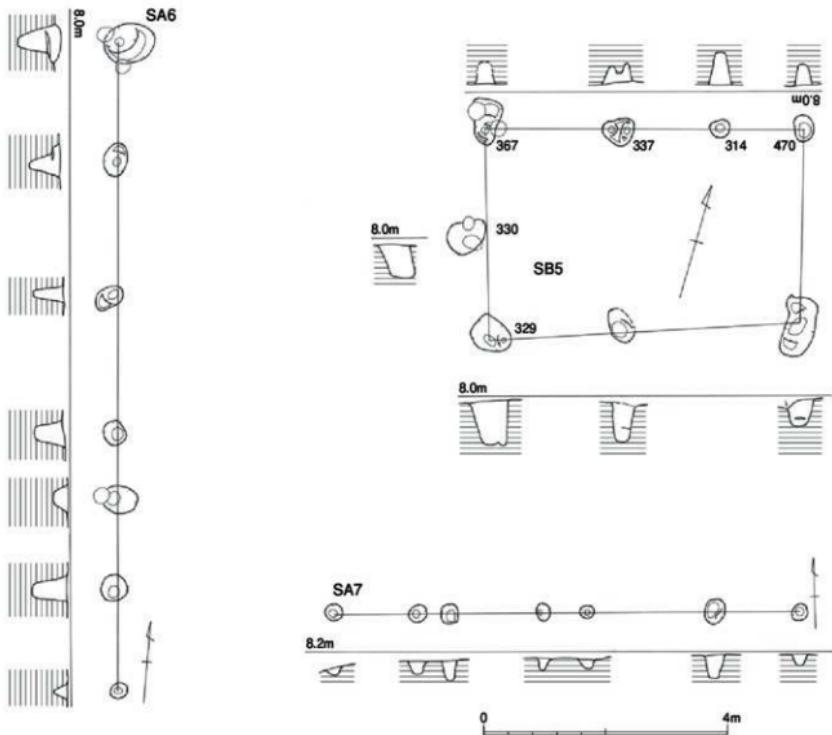


Fig.44 SB5・SA6・7実測図 (1/80)

柱穴が1基消失している可能性がある。柱穴の平面形は円形で、径50cm前後を測る。SB4を切る。遺物は中国陶磁器や瓦質土器、土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SB6 (Fig.45) 区画F北東部に位置する、 2×3 間の南北棟。主軸方位はN-3°-Eで、梁行約530cm、桁行810cmを測る。屋外棟持柱を有するが、屋内にも棟持柱列がある。柱穴の切り合いから2回以上の建て替えが考えられる (SP57, 58, 109など)。柱間は2.2~3mである。側柱の柱穴は平均で径100cm前後、深さ100cm前後であり、棟筋の柱穴列が径50cm前後である。柱穴の埋土や裏込土には、地山ブロックを多量に含むものが多い。柱痕や柱材の遺存するものがあり、柱の直径は10~20cmである。SP50, 54出土の柱材は板材であるが、SP97の柱痕跡のプランから、上部は丸木であったとみられる。SB9に切られる。遺物は中国陶磁器、瓦質土器、土師質土器などが出土し、16世紀前半から後半である。建て替え時の柱穴SP58から16世紀後半以降の青花磁 (漳州窯) が出土しており、建物の存続時期幅を示すと考えられる。

SB7 (Fig.45) 区画F北西部に位置する、 2×2 間の南北棟。主軸方位はN-13°-Eで、梁行約310cm、桁行460cmを測る。建物中央にも棟持柱がある。柱間は1.8~2.5mである。側柱の柱穴は径50cm前後、棟筋の柱穴列は径30cm前後である。時期は不明確であるが、16世紀代であろう。

SB8 (Fig.46) 区画F西部に位置する、 2×3 間相当の南北棟。主軸方位はN-4°-Eで、梁行約430cm、桁行650cmを測る。梁行の柱間が4m以上あるので、棟持柱が消失している可能性が高いとみられる。柱間の基準は2.1m前後とみられるが、東辺は柱穴5基が1m前後の間隔となっている。柱穴は円形で径50cm前後である。SB9に切られる。遺物は中国陶磁器、瓦質土器、土師質土器、銅錢、鉄滓、土製壁材などが出土し、16世紀前半頃とみられる。

SB9 (Fig.46) 区画F西部に位置する、 2×3 間相当の南北棟。主軸方位はN-1°-Eで、梁行約420cm、桁行600cmを測る。柱間は1.2~2.3mである。柱穴は円形で径60cm前後である。SB6や8を切る。遺物は中国陶磁器、土師質土器などが出土している。SB6を切っており、16世紀後半以降と考えられる。

SB10 (Fig.47) 区画F東部に位置する、 2×2 間相当の南北棟。主軸方位はN-5°-Eで、梁行約480cm、桁行500cmを測る。柱間は2.4m前後を基準とするが、東辺は柱穴6基が1m前後の間隔となっている。柱穴は円形で、東辺が径80cm前後、その他は50cm前後である。遺物は中国・朝鮮陶磁器、土師質土器、土製壁材などが出土しており、16世紀前半と考えられる。

SB11 (Fig.47) 区画F南部に位置する、 2×3 間の南北棟。主軸方位はN-12°-Eで、梁行約380cm、桁行580cmを測る。柱穴は円形で径30~60cm前後である。SB13を切る。遺物は中国陶磁器、備前陶器、土師質土器、土製壁材などが出土しており、16世紀後半と考えられる。

SB12 (Fig.47) 区画F南部に位置する、 2×2 間の南北棟。主軸方位はN-6°-Eで、梁行約340cm、桁行520cmを測る。柱間は梁行が1.6m、桁行が2.5mである。柱穴は円形で径60cm前後である。SB13を切る。遺物は朝鮮雜釉陶器、瓦質土器、土師質土器、土製壁材などが出土しており、16世紀代と考えられる。

SB13 (Fig.48) 区画F南部に位置する、 2×3 間相当の南北棟。主軸方位はN-6°-Eで、梁行約440cm、桁行620cmを測る。北辺の梁行は柱間が4mあるので、南辺のような屋外棟持柱が消失したものとみられる。柱間は1.6~2.5mである。柱穴は円形で径50cm前後である。SB11や12に切られる。遺物は瓦質土器、土師質土器などが出土しており、16世紀前半と考えられる。

SB14 (Fig.48) 区画F南西の陸橋部に位置する門状の建物である。建物の構造は 1×1 間で、主軸方位はN-10°-Eである。東西200cm、南北250cmを測る。柱穴は円形で径30cm前後である。3基は根石状の礫を有する。時期が不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SB15 (Fig.49) 区画N東部に位置する、 2×2 間の南北棟。主軸方位はN-0°-Eで、梁行約400cm、桁行580cmを測る。柱穴は円形で径30~50cm前後である。建物北西隅の柱穴の礫は根石であり、SP544の礫群は裏込石と考えられる。また、西辺中央の柱穴から1m間隔の両側に小柱穴があるが、平壁中央に設けられた入り口に関係する構造と考えられる。SB16に切られる。遺物は土師質土器などが出土しており、16世紀前半と考えられる。

SB16 (Fig.49) 区画N東部に位置する、 1×3 間の南北棟。主軸方位はN-8°-Wで、梁行約370cm、桁行640cmを測る。桁行の柱間は1.5~2.5mであるが、梁行は3.5m以上あり、中間に浅い棟持柱が存在した可能性が高いと考えられる。柱穴は円形で径20~60cm前後である。SB15を切る。遺物は釘などが出土している。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SB17 (Fig.50) 区画I東部に位置する、 2×3 間の東西棟。主軸方位はN-71°-Eで、梁行約390cm、桁行660cmを測る。柱間は1.8~2.3mで、柱穴は円形で径40~60cm前後を測る。SB18と重複するが、切り合い関係は不明である。出土遺物がないが、時期は16世紀代と考えられる。

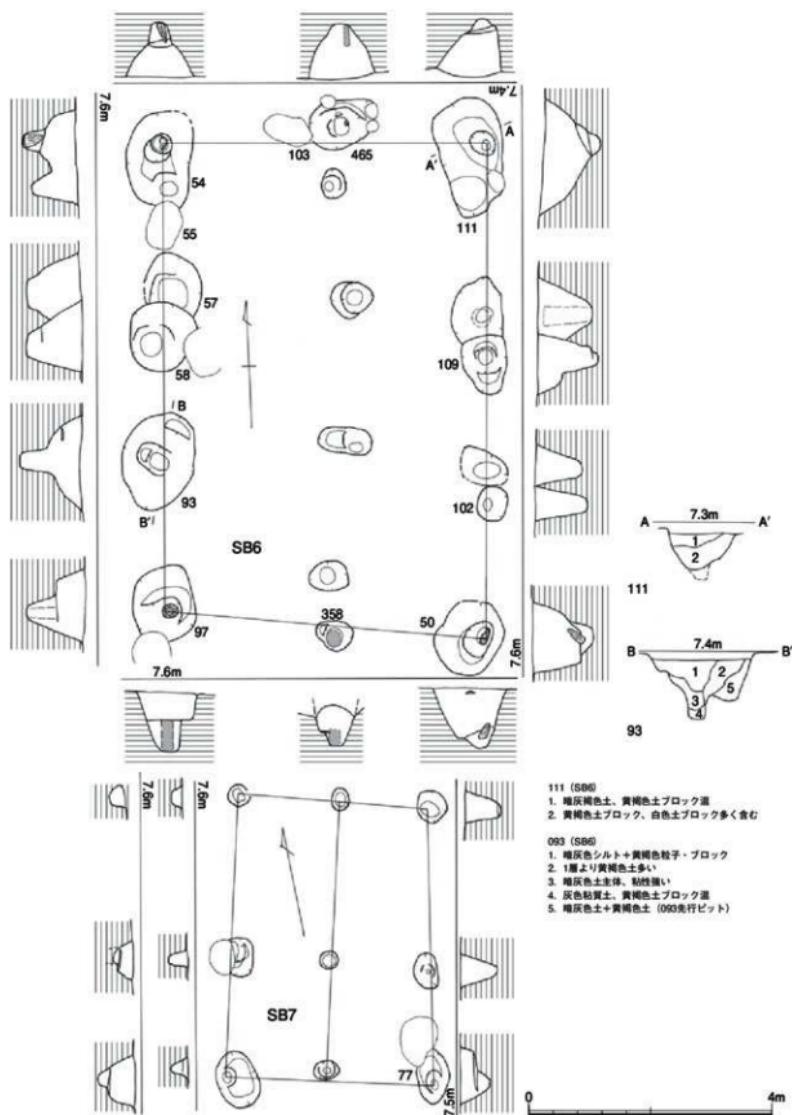


Fig.45 SB6-7実測図 (1/80)

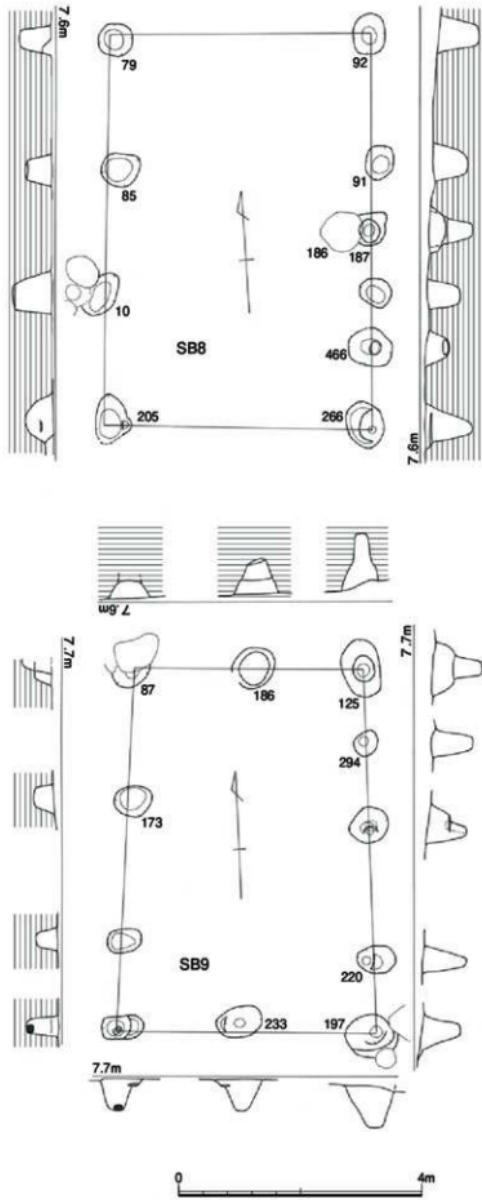


Fig.46 SB8-9実測図 (1/80)

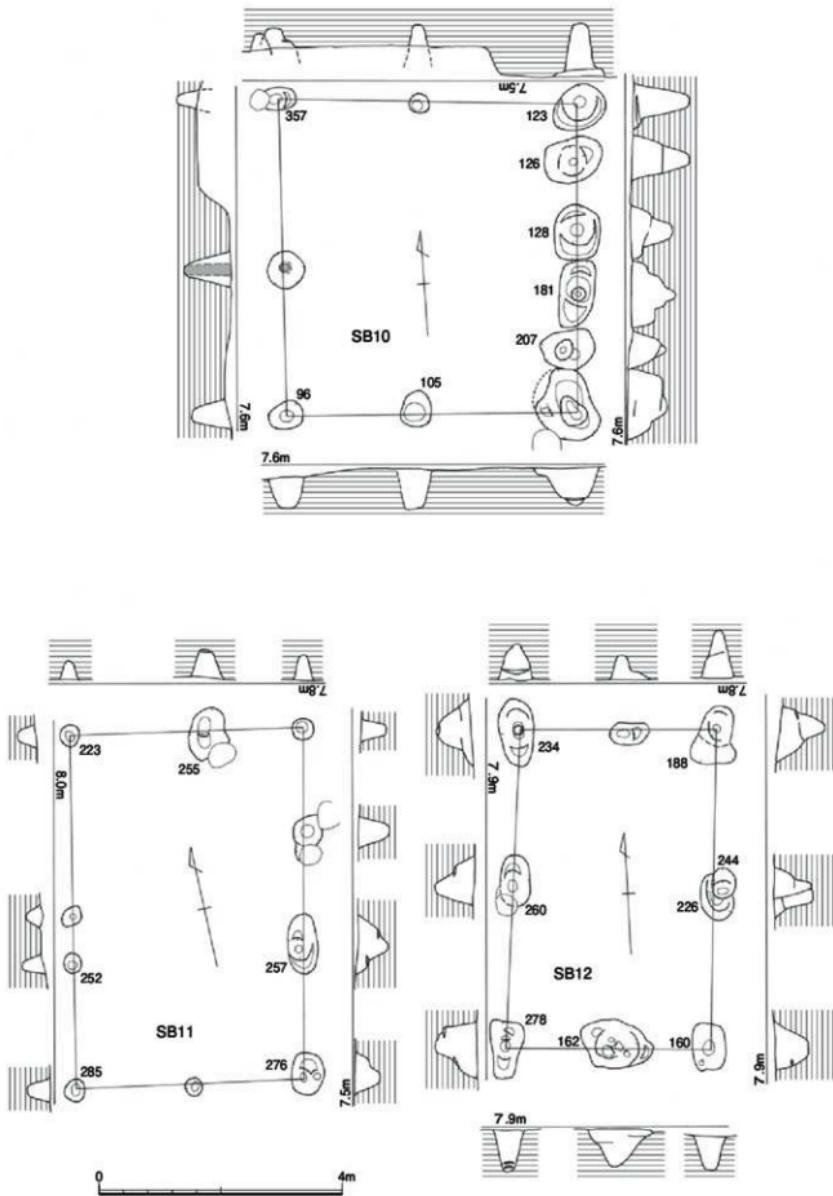


Fig.47 SB10·11·12実測図 (1/80)

SB18 (Fig.50) 区画I東部に位置する、 2×3 間の東西棟。主軸方位はN-70°-Eで、梁行約470cm、桁行710cmを測る。西辺は中央の棟持柱が遺存していない可能性が高い。柱間は2~27mで、柱穴は円形で径40cm前後を測る。SB17と重複するが、切り合い関係は不明である。出土遺物がないが、時期は16世紀代と考えられる。

SB19 (Fig.51) 区画J南東部に位置する、 2×3 間相当の南北棟。主軸方位はN-4°-Wで、梁行約300cm、桁行520cmを測る。南辺は中央の棟持柱が遺存していない可能性が高い。柱間は1.5~2mで、

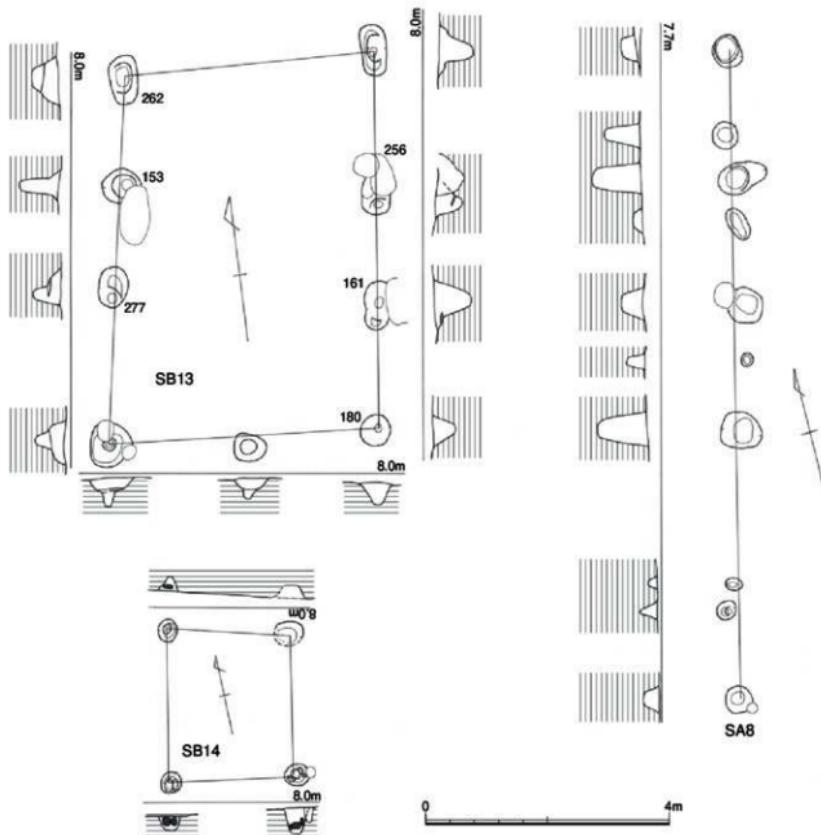


Fig.48 SB13・14・SA8実測図 (1/80)

柱穴は円形で径30cm前後を測る。出土遺物は中国陶磁器や朝鮮陶器、土師質土器のほか、近世以降の陶磁器も出土しているが、混入とみられ、時期は16世紀代と考えられる。

SB20 (Fig.51) 区画J南東部に位置する。大搅乱により南東部を消失しているが、 2×4 間の南北棟とみられる。主軸方位はN-4°-Wで、梁行約300cm、桁行520cmを測る。柱間は1~1.6mであるが、北側梁行の柱間は3mあり、中央の棟持柱が遺存していない可能性が高い。柱穴は円形で径30cm前後を測る。出土遺物は中国陶磁器などが出土しているが時期は不明確である、時期は16世紀代と考えられる。

SA1 (Fig.43) 区画Bに位置する、主軸方位がN-76°-Eの東西方向の柱穴列である。長さ10.9mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。遺物は土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SA2 (Fig.42) 区画A北部に位置する、主軸方位がN-78°-Eの東西方向の柱穴列である。長さ8.7mを測る。柱穴の平面形は円形で、径30cm前後を測る。遺物は土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SA3 (Fig.42) 区画Bに位置する、主軸方位がN-13°-Wの南北方向の柱穴列である。長さ7.9mを測る。SA3~5で一連の方形区画をなすとみられる。SA3の北側の延長は、2間（柱間約2m）でSA2につながるようにも考えられるが、軸線の方向がやや異なっており、一連の柵列にはならないであろう。柱穴の平面形は円形で、径30cm前後を測る。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SA4 (Fig.42) 区画A北部に位置する、主軸方位がN-78°-Eの東西方向の柱穴列である。長さ8.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。遺物は土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SA5 (Fig.42) 区画A北部に位置する、主軸方位がN-76°-Eの東西方向の柱穴列である。長さ9.4mを測る。東部の1間は柱間が4m以上あるので、この部分には柵がなく、通路になっていたものとみられる。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。遺物は土師質土器などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀前半と考えられる。

SA6 (Fig.44) 区画D北部に位置する、主軸方位がN-6°-Wの南北方向の柱穴列である。長さ10.6mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SA7 (Fig.44) 区画D南部に位置する、主軸方位がN-88°-Wの東西方向の柱穴列である。長さ7.7mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SA8 (Fig.48) 区画F東部に位置する、主軸方位がN-13°-Eの南北方向の柱穴列である。長さ10.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、径50cm前後を測る。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SA9 (Fig.49) 区画Nに位置する、主軸方位がN-6°-Wの南北方向の柱穴列である。3間（柱間約2.2m）長さ6.7mを測るが、西側が削平された掘立柱建物の東辺である可能性も考えられる。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SA10 (Fig.49) 区画Nに位置する、主軸方位がN-4°-Wの南北方向の柱穴列である。長さ7.1mを測る。柱穴の平面形は円形で、径40cm前後を測る。1基の柱穴は根石状の礫を有する。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

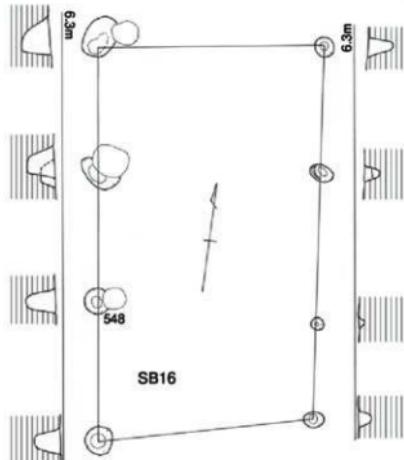
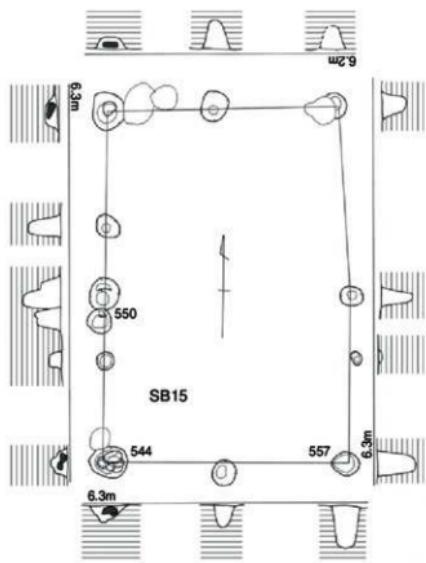
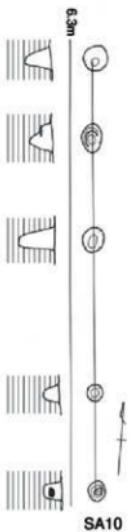
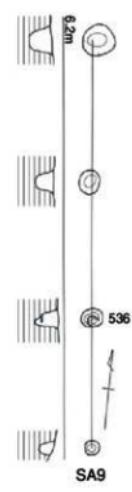


Fig.49 SB15・16・SA9・10実測図 (1/80)

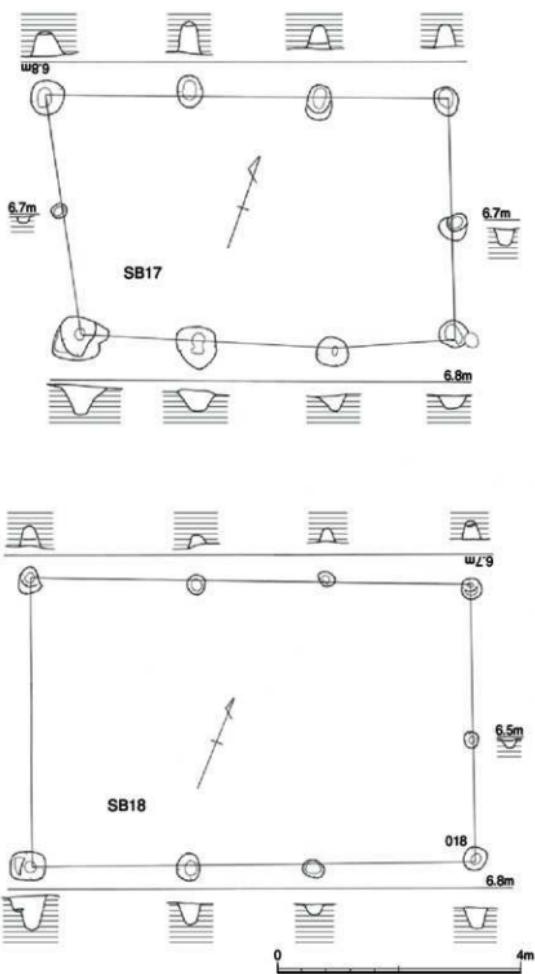


Fig.50 SB17・SB18実測図 (1/80)

③井戸 (SE)

SE049 (Fig.52) 区画Fの南東、SD013の南東隅部と重複する位置である。井戸の位置はちょうど、陸橋に面して溝が浅くなる位置であり、溝と井戸は同時併存と考えられる。井戸の構造は石組井戸であり、2回以上の作り替えが想定されるものである。

検出面の平面形は円形を呈し、直径2.2mを測る。深さは3.1mを測り、底面の地山は風化岩盤土である。現在の湧水点は底面近くであるが、地山が還元している底面から50cmほどの部分が当時の湧水点であろう。最下層から板材が出土しており、集水用の桶が底に置かれていた可能性が考えられる。掘り方は、地山C層とD層の境目、標高5.7mほどの箇所が、水の作用によって最も抉れており、灰色粘質土で埋没している。

石組の石材は主に人頭大の花崗岩礫を用いているが、遺跡周辺で採れる石材である。石組は標高5m～7.2m付近の間に施されていて、厚い箇所で、壁面からの厚みは20～50cm前後である。積み方はあまり強固なものではなく、上位と、前述の抉れ部は多くの石材が抜け落ちている。標高6m前後の井戸中位付近には50cmほどの礫集積堆がある。これは、上位の壁面石組の基底部となっているので、崩落した石材の自然堆積ではない。前述のような壁面の侵食等によって石組の崩落が起きたために、改修されたものと考えられる。改修後のSE049は深さ1.6mほどであり、湧水点には達していないので、水溜状遺構に、その性格が変化したものと考えられる。大塚遺跡において、井戸（全て石組）は稀少な遺構であるが、このような構造の変化は遺構の性格を考える上で注目すべき点であろう。

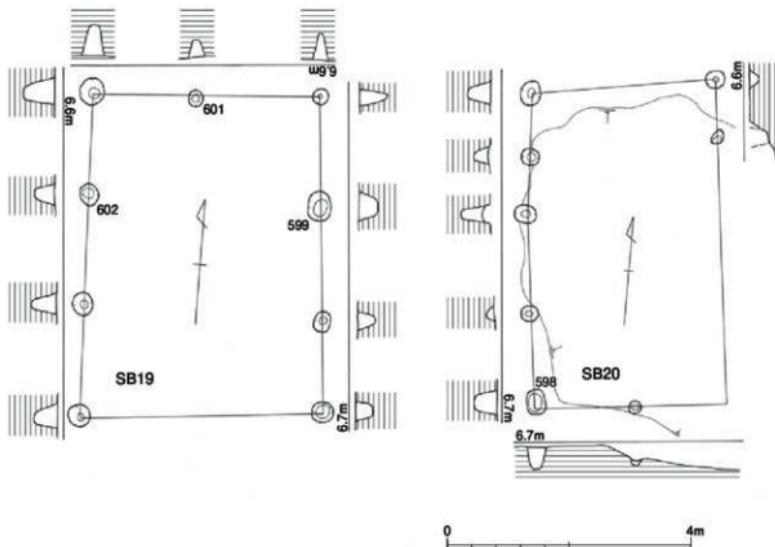


Fig.51 SB19・20実測図 (1/80)

出土遺物は中国陶磁器、瓦質土器、土師質土器、小刀の木製鞘、木製円蓋、板材（井戸桶？）などである。下層からの出土が多い。16世紀前半から後半にかけての遺構と考えられる。

④土坑

中世後半の土坑と考えられる遺構は19基以上ある。確実に近世以降に下るものは除外している。いずれの土坑も各区画内外の縁辺付近に位置している。性格の不明確なものが多いが、平面が円形で比較的深く、遺物が全く出土しないSK015やSK523などは水溜状遺構（湧水点には達していない）と考えられる。貼床があり、比較的遺物が出土するSK561は、地下式貯蔵施設と考えられる。その他は略方形や隅丸長方形の土坑が多いが、概して出土遺物は少なく、その性格も不明確である。

SK003 (Fig.53) 調査区東部の区画A東に位置する。遺構の東側は後世の段落ちにより消失している。長さ170cm以上、幅約170cmを測る東西方向の土坑である。SA3、5と重複するが、その切り合い関係は不明である。遺物は中国陶磁器と土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

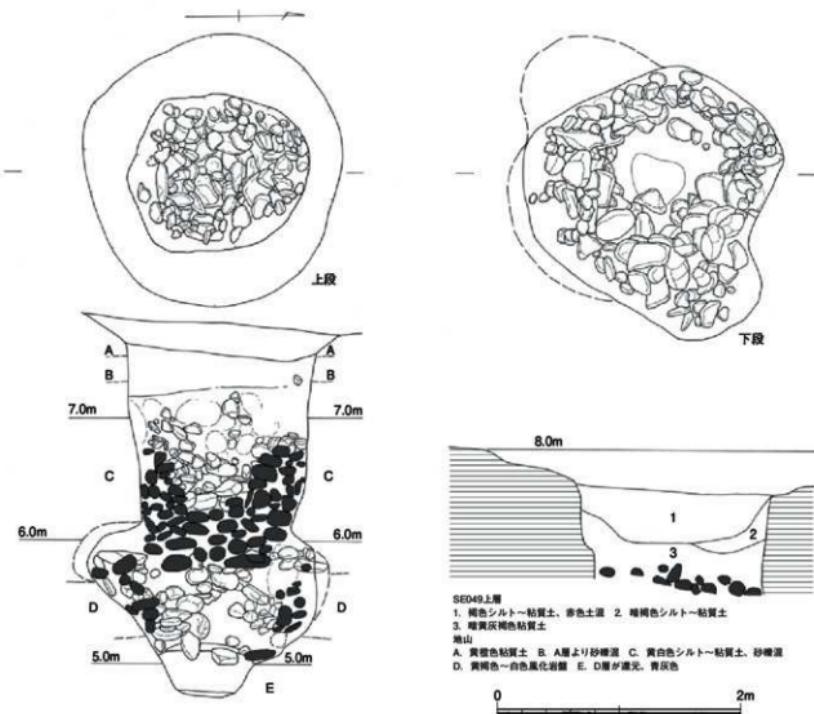


Fig.52 SE049実測図 (1/40)

SK012 (Fig.53) 調査区北部の区画H南外側に位置する。遺構の南側は後世の溝により消失している。平面形は小判形で、長さ約110cm、幅50cm以上を測る東西方向の土坑である。遺物は中国陶器と土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK015 (Fig.53) 調査区北部の区画 I に位置する。平面形は円形で、直径約70cm、深さ55cm以上を測る。覆土は淡色の粘質土で、遺物が全く出土していない。後述のSK523に類似しており、本来は深さ 1 m 以上の遺構と考えられる。底面が湧水点に達していないため、井戸とは考えがたいが、覆土の性質や遺物を全く含まない点などから水溜状遺構と考えられる。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK024 (Fig.53) 調査区北部の区画H南外側に位置する。平面形は円形で、直径約80cmである。遺物は全く出土していない。深さが20cmしか遺存していないが、SK015やSK523に類似しており、水溜状遺構である可能性が考えられる。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK170 (Fig.53) 調査区中央部の区画F西に位置する。平面形は略方形で、一辺約160cmを測る。SB8に切られるが、SD013との切り合い関係は不明である。遺物は中国陶磁器と土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK270 (Fig.53) 調査区中央部の区画F西に位置する。平面形は不整形で、一辺約110cmを測る。底面で検出した小ピットはこの遺構と一連のものか、先行する遺構か、定かではない。SB14を切っている。遺物は土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK279 (Fig.53) 調査区中央部の区画F西に位置する。平面形は略長方形で、長さ約150cm、幅約100cmを測る南北方向の土坑である。遺物は土師質土器と砥石が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK296 (Fig.53) 調査区東部の区画C西に位置する。平面形は不整隅丸長方形で、長さ約150cm、幅約80cmを測る南北方向の土坑である。SD005を切る。遺物は土師質土器のほか、炭の角片が一袋分出土している。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK400 (Fig.53) 調査区東部の区画A西に位置する。平面形は略長方形で、長さ約210cm、幅約50cmを測る東西方向の土坑である。遺物は土師質土器や土製壁材が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK405 (Fig.53) 調査区東部の区画A西に位置する。平面形は略長方形で、長さ約175cm、幅約110cmを測る南北方向の土坑である。遺物は土師質土器や土製壁材が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK511 (Fig.54) 調査区西部の区画N東、区画溝SD504の北東コーナーに位置する。平面形は略方形で、長さ約105cm、幅約90cmを測る南北方向の土坑である。SD504とは併存して機能した遺構であるが、溝に付設された集水施設と考えられる。溝底面からの深さは45cmを測る。遺物は土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK513 (Fig.54) 調査区西部の区画M北に位置する。平面形は不整長方形で、長さ約195cm、幅約160cmを測る東西方向の土坑である。SD503に切られる。遺物は土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK521 (Fig.54) 調査区西部の区画N西に位置する。平面形は略長方形で、長さ約160cm、幅約110cmを測る東西方向の土坑である。遺物は土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK523 (Fig.54) 調査区西部の区画M北に位置する。平面形は円形に近く、直径110cm前後、深さ110cm以上を測る。覆土は淡色の粘質土で、遺物が全く出土していない。底面が湧水点に達していない

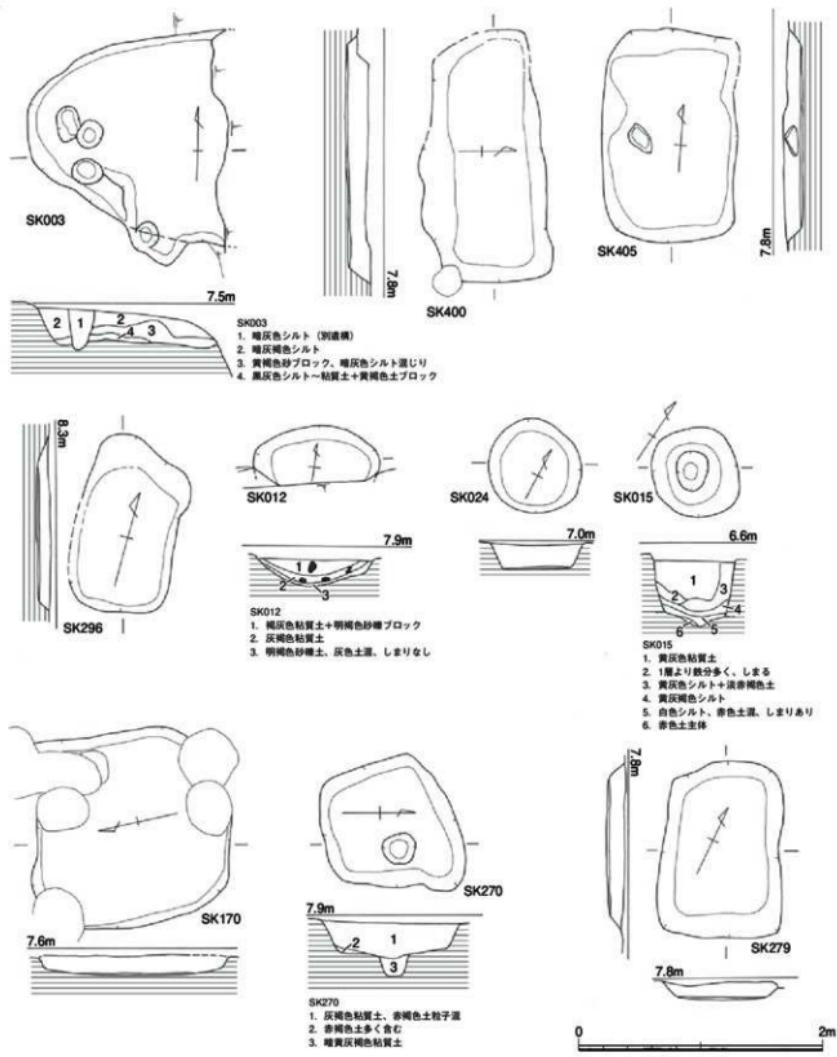


Fig.53 SK003・012・015・024・170・270・279・296・400・405実測図 (1/40)

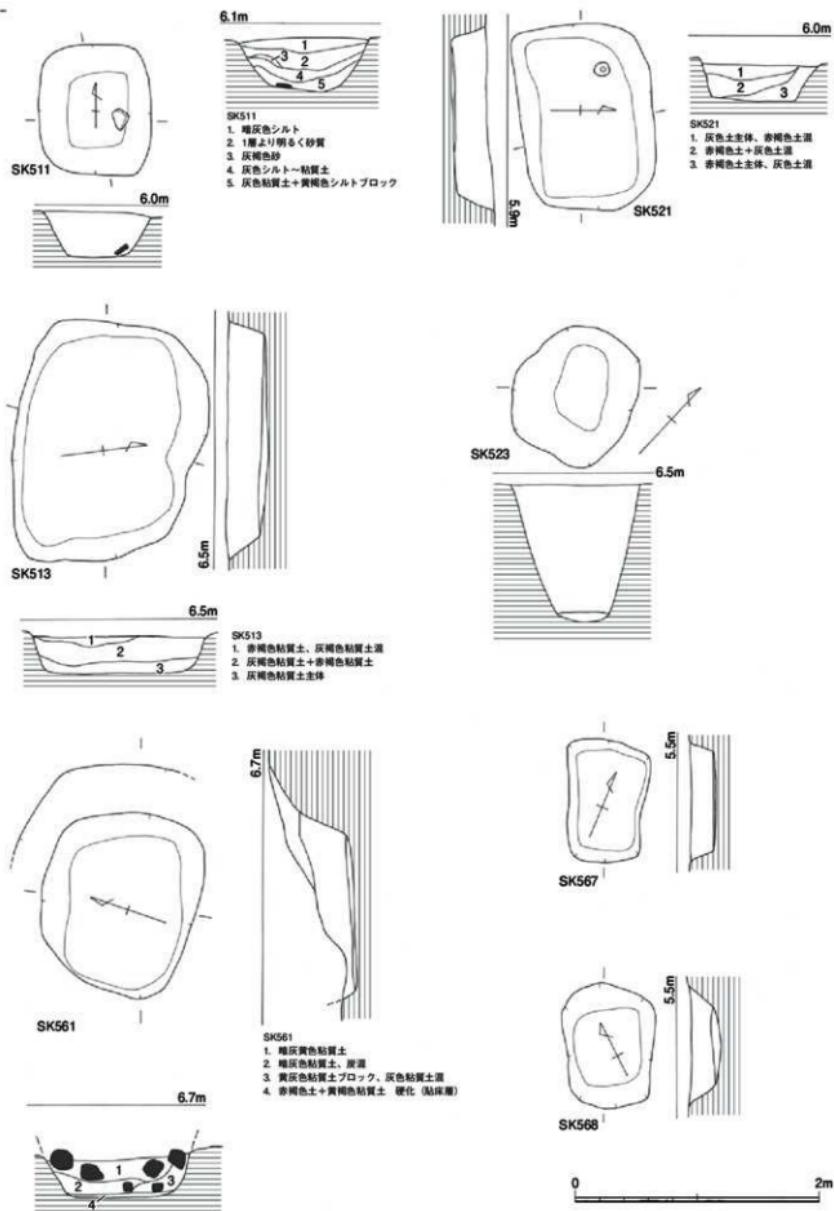


Fig.54 SK511・513・521・523・561・567・568実測図 (1/40)

ため、井戸とは考えがたいが、覆土の性質や遺物を全く含まない点などから水溜状遺構と考えられる。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK561 (Fig.54) 調査区西部の区画L西外側に位置する。平面形は不整方形で、長さ200cm以上、幅160cm以上、深さ70cm以上を測る。SD507との切り合い関係は不明である。底面に貼床層（4層）があり、覆土に礫を多く含む。遺物も当該期の土坑では出土量がやや多く、中国・朝鮮陶磁器や土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。これらの特徴は、大塚遺跡第13次調査SK4に類似しており、小規模であるが、方形堅穴状遺構の一種、機能としては地下式貯蔵施設の可能性が高いと考えられる。

SK567 (Fig.54) 調査区西部の区画M西に位置する。平面形は略長方形で、長さ約100cm、幅約70cmを測る南北方向の土坑である。遺物は土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK568 (Fig.54) 調査区西部の区画M西に位置する。平面形は略長方形で、長さ約105cm、幅約75cmを測る南北方向の土坑である。遺物は土師質土器が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK574 (Fig.55) 調査区中央部の区画K東に位置する。平面形は略方形で、長さ約235cm、幅約215cmを測る南北方向の土坑である。遺物は土師質土器や土製壁材が出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

SK604 (Fig.55) 調査区中央部の区画K北外側に位置する。平面形は小判形で、長さ170cm以上、幅100cmを測る南北方向の土坑である。遺物は鉄製釘などが出土した。時期は不明確であるが、16世紀代と考えられる。

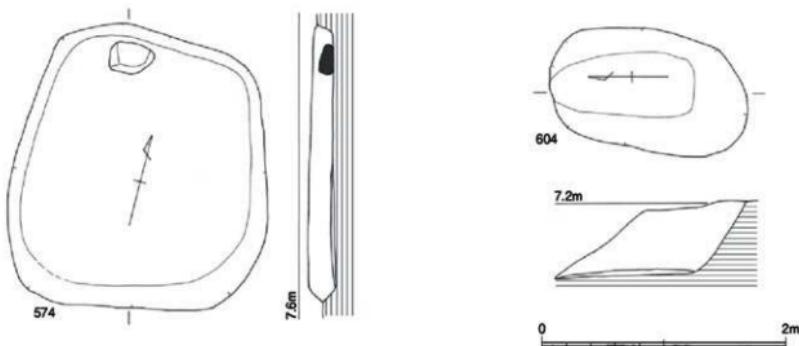


Fig.55 SK574・604実測図 (1/40)

2) 古墳時代から古代の遺構

本調査区は中世末の遺構が主体であり、先行する時期の遺構は多くが、中世以降の開発により、消失していると考えられる。検出した古代以前の遺構は平安時代（10世紀後半）の木棺墓1基、奈良時代前後の焼土坑6基、古墳時代中期前半の堅穴建物1棟と堅穴建物の残骸である可能性が高い遺構2基である。これらは調査区西部のV、VI区で検出したが、西に向かって落ちる丘陵斜面に位置したために、かろうじて削平による消失を免れた遺構と考えられる。

①平安時代の木棺墓 (Fig.56)

SM510 調査区北西部、VI区西に位置する木棺墓である。掘り方の平面形は隅丸長方形で、長さ約280cm、幅約120cmを測る。深さ20cm未満の遺存である。主軸方位はN-22°-Wであるが、北側延長線上に今山が位置しており（PL.56）、その関連を考えたい。平面で木棺のプランを検出することはできなかったが、短軸方向の土層断面から、木棺葬の可能性が高いと考えられる。つまり、5、6層が棺内に流入した堆積土であり、2、3、7層が裏込め土、1層が墓壙埋土と考えられる。木棺は埋没の過程で腐食と土圧によりやや西側に傾き、1層はやや沈下しているものと考えられる。墓壙内からは、北側から越州窯青磁碗（R1）と土器器柄（R2）が出土しており、西側からは工具状鉄器F1とその茎部片F2が出土している。鉄器は土層断面から棺外に位置するが、一つの鉄器を破碎した状態で埋納している。北側のR1、R2は略完形品であるが、それぞれの出土状態は西や南に傾いており、棺内の副葬品とは考え難い。棺蓋上供獻の可能性もあるが、鉄器と同じように、棺外の裏込め部に埋納されたものであると考える。これらから推定される棺の規模は長さ約160cm、幅約45cmである。棺は墓壙内のやや南東寄りに位置している。

木棺墓の時期は出土したR1とR2から10世紀後半と考えられる。

②奈良時代前後の焼土坑 (Fig.57)

簡易な構造の炭窯と考えられる焼土坑を調査区西部のV区周辺で、6基検出した。いずれも出土遺物が乏しく、時期が明確ではないが、周辺での調査事例から奈良時代前後の製鉄に関連する遺構と考えられる。

SK514 V区北部に位置する。平面形は不整三角形で、長さ約100cm、幅約80cmを測る。主軸は東西方向に近く、東側が高くなっている。壁面はほぼ四周が検出面から中位まで酸化被熱している。

SK515 V区北部に位置する。北側をSD504に切られている。平面形は楕円形で、掘り方が2段ある。上段は東西約170cm、南北約125cmで、検出面からの深さが10cm前後である。壁面は焼けていない。下段は南北約120cm、東西約90cmで、上段テラスからの深さは30cm前後である。壁面は四周が下位近くまで酸化被熱して硬化している。この焼土坑は北側の炭層の広がりを切っており、炭層の南端部が焼土坑

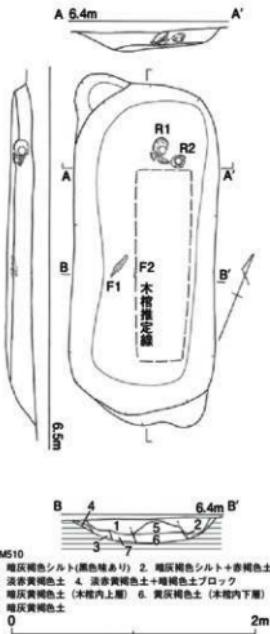


Fig.56 木棺墓SM510実測図 (1/40)

の壁面となっている。この炭層はおそらく先行する焼土坑下層のものであろう。SK515の上段は先行する焼土坑の周辺を掘り広げて設けられた作業面であり、その内部をさらに深く掘りこんで、下段の焼土坑が作られたものと考えられる。

SK516 V区北部に位置する。平面形は梢円形に近く、長さ約120cm、幅約95cmを測る。主軸は南北方向に近い。壁面は東壁の一部と西から北壁にかけての箇所が酸化被熱している。東壁は焼け方が弱い。

SK517 V区北部中央付近に位置する。SD503に切られているため、遺構の遺存状態が悪く、南半分が消失しているが、主軸は南北方向に近いと考えられる。長さ60cm以上、幅約80cmを測る。本来は壁面のほぼ四周が酸化被熱していたとみられるが、焼け方は弱い。

SK519 IV区の南部と16次調査区の境界に位置する。近世溝に切られ、下位のみの遺存である。検出面の遺構覆土は焼土坑下層の炭層であった。平面形は南北方向に長く、南側が狹まっている。長さ約130cm、幅約90cmを測る。壁面の酸化被熱は、北壁の一部と東壁の北半部のみが遺存していた。

SK520 V区南部に位置する。平面形は不整三角形で、長さ約130cm、幅約110cmを測る。主軸は東西方向に近く、東側が高くなっている。壁面は東壁から南壁を中心として酸化被熱しているが、西壁や北壁の大部分は酸化被熱していない。

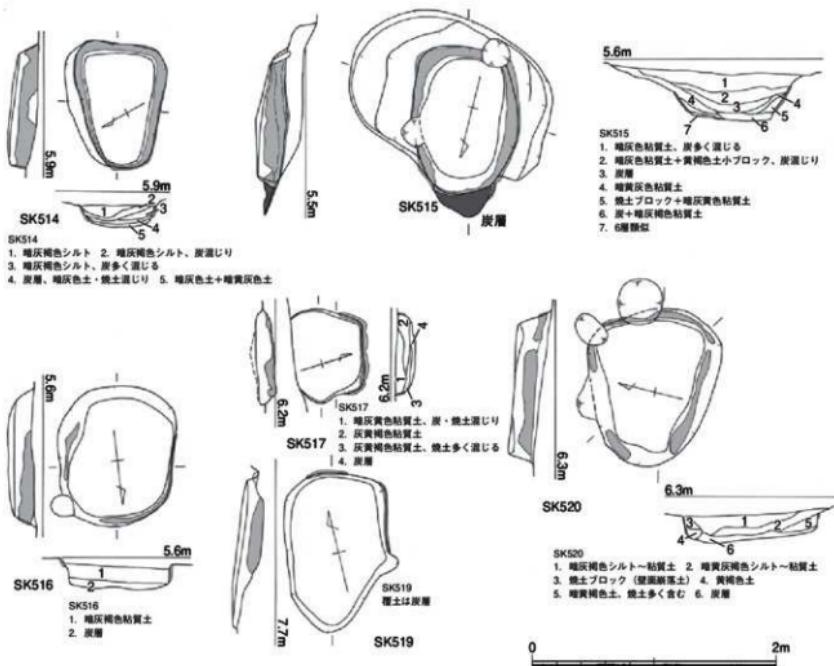


Fig.57 焼土坑SK514・515・516・517・519・520実測図 (1/40)

③古墳時代中期の遺構 (Fig.58)

調査区の西端部、V区西縁で検出したもので、SC518は堅穴建物の東隅周辺、SX502も堅穴建物の床面の一部と考えられるもので、周辺から古墳時代中期前半の土師器がまとまって出土している。SX525は時期等が不明確な酸化被熱面であるが、これも堅穴建物の炉であるとみられる。

これらは丘陵西斜面に立地する古墳時代中期の建物の一部がかろうじて遺存したものと考えられる。

SC518 北辺と東辺が400cm以上の方形堅穴建物の東隅部周辺と考えられる遺構である。東部上面の張り出し状の部分は、別遺構か、壁面の上位が崩落したものであり、この堅穴建物本来の遺構掘り方ではないと考えられる。検出面から床面までの深さは約40cmである。床面に貼り床は施されておらず、炉状の被熱面や炭、焼土の散布がみられる。また、壁際の東隅から南にかけて、焼土層が広がっている（壁面が被熱しているわけではない）。遺構覆土にも炭や焼土が一定量含まれる。炭化材が出ていないので、焼失住居とも言い難く、焼土や炭の性格については不明である。

床面で、柱穴（P1）と壁際土坑（P2）を1基ずつ検出した。柱穴は径約40cm、深さ約30cmを測る。柱痕はみられなかったが、掘り方の形状から、柱径は15cm前後であろう。壁際土坑は長さ110cm以上、幅約90cmで、深さ約40cmである。

出土遺物は多くないが、古墳時代中期前半の壺などが出土している（Fig.68-6～9）。弥生時代終末期の土器（Fig.68-8）や円筒埴輪の基部（Fig.68-9）は混入遺物と考えられる。

SX502 遺構面で、土師器を包含する東西約100cm、南北約150cmの暗褐色土の堆積を検出したので精査したところ、その下層から深さ5cmほどの落ち込みや径20cm前後の小柱穴などを検出した。古墳時代中期前半の甕や高杯などがまとまって出土している（R1～4、Fig.68-1～5）状況等からも、堅穴建物床面の残骸である可能性が高いと考えられる。付近の地山面の標高は約5.0m、SC518床面の標高は5.1m前後である。

SX525 東西、南北約40cmの酸化被熱面である。被熱範囲は東端が狭くなっている。付近の標高は5.35mである。周辺から遺物の出土もなく、時期不明の遺構であるが、SC518やSX525に近在する位置で検出されたものであり、堅穴建物の炉周辺の床面が遺存したものである可能性を考えて、ここで報告しておく。

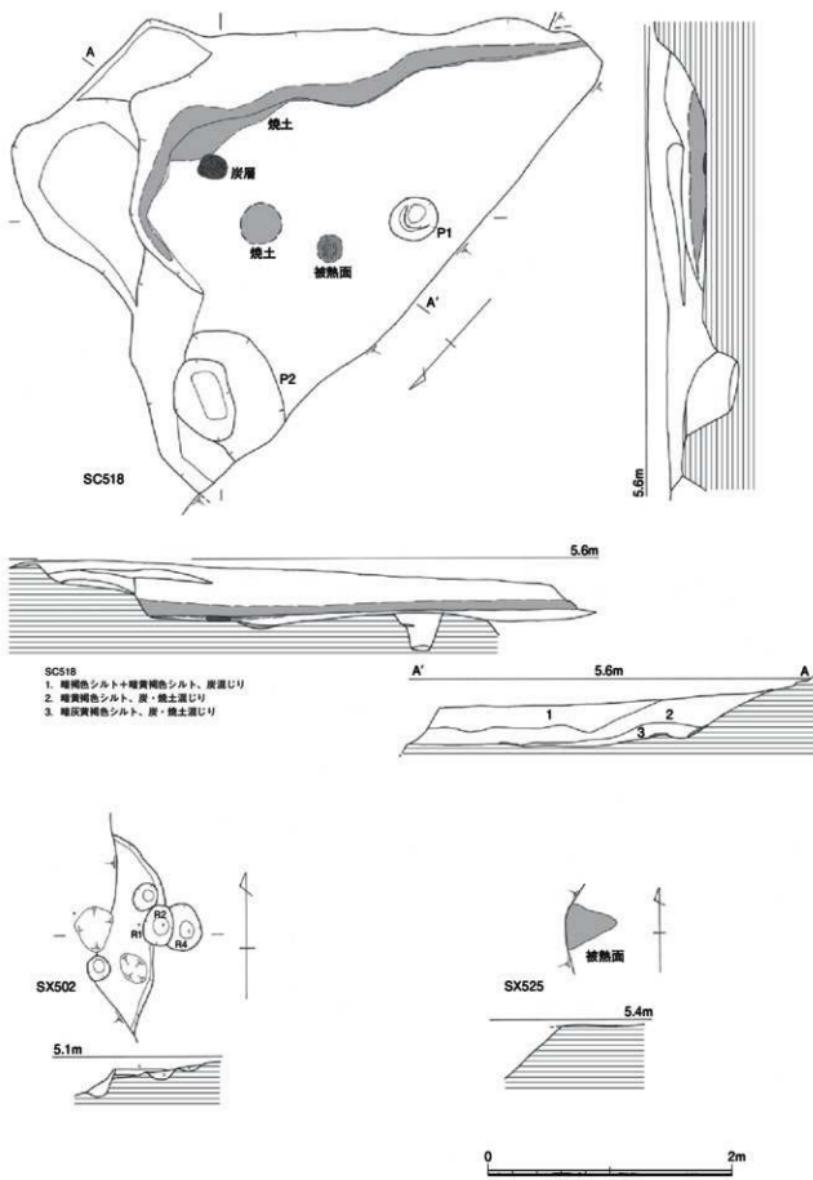


Fig.58 SC518・SX502・525実測図 (1/40)

Tab.4 大塚17次遺構一覧

報告遺構番号	遺構種類	時代	挿図 (Fig)	図版 (PL)
SD001	区画溝	中世末	37	41,44
SK003	土坑	中世末	53	51
SD004	溝	中世末	37	41,44
SD005	区画溝	中世末	37	41,44
SD006	区画溝	中世末	37	41,44
SD007	区画溝	中世末	37	41,44
SD008	区画溝	中世末	38	41,45
SK012	土坑	中世末	53	51
SD013	区画溝	中世末	39	41,45
SD014	溝	中世末	39	41
SK015	土坑（水溜状遺構？）	中世末	53	51
SK024	土坑（水溜状遺構？）	中世末	53	
SD036	区画溝（SD013内）	中世末	39	41
SD037	区画溝（SD013内）	中世末	39	41
SE049	石組井戸	中世末	52	50
SK170	土坑	中世末	53	52
SK270	土坑	中世末	53	51
SK279	土坑	中世末	53	52
SK296	土坑	中世末	53	52
SK301	土坑	中世末	37	52
SD341	溝	中世末	37	41
SD345	溝	中世末	37	41
SD351	溝	中世末	37	41,44
SD356	区画溝	中世末	37	41,45
SK400	土坑	中世末	53	53
SK405	土坑	中世末	53	53
SX502	竪穴建物の床面？	古墳時代中期	58	60
SD503	区画溝	中世末	41	43,46
SD504	区画溝	中世末	41	43,46
SD505	区画溝	中世末	40	42,45
SD506	区画溝	中世末	40	42
SD507	溝	中世末	40	42,45
SD508	区画溝	中世末	40	42,46
SD509	区画溝	中世末	40	42,46
SM510	木棺墓	古代後半	56	56
SK511	土坑	中世末	54	54
SK513	土坑	中世末	54	53
SK514	焼土坑	古代	57	57
SK515	焼土坑	古代	57	57
Sk516	焼土坑	古代	57	57
SK517	焼土坑	古代	57	58
SC518	竪穴建物	古墳時代中期	58	59
SK519	焼土坑	古代	57	58

報告遺構番号	遺構種類	時代	挿図 (Fig)	図版 (PL)
SK520	焼土坑	古代	57	58
SK521	土坑	中世末	54	54
SD522	区画溝	中世末	41	43
SK523	土坑（水溜状遺構？）	中世末	54	54
SK524	溝	中世末？	41	46
SX525	豎穴建物の炉？	古墳時代中期？	58	60
SK561	土坑（地下式貯蔵施設？）	中世末	54	55
SK567	土坑	中世末	54	
SK568	土坑	中世末	54	
SK574	土坑	中世末	55	55
SK604	土坑	中世末	55	55
SB1	掘立柱建物	中世末	43	47
SB2	掘立柱建物	中世末	42	47
SB3	掘立柱建物	中世末	43	47
SB4	掘立柱建物	中世末	43	47
SB5	掘立柱建物	中世末	44	47
SB6	掘立柱建物	中世末	45	48
SB7	掘立柱建物	中世末	45	48
SB8	掘立柱建物	中世末	46	
SB9	掘立柱建物	中世末	46	47
SB10	掘立柱建物	中世末	47	47
SB11	掘立柱建物	中世末	47	49
SB12	掘立柱建物	中世末	47	49
SB13	掘立柱建物	中世末	48	49
SB14	掘立柱建物	中世末	48	45
SB15	掘立柱建物	中世末	49	49
SB16	掘立柱建物	中世末	49	49
SB17	掘立柱建物	中世末	50	49
SB18	掘立柱建物	中世末	50	49
SB19	掘立柱建物	中世末	51	48
SB20	掘立柱建物	中世末	51	
SA1	柵	中世末	43	
SA2	柵	中世末	42	
SA3	柵	中世末	42	
SA4	柵	中世末	42	
SA5	柵	中世末	42	
SA6	柵	中世末	44	
SA7	柵	中世末	44	
SA8	柵	中世末	48	
SA9	柵	中世末	49	
SA10	柵	中世末	49	

3) 出土遺物

本調査地点から出土した遺物はコンテナケース約40箱分である。遺構と同様に中世後期の土器・陶磁器が出土遺物の主体をなすが、完形品は少なく、遺物の集中的な出土もみられなかった。16世紀前半を中心とする景德鎮窯系青花磁、白磁、龍泉窯系青磁などの中国陶磁器、粉青沙器、李朝雜釉陶器などの朝鮮陶磁器、瓦質、土師質の（足）鍋や擂鉢、土師皿などが中心であるが、天目茶碗、漳州窯系青花磁、翡翠釉磁器、華南彩陶、中世前期の白磁や、青磁なども出土している。土器、陶磁器以外の中世後期前後の遺物には鉄製品（鎌、馬鍔、鎌、釘ほか）、銅錢（錢種不明）、小刀の木製鞘や刀の鞘金具、鉛玉（火繩銃の弾丸）、石製品（石鍋、石臼、砥石）などが出土している。瓦の出土は少ない。

古代以前の遺物では、古墳時代中期前半の土師器が堅穴建物等から出土し、古代後半の越州窯系青磁碗と土師器椀が鉄製工具と併に木棺墓から出土している。一方、三稜尖頭器や台形梯石器などの旧石器、阿高系繩文土器、後期前後の弥生土器、古墳時代後期前半の大塚古墳に由来するとみられる埴輪や須恵器なども少量出土しているが、これらは遺構に伴わない遺物である。

①土器・陶磁器・瓦

中世後期の土器・陶磁器

大塚遺跡第13次調査の報告（福岡市報告書第1025集）の中で、出土した中世後期の土器・陶磁器の年代について検討したが、本調査地点の出土品も近い時期である。すなわち、大塚遺跡の当該期の土器・陶磁器の多くは、山本信夫・山村信榮1997「九州・南西諸島（中世食器の地域性）」「国立歴史民俗博物館研究報告」71の中世V期（15世紀後葉～16世紀末）に該当する。中でも、定量の龍泉窯系青磁碗と「染付C群」（景德鎮窯系青花磁）により構成される陶磁器組成は、續伸一朗1995「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』や田中克子2011「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌20周年記念特別号』の「Ⅱ期」に該当し、16世紀前半までの時期が主体である。本調査地点では15世紀以前や16世紀後半以降のものも少数出土しているが、以下で時期について特に記述のないものは16世紀前半に該当するか、16世紀代の中で時期の特定が難しいものである。

当該期の陶磁器の分類については、『貿易陶磁研究』2（1982年）の小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」、森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」や、博多出土貿易陶磁分類表によることとする。白磁は特記しない限り景德鎮窯系である。また、朝鮮陶磁器については佐藤一郎2011「朝鮮から博多へ来た使節とやきもの」『博多研究会誌20周年記念特別号』を参照した。

出土土器の主体は土師皿であり、型式的に15世紀後半以降、16世紀代と考えられるものである。杯に分類できるものはほとんどみられない。いずれも糸切り底であるが、底面に板状圧痕のあるものが1点ある。

溝出土の土器・陶磁器

SD001出土土器・陶磁器（Fig.59）

1は龍泉窯系青磁碗V類の腰部である。外面に線刻の細蓮弁文が施される。2は土師皿である。

SD007出土土器・陶磁器（Fig.59）

SD007からは近世に下る陶磁器も少なからず出土しているが、ここでは中世までの遺物から抽出したものを報告したい。3は李朝白磁杯である。4・5は李朝雜釉陶器碗である。6は玉縁口縁の中国製陶器鉢である。7は須恵質の陶器鉢である。胴部内面にカキ目が施される。8・9は瓦質擂鉢である。

SD004・351出土土器・陶磁器（Fig.59）

10は龍泉窯系青磁碗V類である。直口縁で外面に線刻の雷文帯が施される。15世紀代までの時期である。11は白磁D類の多角杯である。15世紀代までの時期である。12は象嵌粉青沙器德利瓶の頭部である。

15世紀代までの時期である。13・14は瓦質足鍋の口縁部と脚部である。15～17・19は土師皿であるが、19は灯明皿として使用されている。18は円盤状の瓦質製品である。

これらは今回報告する中世後期の土器・陶磁器群の中で古く、15世紀後半と考えられる一群である。

SD005出土土器・陶磁器 (Fig.59)

20は龍泉窯系青磁碗V類の高台部付近である。21は土師皿である。22は土師質火鉢の口縁部である。23は瓦質耳鍋の口縁部である。24は土師質鍋の口縁部である。

SD006出土土器・陶磁器 (Fig.59)

25・26は土師皿である。27・28は瓦質鍋の口縁部で、27は足鍋であろう。29・30は土師質鍋である。

SD008出土土器・陶磁器 (Fig.60)

1・2は瓦質足鍋である。3は瓦質釜の把手付近である。4は土師皿または杯である。

SD341・345出土土器・陶磁器 (Fig.60)

5は土師質鉢の口縁部である。6は土師皿である。

SD356出土土器・陶磁器 (Fig.60)

7は漳州窯系青花磁碗で、内外面に界線が施される。8は玉縁口縁の陶器擂鉢である。

SD013（035・036・037）出土土器・陶磁器 (Fig.60・61)

SD013は本調査地点で最も多くの遺物が出土した遺構である。9は天目茶碗の高台部である。10は龍泉窯青磁碗V類の口縁部（直口縁）で、外面に線刻の細蓮弁文が施される。11・16は龍泉窯系青磁碗V類の高台部である。12・13は近世に下る青磁と染付けであり、混入遺物とみられる。14は玉縁口縁の白磁碗IV類であり、中世前半のものであるが、混入遺物とみられる。15は白磁杯である。白磁皿E類と共伴する型式である。17は白磁の高台部付近で、皿E2類であろう。18は朝鮮象嵌青磁の東口口縁小鉢であり、15世紀代までの時期である。19は李朝雜釉陶器杯の口縁部である。20は備前焼擂鉢の胴部である。21～23は瓦質足鍋である。21は全形の分かる個体で、胴部外面は下半部に粗い格子目タタキをナデ消さずに残し、内面は横方向の粗いハケメ調整である。24は土師質足鍋である。29は瓦質擂鉢で、全形の分かる個体である。30は土師質耳鍋で、全形の分かる個体である。腰に稜があり、底部はおそらく丸底に近いであろう。31・32は土師質擂鉢である。33～38は土師皿である。38は内面にロクロ目を明瞭に残している。

SD014出土土器・陶磁器 (Fig.60)

25・27は近世以降の国産青磁である。26は龍泉窯系青磁碗V類の口縁部（直口縁）で、外面に線刻の細蓮弁文が施される。28は龍泉窯系青磁碗V類の高台部であるが、粗製で内外面に目跡が残っている。

SD503出土土器・陶磁器 (Fig.62)

1は景德鎮窯系青花磁皿の口縁部である。C群IV類であろう。2は龍泉窯系青磁皿で口縁部が稜花である。V類碗と共に伴するものであろう。3は李朝雜釉陶器碗の口縁部である。

SD504出土土器・陶磁器 (Fig.62)

4は白磁碗の口縁部である。5は白磁皿E2類の端反りの口縁部である。6は李朝雜釉陶器の杯である。7は白磁杯で口縁部が輪花である。白磁皿E類と共に伴する型式であろう。8は土師皿の底部である。9は土師質擂鉢の口縁部である。10は瓦質擂鉢の底部付近である。

SD505出土土器・陶磁器 (Fig.62)

11は景德鎮窯系青花磁である。胴部外面に牡丹唐草文が施される。C群V類であろう。12は白磁皿E2類で、端反りの口縁部である。13は天目茶碗の高台部である。14は白磁杯の高台部である。15～17は土師皿である。

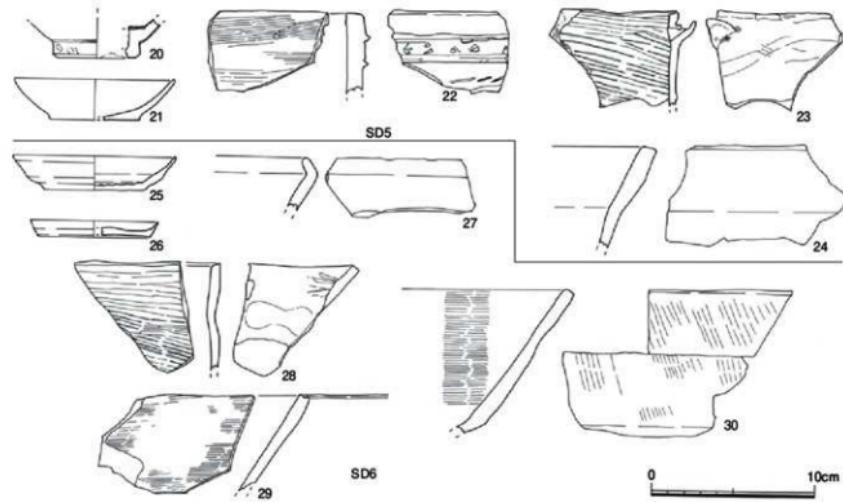
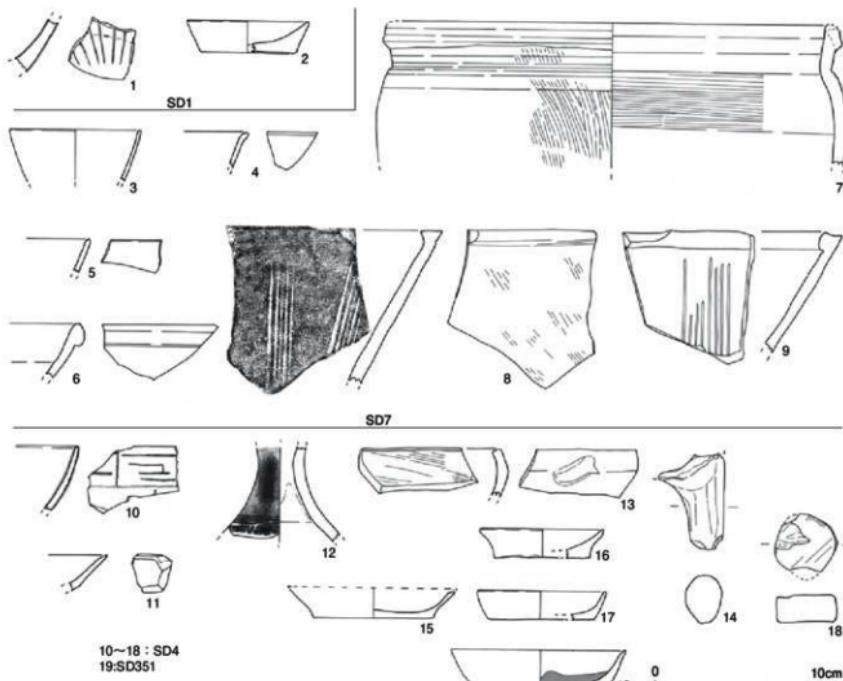


Fig.59 区画溝出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)

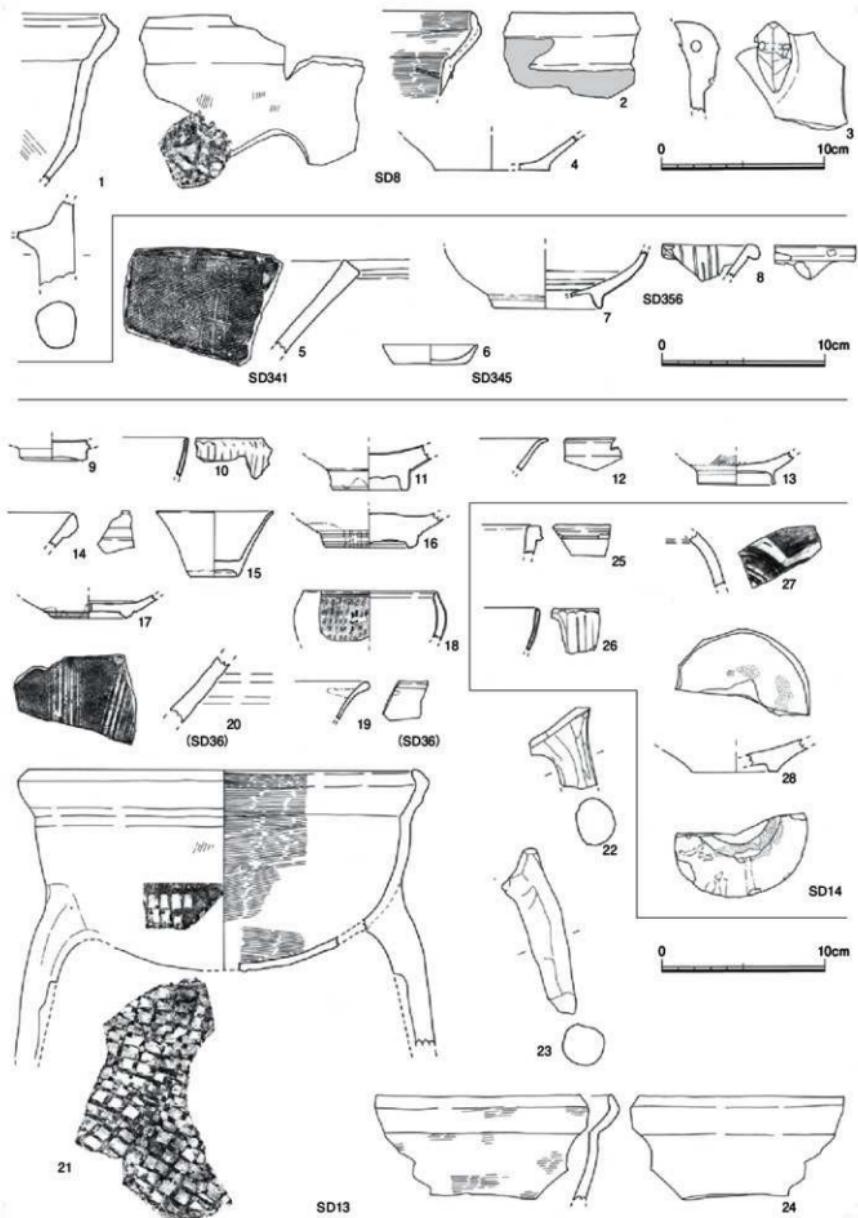


Fig.60 区画溝出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3)

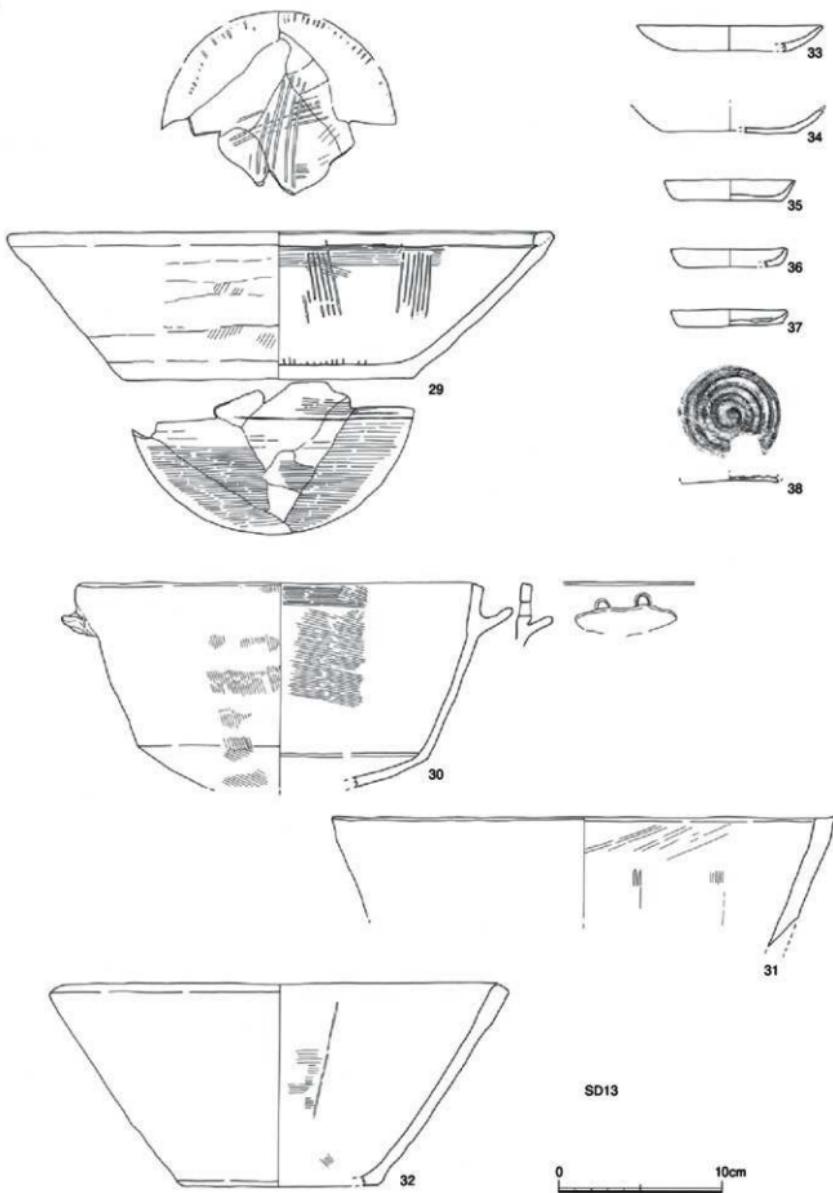


Fig.61 区画溝出土土器・陶磁器実測図3 (1/3)

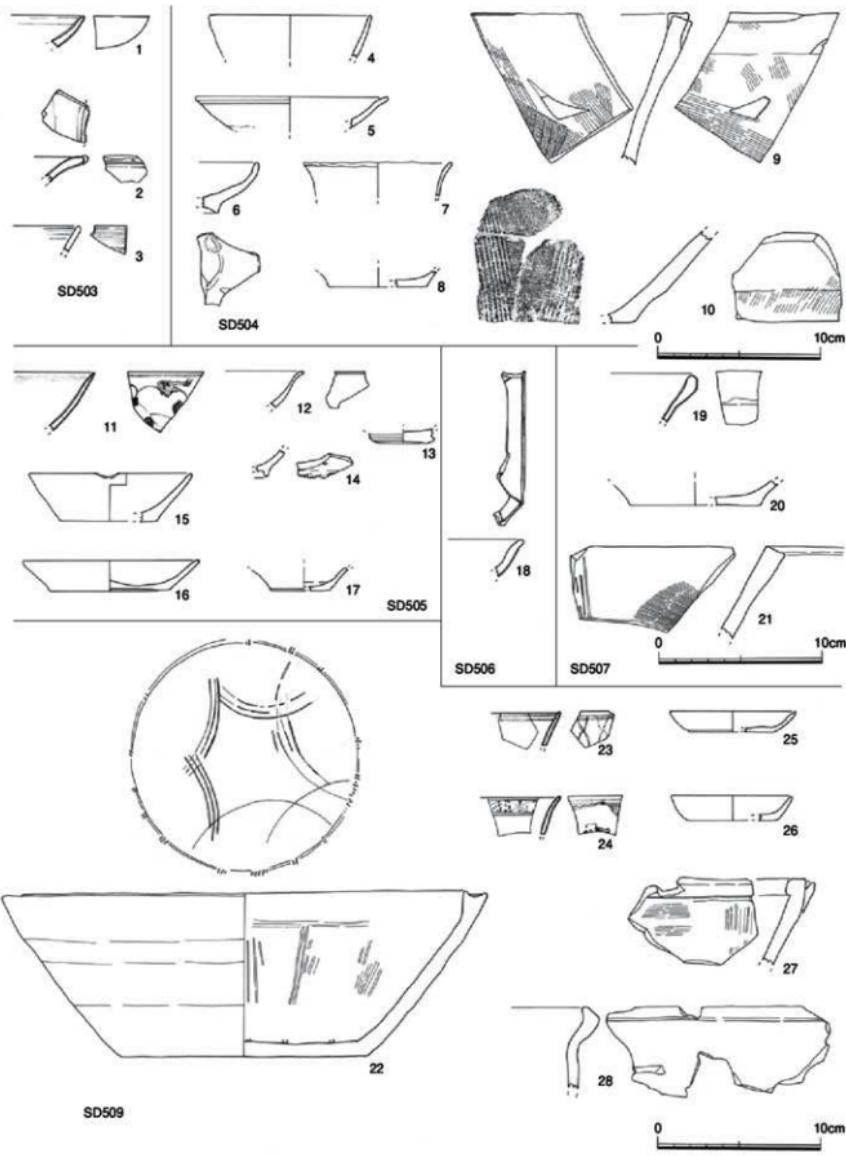


Fig.62 区画溝出土土器・陶磁器実測図 4 (1/3)

SD506出土土器・陶磁器 (Fig.62)

18は華南彩陶皿とみられる口縁部破片である。濃緑色の釉で、口縁部は稜花風の多角形（六角形～八角形か）である。16世紀後半以降に下るかもしれない。

SD507出土土器・陶磁器 (Fig.62)

19は玉縁口縁の白磁碗IV類で、中世前半のものであるが、混入遺物であろう。20は土師皿の底部である。21は土師質擂鉢の口縁部である。

SD509出土土器・陶磁器 (Fig.62)

22は土師質擂鉢で全形の分かる資料である。底部磨り面の溝は連弧をなしている。23と24は近世に下る肥前染付け碗であるが、混入遺物である。25・26は土師皿である。27は瓦質擂鉢の口縁部である。28は土師質鍋の口縁部である。

据立柱建物出土の土器・陶磁器

SB1出土土器・陶磁器 (Fig.63)

1は427出土の土師質鍋の底部付近である。

SB2出土土器・陶磁器 (Fig.63)

2は422出土の土師質擂鉢底部付近である。

SB3出土土器・陶磁器 (Fig.63)

3は454出土の土師質鍋の口縁部である。4は474出土の土師皿の底部である。

SB4出土土器・陶磁器 (Fig.63)

5は471出土の白磁皿の高台部である。E1類かE2類である。6は87出土の土師皿である。7は338出土の瓦質鍋の口縁である。

SB6出土土器・陶磁器 (Fig.63)

8は58出土の漳州窯系青花磁碗であり、16世紀後半のものである。見込みに草花文を施す。9は358出土の白磁碗の高台部付近である。中世前半のものであるが、混入遺物であろう。10～12・19～24は93出土である。10・11は龍泉窯系青磁碗V類で同一個体である。直口縁で外面に線刻の細蓮弁文が施される。12は口縁部が端反りの白磁皿E2類である。19～23は土師皿である。24は瓦質足鍋の足である。13は50出土の土師皿である。14は54出土の土師皿である。15・16は57出土の土師皿である。17はSB6に切られる110出土の李朝稚軸陶器碗の口縁部である。18はSB6を切る115出土の土師皿である。

SB8出土土器・陶磁器 (Fig.63)

25は205出土の龍泉窯系青磁碗V類の高台部である。

SB9出土土器・陶磁器 (Fig.63)

26は235出土の白磁皿E2類で、端反りの口縁である。29は230と235から出土した白磁碗の口縁部である。27は230出土、28は246出土、30は233出土の土師皿である。

SB10出土土器・陶磁器 (Fig.63)

34は123出土の景德鎮窯系青花磁碗のC群V類である。外面に牡丹唐草文が施される。35は96・105周辺から出土した土師皿で灯明皿として使用されている。

SB11出土土器・陶磁器 (Fig.63)

31～33は257出土である。31は白磁皿E2類で端反りの口縁部である。32は景德鎮窯系青花磁の蓮子碗である。胴部外面と見込みを丸や三葉状の文様で充填している。碗C群III類である。33は景德鎮窯系青花磁碗の口縁部である。口縁部がやや直線的に開くが、文様が32に類似するものであり、碗C群III類であろう。

SB12出土土器・陶磁器 (Fig.63)

36は260出土、37は278出土の李朝雜釉陶器碗口縁部である。38は160出土の、39は234出土の、40は234出土の土師皿である。

SB13出土土器・陶磁器 (Fig.63)

42は276・278出土の土師皿である。43はSB13と重複する256出土の土師皿である。44は180出土の瓦質鍋口縁部である。45は161出土の土師質鍋口縁部である。

SB15出土土器・陶磁器 (Fig.63)

41は544出土の土師皿である。

SA4出土土器・陶磁器 (Fig.63)

46は426出土の土師皿底部である。

柱穴出土の土器・陶磁器

区画A～D出土土器・陶磁器 (Fig.64)

1は387出土の景德鎮窯系青花磁碗の口縁部である。C群Ⅲ類であろう。2は392出土の白磁碗の口縁部である。3は371出土の土師皿である。4は436出土の土師皿底部である。5は371出土の土師質鍋の口縁部である。6は383出土の瓦質擂鉢の口縁部である。7は364出土の瓦質足鍋の身部である。8は321出土の龍泉窯系青磁碗I類の高台部である。中世前半のものであるが、混入遺物であろう。9は321出土の李朝雜釉陶器皿の底部である。10は335周辺出土の白磁皿E I類の口縁部である。11は354出土の李朝雜釉陶器碗の口縁部である。12は473出土の李朝雜釉陶器皿である。13は323や330周辺出土の龍泉窯系青磁碗V類である。直口縁で外面に退化の進んだ線刻の細蓮弁文が施される。14は323出土の瓦質釜の上半部である。15は326出土の土師皿底部である。

区画F～M出土土器・陶磁器 (Fig.65)

1は38出土の白磁皿E2類である。2は60出土の白磁皿の高台部である。E1類かE2類である。3は孔雀緑色を呈する翡翠釉磁器で、皿の高台部である。61出土。4は90出土の李朝雜釉陶器碗の口縁部である。5は62出土の龍泉窯系青磁碗V類の口縁部である。直口縁で外面に線刻の細蓮弁文が施される。6は62出土の白磁皿E2類の端反り口縁部である。7は95出土の漳州窯系青花磁の葵筋底皿である。底面に砂目がある。胴部外面は唐草文で、見込み部には、擬人文様化した「壽」の文字が描かれている。景德鎮窯系青花磁皿C群Ⅲ類の模倣品である。16世紀中葉以降のものか。8は82出土の刷毛目粉青沙器碗である。9は127出土の龍泉窯系青磁碗の口縁部である。10は91出土の白磁皿E2類の端反りの口縁である。11は151出土の李朝白磁皿の口縁部である。中国白磁皿E II類を模倣したものであろう。12は158出土の漳州窯系青花磁皿である。13は90出土、14は144出土、15は273出土、16は100出土、17は114周辺出土、18は240出土、19は157出土、20は251出土、21は136・138出土、22は138出土の土師皿である。23は272出土の土師質釜の把手である。24・25は138出土の土師質足鍋の口縁部と足で、同一個体である。26は267出土の土師質湯釜の胴部である。27は287出土の土師質鍋の底部である。28は592出土の白磁碗VI2類であり、見込みに櫛描文が施されている。中世前半のものであるが、混入遺物であろう。29は563出土の李朝雜釉陶器皿の口縁部である。

石組井戸SE049出土の土器・陶磁器 (Fig.66)

1は福建産白磁碗V類の高台部であるが、中世前半のものである。礫層上層からの出土であり、混入遺物とみられる。2は土師皿の底部である。3は土師質足鍋の足である。4は最下層出土の瓦質湯釜の口縁部である。5は石組内出土の瓦質湯釜の胴部である。6は最下層出土の瓦質鍋の口縁部である。7は下層出土の瓦質火鉢の胴部であり、外面にスタンプ文が施される。8は土師質鍋の口縁部である。

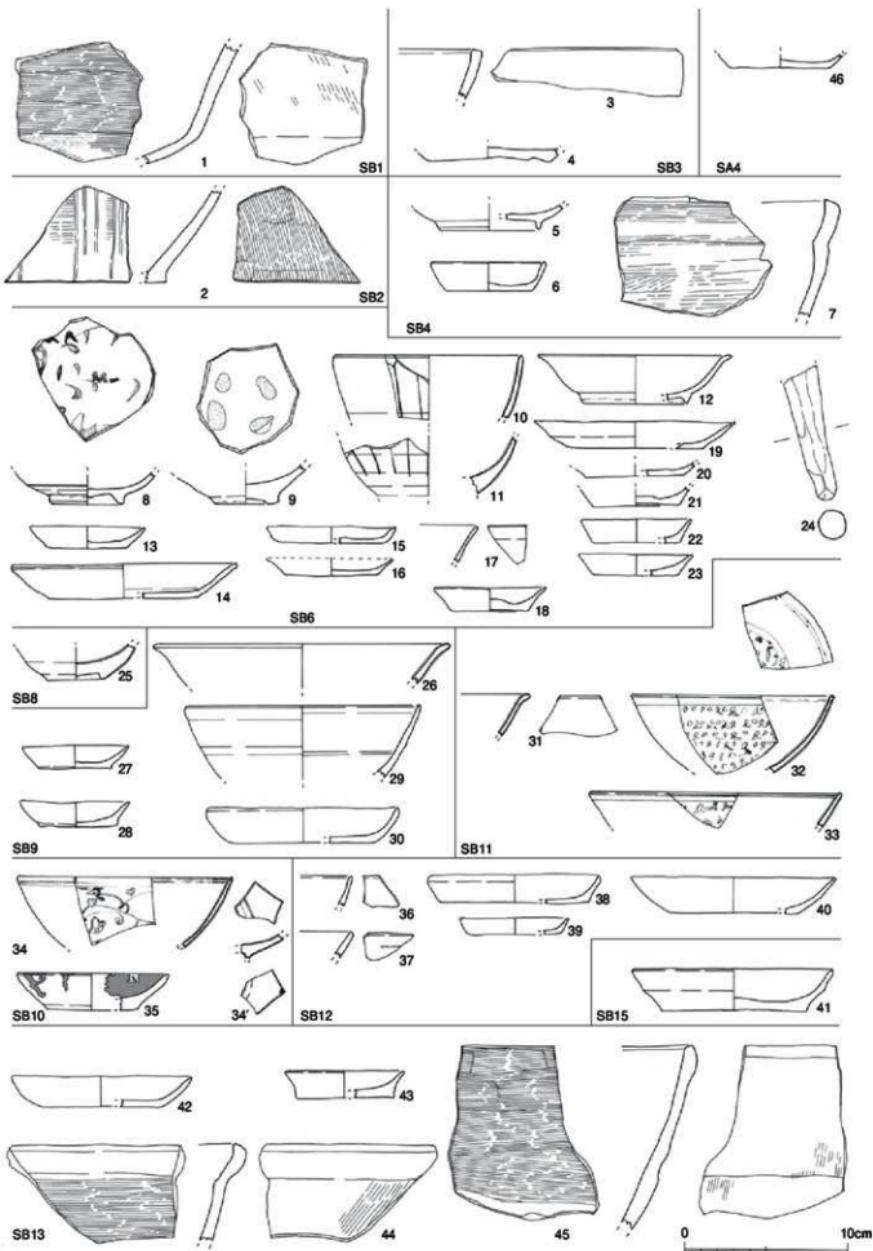


Fig.63 据立柱建物柱穴出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

土坑出土の土器・陶磁器 (Fig.67)

SK012出土の土器・陶磁器

3は中国陶器鉢の玉縁口縁である。

SK270出土の土器・陶磁器

1は土師皿である。2は土師質擂鉢である。

SK296出土の土器・陶磁器

4は土師皿である。

SK400出土の土器・陶磁器

5と6は土師皿であるが、後者は底面に板状圧痕がある。板状圧痕は古い特徴（せいぜい14世紀前半頃まで）と考えられているが、型式的には15世紀以降の皿である。

SK405出土の土器・陶磁器

7と8は土師皿である。

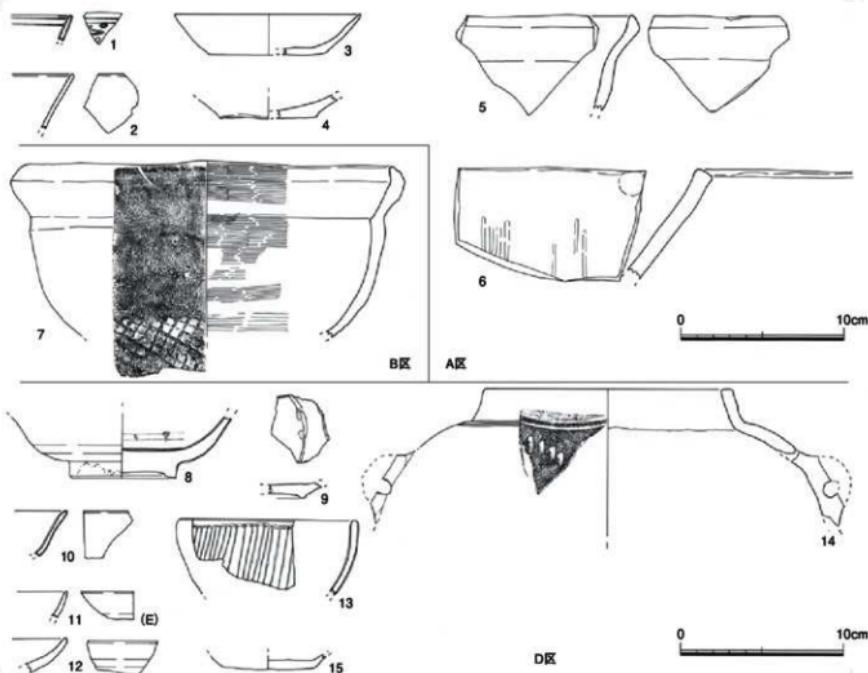
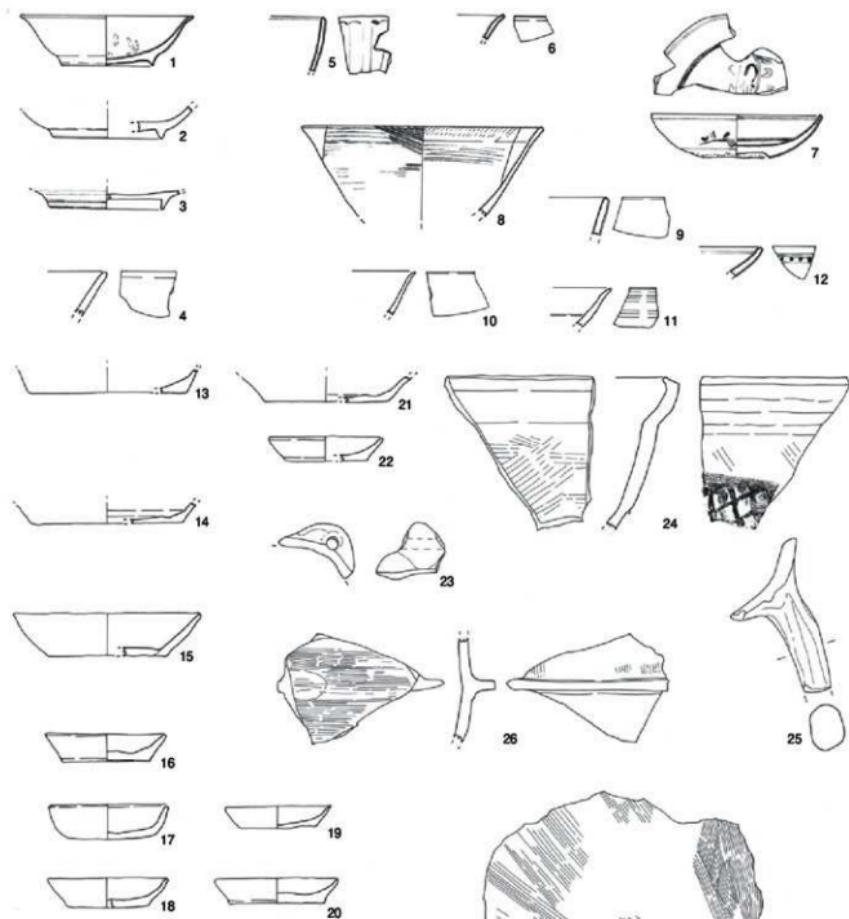
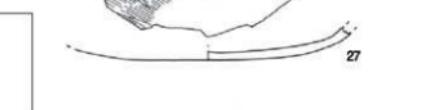
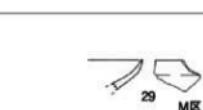


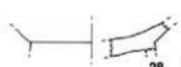
Fig.64 区画A・B・D柱穴出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



F区



K区



0 10cm

Fig.65 区画F・K・M柱穴出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

SK511出土の土器・陶磁器

13は土師皿である。

SK561出土の土器・陶磁器

9は李朝雜釉陶器碗の高台部である。見込みと疊み付けに目跡を4ヶ所ずつ残す。10は龍泉窯系青磁碗V類の高台部である。11は土師皿である。12は土師質鍋の口縁部である。

SK574出土の土器・陶磁器

14・15は土師皿である。

搅乱等出土の土器・陶磁器

16は出土遺構不明の墨書のある白磁杯である。高台内に墨書で「二」と書かれている。17はII区出土の漳州窯系青花磁皿であり、16世紀後半のものである。18は区画J南付近の近世溝から出土した龍泉窯青磁碗である。19は出土地不明の白磁皿の口縁部である。20は出土地不明の白磁碗の玉縁口縁であり、中世前半のものである。21～23は603出土である。21は龍泉窯系青磁碗であるが、端反りの口縁である。22は瓦質火鉢の口縁部である。23は土師質鉢の底部付近である。24は北端の近世溝から出土した備前陶器壺である。中世後期のものであろう。216はI区の暗渠（搅乱）から出土した土師質の内耳鍋である。25は北端の近世溝から出土した土師質の盤である。26は区画Jの南付近の近世溝から出土した瓦質の鉢である。

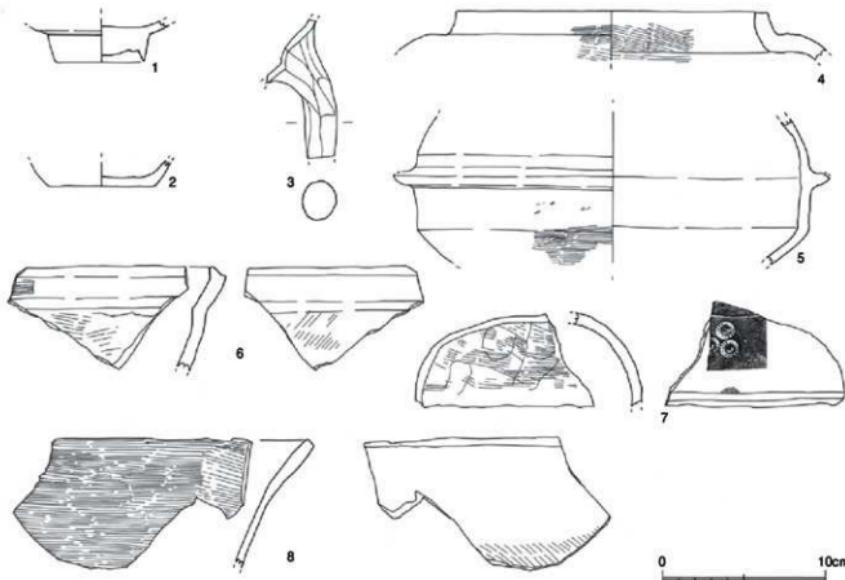


Fig.66 SE049出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

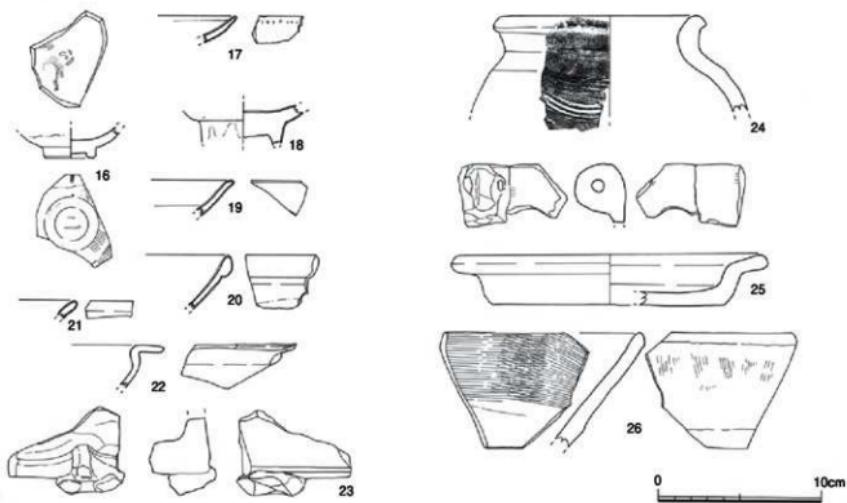
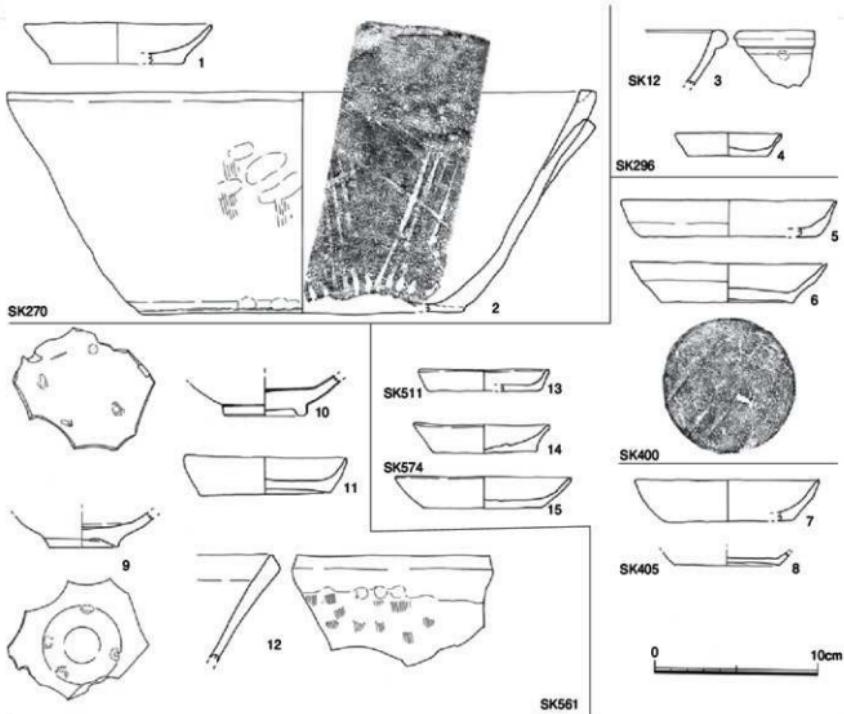


Fig.67 土坑ほか出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

古代以前の土器・陶磁器

古墳時代中期の遺構に伴う土器 (Fig.68)

今回の調査地点で遺構に伴う土器として最も古いのは古墳時代中期前半の土師器である。

SX502出土土器

1～4はSX502からまとめて出土した土器群であり、堅穴建物の床面直上から下層の土器群である可能性が高いと考えられる。1と2は中型の壺で布留式系譜のものである。いずれも器壁が厚く、口縁部の立ち上がりが急であり、布留系壺としては最も新しい型式に近い。肩部の横ハケメ調整等も丁寧な調整とはなっていない。1は口唇部がやや肥厚し、内傾面をもつタイプで、2は口唇部が単純なタイプである。3と4は小型の布留系壺で、全形が分かれる個体である。型式的な特徴は中型壺に準じるものである。5は高杯の杯部である。下位に凹線状の屈曲部を有するが丸みを帯びている。内外面はミガキ調整が施されるが、外面には一次調整のハケメが残っている。底部は粘土充填技法となっている。これらの土器群は布留系土器が主体を占めていることからも、中期前半の中でも初頭に近い時期とみることができる。重藤輝行氏の土師器編年のⅢA～ⅢB期と考えられる。

SC518出土土器

6～8はSC518から出土した土器であるが、遺構の時期を示す遺物は6と7である。6は直口口縁壺の口頭部である。7は壁際土坑のP2から出土した小型丸底壺で全形が分かれる個体である。口縁部が短めで、底部はやや平べったい。器面調整は摩滅のため不明瞭であるが、外面はナデかミガキ調整である。これらは、SX502の土器群に近い中期前半のものと考えられる。8は扁平な胴部突帯を有するもので、弥生時代終末期から古墳時代初頭の在地系壺と考えられるが、混入遺物であろう。9はベルト上層から出土した円筒埴輪の基部とみられる破片である。大塚遺跡で出土する埴輪片は後期前半の大塚古墳から流入したものが多く、本例も混入遺物と考えられる。

遺構に伴わない縄文時代と弥生時代後期前後の土器 (Fig.68)

10～18は中世以降の遺構や搅乱から出土した縄文時代～古墳時代の土器である。10は頭部に突帯を有する大型の壺で、弥生時代後期から古墳時代前期の在地系土器である。VI区北西の搅乱から出土した。11は須玖II式の系譜を引く弥生時代中期後半から後期前半の壺頭部付近の破片で、頭基部に凹面突帯、頭部に沈線に近い暗文を有する。本来は鈎先口縁の広口壺であろう。571出土である。12は弥生時代後期のく字口縁壺の口頭部である。512出土。13は阿高系縄文土器の深鉢底部である。胎土に滑石を多く含み、色調は赤褐色を呈する。526出土。14は古墳時代前期以降の壺底部で、尖り気味の丸底を呈する。355出土。15～18は弥生時代後期前後の高杯脚部である。15はSD005出土、16はSD013出土、17は303出土、18はSK270出土である。19,20は弥生時代後期の器台筒部付近である。VI区南の近世溝から出土している。

埴輪 (Fig.69)

本調査地点周辺からは埴輪が出土するが、近在する大塚古墳（古墳時代後期前半の首長墳）から流入したものである可能性が高い。大塚古墳は未報告であるが、出土した埴輪や土器の主要なものについて、小嶋篤氏の整理報告がある（福岡市報告書第1111集）。

1は朝顔形埴輪の肩部付近の破片である。色調は淡橙色を呈する。VI区南の近世溝出土。2も朝顔形であるが、1より一回り大きい。色調は淡褐色を呈する。SD507の北側より出土。3は円筒埴輪の基底部である。直径36cmを測る。色調は赤褐色を呈する。SD013などから出土している。4は胎土や器壁の厚みから埴輪とみられるもので、形象埴輪の可能性がある個体である。人物または動物の手足の接合部付近と思われるが、明確ではない。傾きなど正確ではないが、生きている面をA面として図示しておく。

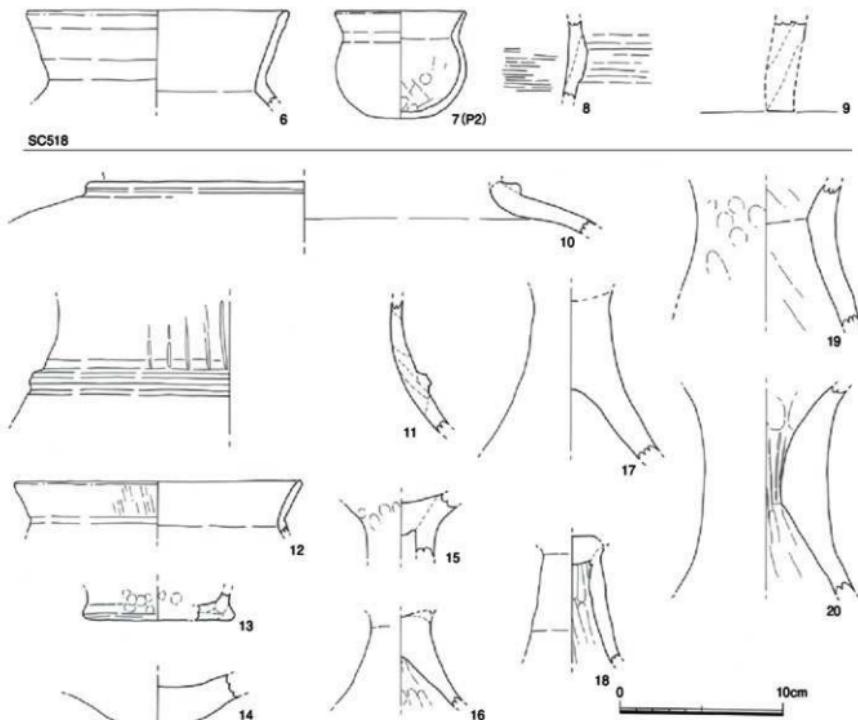
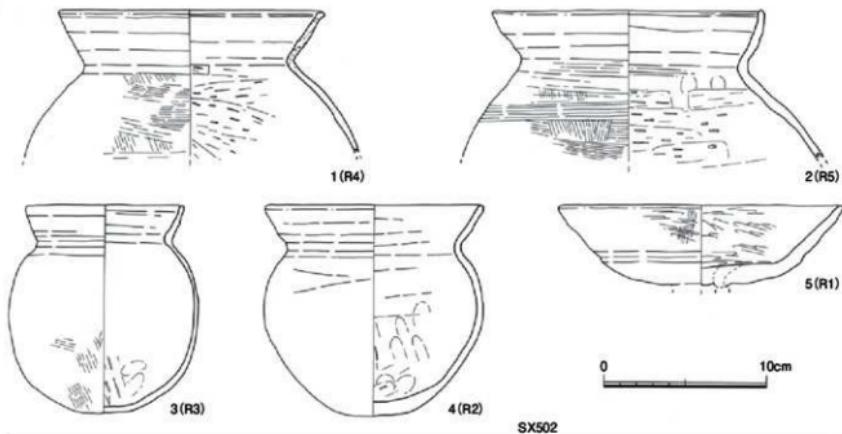


Fig.68 出土弥生土器・古墳時代土器実測図 (1/3)

古墳時代から古代の須恵器 (Fig.70)

いずれも中世の遺構などから出土したものであり、須恵器の時期の遺構に伴うものではない。

1は杯身で、口径12.8cmを測る。7世紀初頭前後のものである。SD013からの出土。

2は有蓋高杯の身下部の小片である。387出土。内面には赤色顔料が付着している。外面の回転ケズリ調整は返し部の直下まで及んでおり、形態的特徴などからも、古墳時代後期前半 (MT15) を前後する時期、大塚古墳の段階のものである可能性は高い。周辺には古墳以外に古墳時代後期前半の遺構や土器がほとんどみられないことと本例が赤色顔料付着の特殊なものであることから、大塚古墳から流入した土器である可能性は高い。大塚古墳からは多量の埴輪が出土しているが、古墳時代後期の土器はほとんど出土しておらず、稀少なものと考えられる。

3は返しを有する蓋の小片で、口径は16cm前後であろう。220出土。7世紀前半である。

4は椀の高台部付近である。SD505出土。8世紀前半のものである。

2は大塚古墳に由来する須恵器である可能性が高いが、その他の7～8世紀の資料は帰属が明瞭ではない。周辺では当該期の製鉄関連遺構がみられるので、焼土坑等の時期と関連するものであるかもしれない。

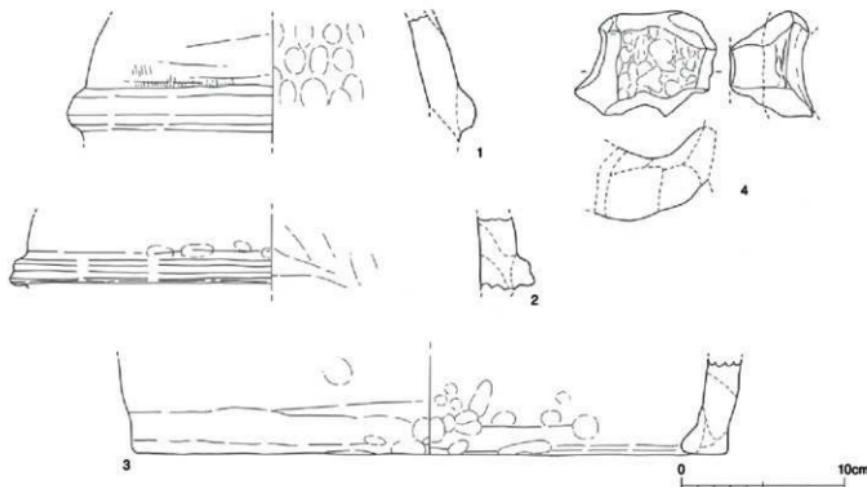


Fig.69 出土埴輪実測図 (1/3)

平安時代の土器・陶磁器 (Fig.71)

木棺墓のSM510から当該期の越州窯青磁碗や土師器碗が出土したほか、中世の遺構に混じって猿投窯産とみられる灰釉陶器が出土している。

SM510出土土器・陶磁器

出土状況については遺構説明の通りである。1は越州窯青磁碗の略完成品である。高さ6.4cm口径16.8cm、高台径7.2cmを測る。器表面は風化が著しく、脆くなっている。釉は淡黄褐色を呈しており、胎土は灰色で、長石の微粒を含む。直口縁、輪状高台で、見込みには目跡が残る。

2は土師器の碗で略完成品である。こちらも器表面の風化が進んでおり、脆くなっている。高さ4.6cm、口径12.3cm、底径6.7cmを測る。ユビオサエの痕跡が明瞭で、底部押し出し技法により、器形の丸みを出している。

これらの土器、陶磁器は10世紀後半のものと考えられる。

近い時期の資料として3の灰釉陶器がある。中世後期の遺構、598出土である。灰釉陶器の杯で、口径11cmを測る。猿投窯産の可能性が高く、10世紀代のものと考えられる。SM510以外にも当該期の埋葬施設が存在した可能性も考えられよう。

瓦 (Fig.72)

本調査地点からの瓦の出土は少ない。中世末の建物は掘立柱建物が主体であることからも、大塚遺跡では瓦葺建物が基本的に存在しなかったと考えられる。

1は丸瓦片である。表面は焼されている。603出土。中世末～近世のものとみられる。2は平瓦である。SK012出土。表面は焼されている。中世末から近世のものとみられる。3も平瓦片である。603出土。4は凹面に内型の布目痕跡、外面に斜格子文タタキ目がみられる平瓦で、古代後期から中世前期のものである。中世末のSD005から出土しており、混入遺物と考えられる。

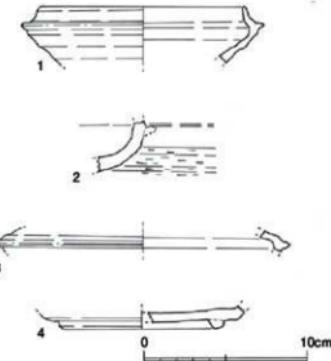
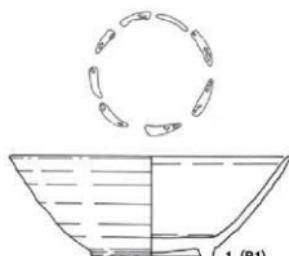


Fig.70 出土須恵器実測図 (1/3)



SM510

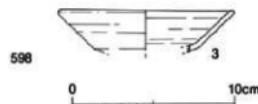


Fig.71 平安時代の土器・陶磁器 (1/3)

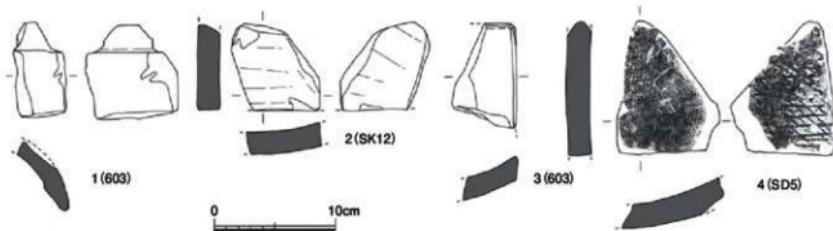


Fig.72 出土瓦実測図 (1/4)

②木製品 (Fig.73)

SE049出土木製品

石組み井戸の下層から木製品が出土している。1は小刀の鞘である。針葉樹の一本から外形を作ったものを2枚に分割し、内面の刀が収まる部分を削り貫いている。それらを黒漆で覆って2枚合わせとしているが、把縁付近には糸を巻いて緊迫した痕跡がある。外法は長さ13cm以上、幅2.5cm、厚み1cmで、内法、すなわち収まる刀子の幅は1.6cmである。3は直径16.5cmの円盤形製品で針葉樹とみられる。片面の一部が楕円形に炭化しており、蓋として使用されたものであろう。2も同様の製品と考えられる。4～7は幅5cm前後、厚み8mm前後の短冊状の木製品である。いずれも短軸方向に弧を描いている。木材は広葉樹である。最下層からの出土。紐の緊迫痕跡があるもの（4～6、実測図上部の横線）や側面から打ち込まれた釘穴を有するもの（7）などがある。これらの材は幅と厚みが不足しているように思われるが、互いに組み合わされて井戸桶または、集水槽として使用されたものかもしれない。

掘立柱建物柱材

Ⅲ区（区画F）のSB6等の掘立柱建物は柱穴が深く、湧水によって、柱材が遺存していたものがある。その中から054の底面付近で出土した柱材を図示する。最大幅約20cm、厚み約9cmの針葉樹（スギ）板材である。長さ約30cmの遺存である。柱の根元側は腐食により、凹凸が著しい。上位は尖り気味であるが、柱をこの部位で斜めに切断したためであろう。

③金属製品、ガラス製品 (Fig.74・75)

Fig.74-1は銅錢である。径2.6cm、2.58gを測る。実測図の9時の方向の文字はX線写真から「寶」であるが、他の文字が判読不能のため、錢種は不明である。中世末の010 (SB8) 出土である。2は青銅製の鞘口金具である。長さ4.1cm高さ0.8cmを測る。出土遺構のSD500は近世の溝であるため、本例もその時期のものかもしれない。3は火縄銃の弾丸とみられる鉛玉である。ほぼ球形で、直径1.0cm、重さ4.01

gを測る。表面の凹凸は風化によるものとみられ、使用痕跡はあまり顕著でない。出土遺構の009は中世末のSD008を切る小ピットである。4はガラス小玉である。青緑色のカリガラスとみられる。直径4mm、厚み2mmを測る。出土遺構は中世末のSD504であるが、古墳時代頃のものである可能性がある。

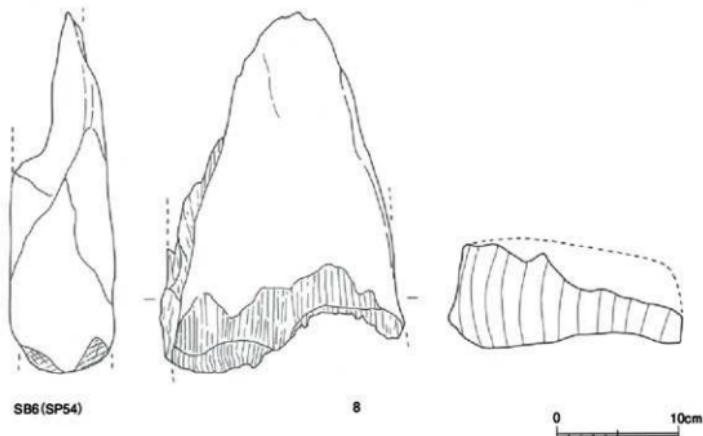
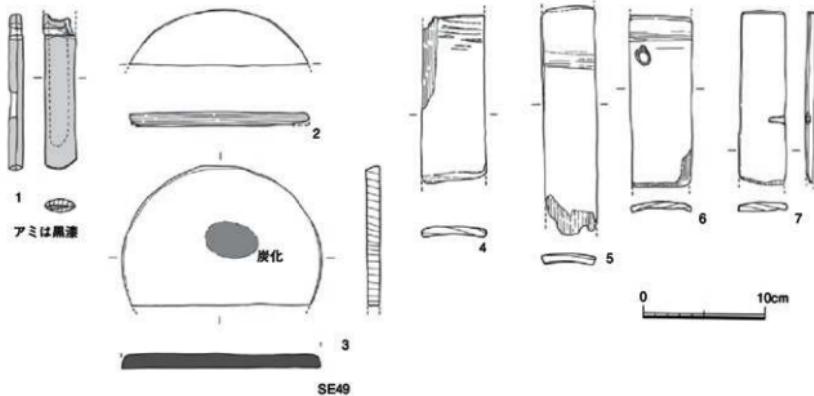


Fig.73 出土木製品・柱実測図 (1/4)

Fig.75は出土鉄製品である。1は鉄製の鎌である。長さ13.5cm以上、幅3.5cm、厚み0.7cmを測る。鎌の本体以外にも、把の木質、鉄製の目釘、青銅製の留め金具なども遺存している。中世末のSD013出土である。2は棒状の鉄製品であるが、根元から折れしており、先端も欠いている。馬鍔の刃部の一部とみられる。長さ16.3cm以上、幅約2cmである。先端付近は厚み7mmで、刃部を欠損している。根元近くは断面が台形となっており、厚みは1.4cm前後を測る。中世末のSD013出土である。3は雁又鎌で、X線写真によると、中央にハート形の透かし穴がある。長さ6.6cm以上、厚み0.5cmを測る。中世とみられる374からの出土である。4は釘である。長さ7.7cm以上、幅0.6～1.5cm、厚み0.9cmを測る。中世末のSD503からの出土である。

5・6は平安時代（10世紀後半）の木棺墓SM510から出土した鉄製工具で、同一個体とみられる。ヤリガンナかへラ状の工具とみられるが、先端を欠いていることもあり、判断が難しい。中央のふくらみはX線写真でも生き死にの判断に迷うが、錯と考えておきたい。把の木質が遺存している。長さ19cm以上（推定30cm）、幅1.0～1.7cm、厚み0.25～0.7cmである。中央付近の断面は方形で、両先端は扁平である。基部側（6：F2）は鍛造で合わせた箇所で剥離している。

④石器・石製品・土製品 (Fig.76～79)

Fig.76-1は滑石製の石鍋である。口径19.2cmを測る。耳は方形突起状となっているが、成形が粗雑である。中世末のSD013出土。2は凝灰岩の下臼である。熱を受けている。磨面径16.3cm、受け部径29.4cm、底部径22.8cmを測る。中世末の450(SB1)出土。3も同じく下臼である。磨面径は17.8cmを測る。中世末の471出土。

Fig.79-1は滑石製の横型石錐である。片側の先端を欠くが、紐溝は中央長軸方向と両小口付近にあつたものとみられる。長さ4.7cm以上、径1.7cm、重さ11.2gを測る。中世末の093(SB6)出土であるが、より古い時代の遺構である可能性もある。2は棒状の用途不明滑石製品で、頭部に穿孔がある。加工はこの頭部周辺のみである。孔の上部には縦ざれとみられる溝があり、組孔と考えられる。長さ7.7cm以上、重さ46.9gを測る。中世末の095出土。3は基部と刃部を欠く今山玄武岩製の磨製石斧である。基部側がすぼまっており、縄文時代のものであるかもしれない。表面は後世の剥離が多い。長さ9.6cm以上、長径5.2cm、重さ292.4gを測る。VI区南の近世溝出土である。4も遺存の悪い今山石斧である。長径6.8cmを測る。時期不明の435出土。5は風化花崗岩製の持ち砥石である。長さ6.4cm、幅2.5cm、厚み2.2～

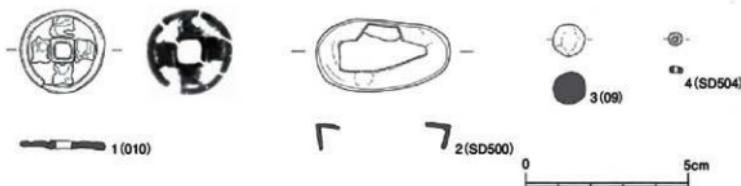


Fig.74 出土青銅製品・鉛製品・ガラス製品実測図 (2/3)

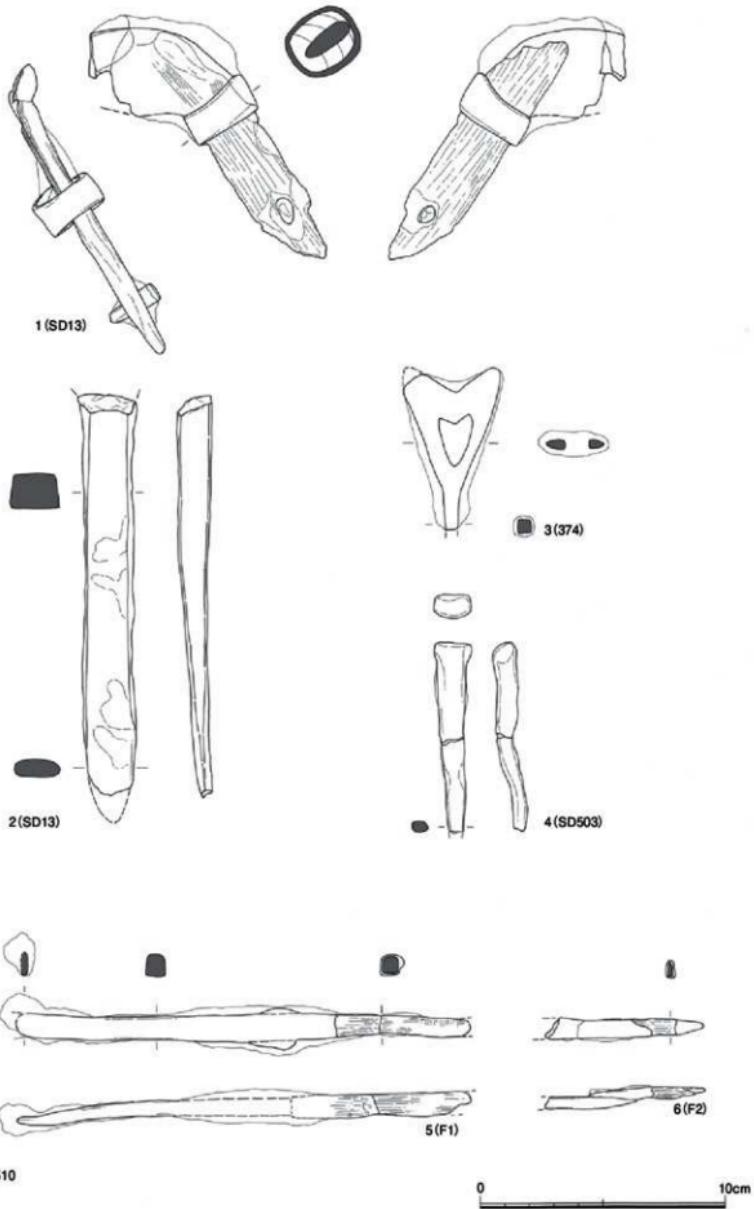


Fig.75 出土鉄製品実測図 (1/2)

2.9cmを測る。中世末のSD013出土。6は灰層岩または粘板岩製の持ち砥石である。長さ11.8cm、幅5.5cm、厚み1.2cmを測る。側面の四周には擦り切りや折り取りの加工痕があり、板状の素材から方形に切り出すように成形・加工されたものである。時期不明の366出土。7は砂岩製の砥石である。半分欠損しているとみられるが、長さ10.2cm以上、幅5.9cm、重さ497.1g以上を測り、置き砥石と考えられる。中世末の279出土。

Fig.77は黒曜石製の石器である。1・2は旧石器であり、大塚遺跡では稀な発見となる。石材は1が牟田産、2・3が腰岳産である。1は基部を欠損した三棱尖頭器である。長さ3.8cm以上、幅2.05cm、厚み1.6cmである。ガジリによる欠損が多い。SD505出土。2は基部を欠損した台形様石器である。長さ1.7cm以上、幅1.5cmを測る。SD505出土。3は縄文時代後晩期のスクレーパーである。長さ2.2cm、幅1.1cm、厚み0.4cmを測る。右側面が刃部、左側面は背つぶしがなされている。VI区北の近世溝出土。

Fig.78は土錘である。1・2は中ふくらみのエンタシス形、3は管状である。1は長さ5.2cm、最大径2.0cm、重さ16.9gを測る。VI区北の近世溝出土。2は長さ4.5cm、最大径1.4cm、重さ7.2gを測る。中世末のSD004出土。3は長さ3.8cm以上、直径1.2cm、重さ5.05g以上を測る。中世末の096(SB10)出土。

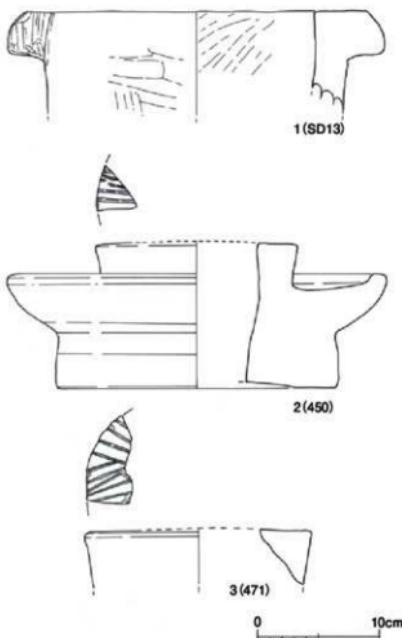


Fig.76 出土石錘・石臼実測図 (1/4)

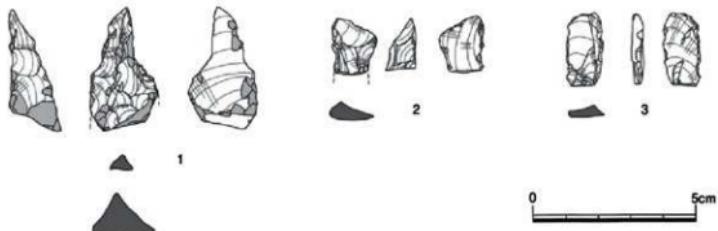


Fig.77 出土黒曜石石器実測図 (2/3)

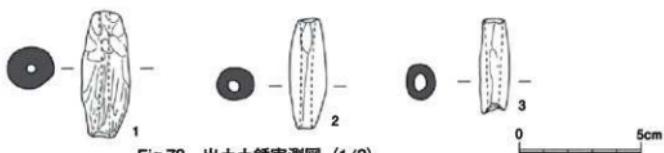


Fig.78 出土土錘実測図 (1/2)

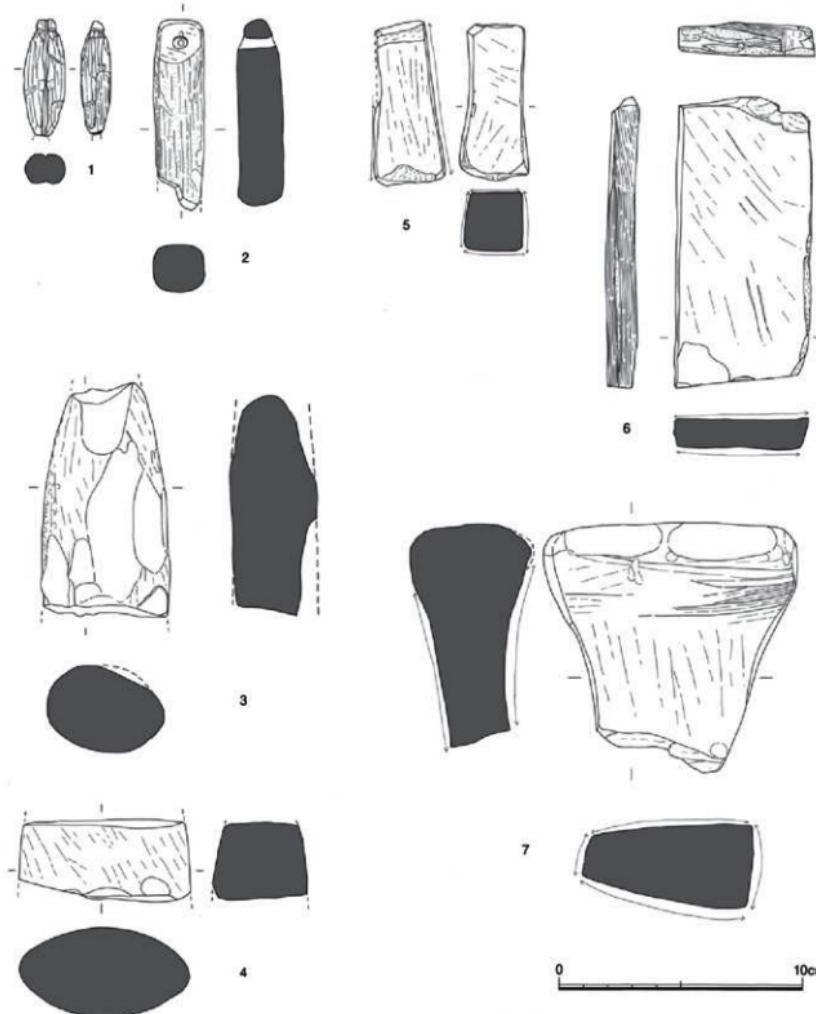


Fig.79 出土石製品実測図 (1/3)

3. 小結

今回の調査では古墳時代中期～中世末の遺構・遺物のほか、少量ながらも旧石器や縄文土器、弥生土器なども出土している。

中世前半以前の遺構・遺物は本調査地点において、極端に少なく、中世末の開発による削平が大きかつたものと考えられる。南側隣地の第16次調査で検出されているような弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構は、一段標高が低くなる本調査地点では全くみつかっていない。

本調査地点で最も古い遺構は古墳時代中期前半の堅穴建物である。その可能性のある遺構も含めると、3棟以上の建物の存在を推定することができる。

古墳時代後期前半の大塚古墳から流れてきたと考えられる埴輪や須恵器が出土しているが、当該期の関連遺構は周辺でみつかっていない。

古代では、奈良時代前後の炭窯と考えられる焼土坑を6基検出した。糸島や早良平野では調査事例が多く、古代の製鉄に関連する遺構と考えられる。

平安時代（10世紀後半）の木棺墓は、近年、官衙関連遺跡や瓦窯など重要な調査成果が相次いでいる今宿平野の古代後半期を考えるうえで注目すべき調査成果となった。越州窯青磁碗や鉄製工具を有し、今山を意識した墓壇配置と考えられるものであり、被葬者の階層や性格の解明が今後の課題である。

本調査地点における遺構・遺物の9割以上を占めるのは中世末である。当該期は溝による長方形区画が屋敷や屋敷配置の基本構造となっており、そのような区画群が10群前後みつかっている。区画の規模は長軸長15～25m前後である。その区画の内外から、掘立柱建物20棟以上、柵列10条以上、石組井戸1基、土坑19基（うち水溜状遺構が3基、地下式貯蔵施設が1基）である。地点によって、建物などの遺構の遺存状況がまちまちであり、遺構密度の薄い箇所は後世の削平によるところが大きい。土坑は様々な機能を考えられるが、区画内外の縁辺部に配置される点は共通している。

このような屋敷地、区画の中で中心的なのが、SD013等で囲まれた区画Fであり、遺構の遺存状況も良好である。本調査地点で唯一、石組井戸を有する地点であり、大型建物も存在する。当該期の掘立柱建物はいずれも側柱建物で、2×3間が多く、棟持柱を消失しているものが少なくない。梁行約400cm、桁行600cmが平均的な建物規模であるが、2×2間のやや小規模な建物や、1×1間で区画Fの門状遺構とみられるSB14なども存在する。区画Fの大型建物（SB6）は梁行約530cm、桁行810cmを測り、棟持柱列をもつ構造である。また、建て替えも行われており、16世紀後半段階まで長期間存続する建物である。

石組井戸（SE049）は、遺構の崩落によって、改修が行われているが、井戸から水溜状遺構に、その性格が変化したものと考えられる。大塚遺跡において、井戸（全て石組）が稀少であることからも、その性格を考える上で、注目したい構造変化である。

また、このような区画の中には、区画Mのように、本来的に遺構密度が薄く、広場のような性格が想定できるものもある。区画Mの南側は、16次調査でみつかっているスロープ状遺構（丘陵上の集落と西の河道を結ぶ通路とみられる）に面しており、集落の入り口近くに設けられた、共有広場のようなものであったかもしれない。

当該期の遺物は中国・朝鮮半島産の陶磁器と国産の瓦質・土師質土器を中心に出土しているが、完形品の出土はほとんどない。土器・陶磁器以外では、刀装具（青銅製、木製）、鎌や馬鍬、鐵、釘などの鉄製品、銅鏡（銭種不明）、石鍋、石臼、砥石などがあり、火绳銃の弾丸とみられる鉛玉も出土している。

大塚遺跡全体における中世末の屋敷群の様相については、第VII章で改めて整理してみたい。



1. SD001・005・006周辺（上が北）



2. SD013周辺（上が北）



1. SD505周辺 (上が北)



2. SD509周辺 (上が北)



1. SD503・504・524周辺（上が北）



2. SD503・504（東から）



1. SD001 (南から)



2. SD001AA' ライン (西から)



3. SD005 (東から)



4. SD005JJ' ライン (南から)



5. SD006 (南から)



6. SD006JJ' ライン (北から)



7. SD007FF' ライン (西から)



8. SD4-351 (南から)



1. SD356付近（南から）



2. SD008AA' ライン（東から）



3. SB14とSD013南西隅付近（西から）



4. SD013AA' ライン（東から）



5. SD013PP' ライン（東から）



6. SD505北西隅（西から）



7. SD505FF' ライン（西から）



8. SD507周辺（西から）



1. SD503EE' ライン (西から)



2. SD504 (東から)



3. SD504CC' ライン (西から)



4. SD524 (西から)



5. SD508周辺 (西から)



6. SD509北西隅周辺 (西から)



7. SD508AA' ライン (東から)



8. SD509DD' ライン (西から)



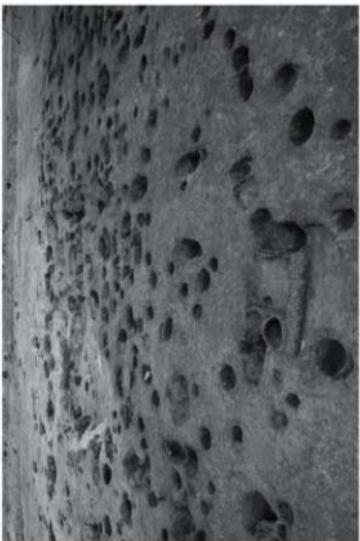
1. SB1・2付近 (南から)



2. SB3 (北から)



3. SB4・5付近 (北から)



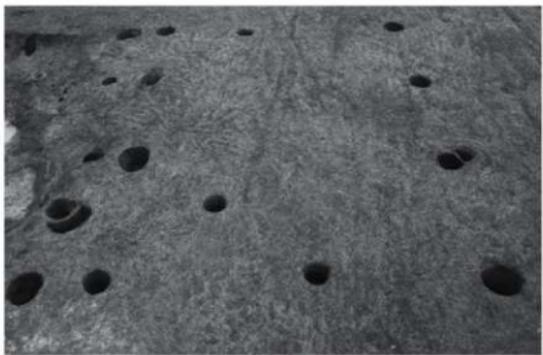
4. SB9・10付近 (西から)



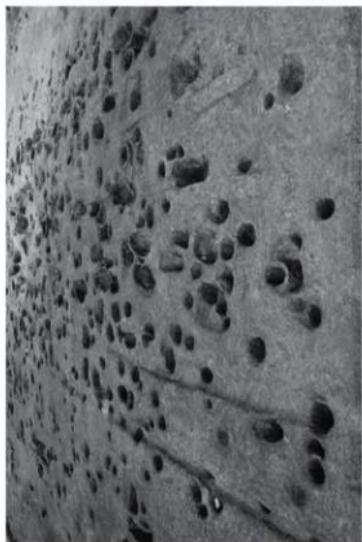
1. SB6 (南から)



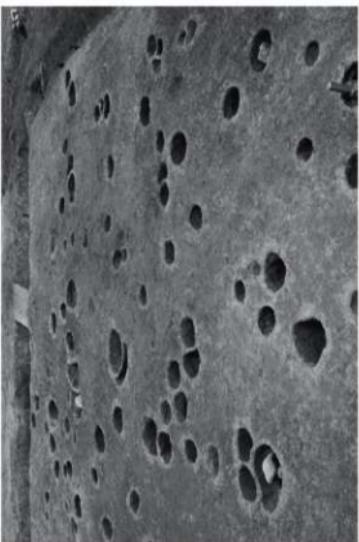
2. SB7 (南から)



3. SB19 (北から)



1. SB11 ~ 13付近 (南から)



2. SB15・16 (南から)



3. SB17 (西から)



4. SB18・19 (南から)



1. SE49 (北から)



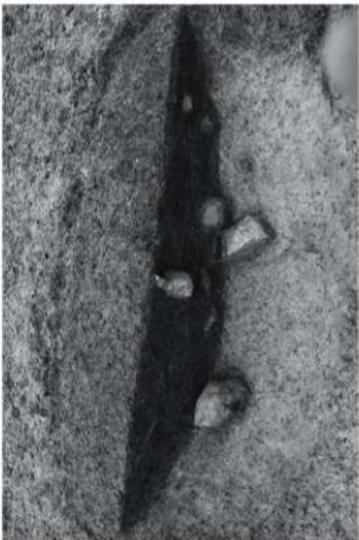
2. SE49下部 (西から)



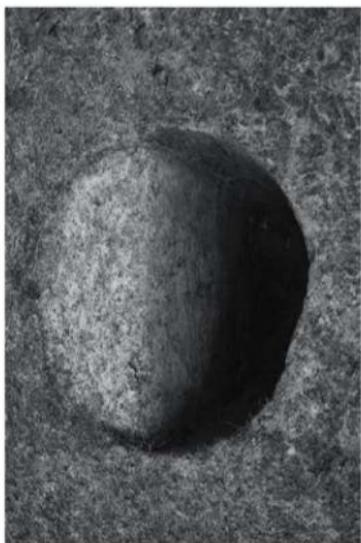
3. SE49掘り方近景 (北から)



1. SK3 (南から)



2. SK12 (南から)



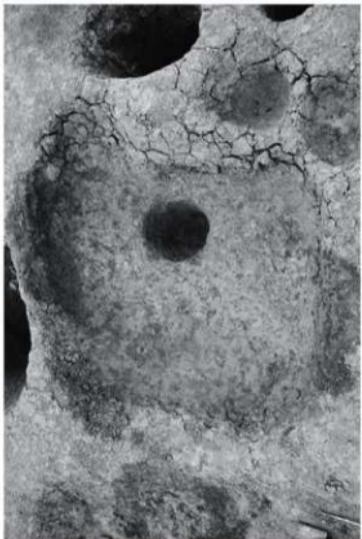
3. SK15 (南から)



4. SK270断面 (東から)



1. SK279 (南から)



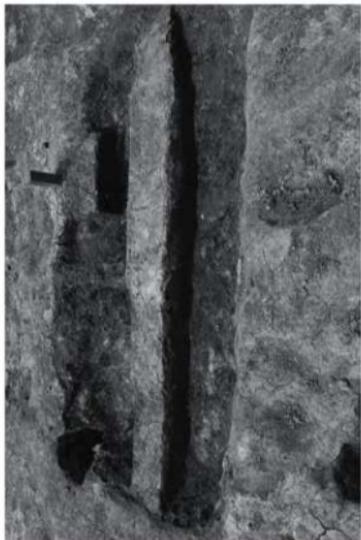
2. SK170 (西から)



3. SK296とSD5 (南から)



4. SK301 (西から)



1. SK400 (北から)



2. SK405 (南から)



3. SK513土層 (東から)



4. SK513 (東から)



1. SK511 (西から)



2. SK521 (東から)



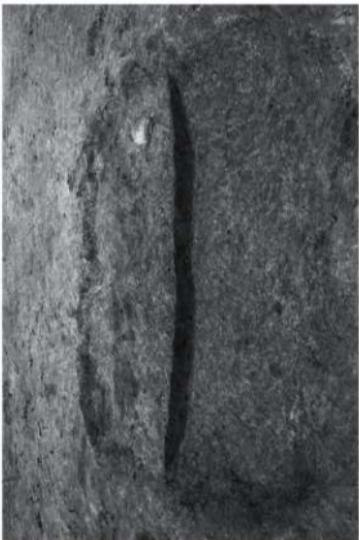
3. SK523 西脇 (西から)



4. SK523 (東から)



1. SK561 (西から)



2. SK574 土層 (東から)



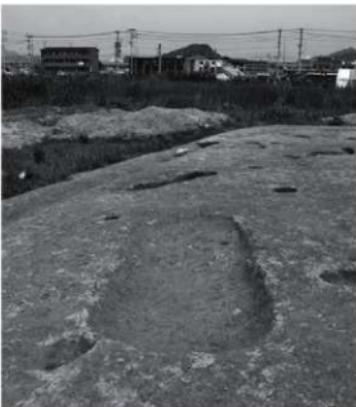
3. SK574 (東から)



4. SK604 (北から)



1. SM510 (完掘南から)



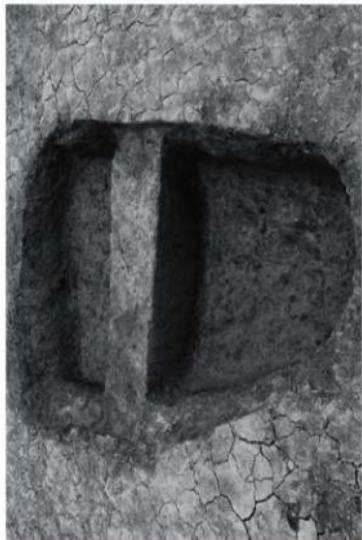
2. SM510と今山 (南から)



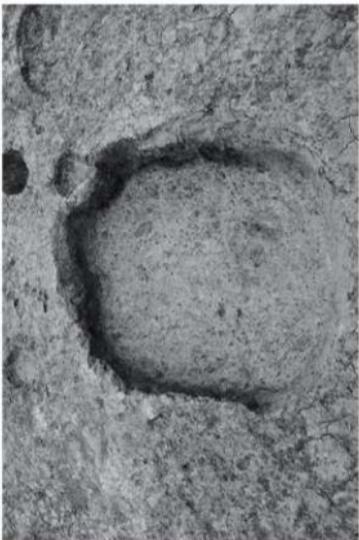
3. SM510土層 (南から)



4. SM510副葬品 (南から)



1. SK514 (西から)



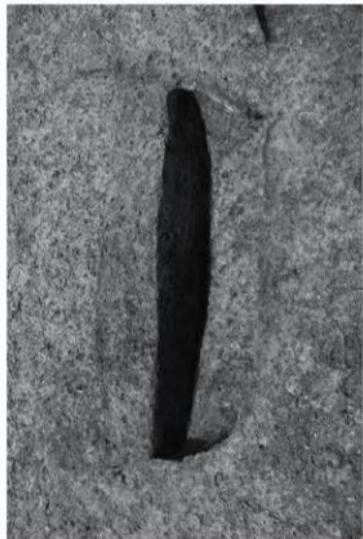
2. SK516 (南から)



3. SK515土層 (北から)



4. SK515 (北から)



1. SK517 (北から)



2. SK519 (南から)



3. SK520土層 (南から)



4. SK520 (東から)



1. SC518 (北西から)



2. SC518土層 (南から)



3. SC518-P 2 (南から)



1. SX502上面土師器出土状況（東から）



2. SX502（東から）



3. SX525焼土面（東から）

V 中世末期における大塚遺跡所在集落の性格に関する歴史地理的検討

本章では大塚遺跡第16・17次調査に際して確認された遺構遺物の内、十五世紀末から十六世紀に比定される方形区画の屋敷群から構成される集落の存在に着目し、主に歴史地理的側面から当該期の大塚遺跡とその周辺地域を巡る諸問題について論じたい。

1 中世後期から近世初期における大塚遺跡周辺の歴史地理的環境

1 中世末期から近世初期の青木村、今宿町と周辺の村落

現在の大塚遺跡の所在地は、中世後期の筑前国志摩郡青木村の境内に当たる。大塚遺跡で確認された様な戦国期集落の居住主体として想定される在地の土豪地侍層の活動を跡づける具体的な徵証の一つとして、伝來の古文書・歴史資料は重要である。中世後期の大塚遺跡周辺、怡土郡・志摩郡の東部を拠点とし、現在も関係文書が伝来する地侍層の名として、怡土郡王丸村を拠点とした王丸氏（福岡市博物館所蔵王丸文書）・同郡得永村を拠点とした得永氏（福岡市博物館寄託得永資料）・同郡飯氏村に所領を持った山崎氏（山前文書）等を挙げることが出来る。青木の地が本貫と考えられる在地領主青木氏についても、現代まで家文書（福岡市指定有形文化財・青木文書）が相伝されている。しかし青木氏は遅くとも室町期以来、生松原十二所權現社大宮司職を相伝する等、中世後期の活動拠点は青木から長垂山を越えた早良郡山門庄に置かれていた⁽¹⁾。

中世後期の青木村を本拠とした在地領主として窪（久保）氏の名が知られる。近世筑前の国学者児玉琢が文政二年（1819）に青木村を採訪した際には、同村次吉の許に八通の関係文書が所蔵されていた⁽²⁾。その内最古の文書は建武政権下、元弘三年（1333）十二月十日付の「青木窪之弥次郎盛能着到状」で、文書の奥に足利尊氏の証判が据えられていた。また残余の文書の多くは、十六世紀後期における大友氏配下の志摩郡代白杵^{しづか}鎮発給によるものであるが、全て知行地の給付に係る内容で当該期の窪氏の在村形態が具体的に示されているわけではない。但し近世青木村の集落中心部の字名を久保と呼び、その周辺には井手屋敷・大園・福井園・城外園といった字名が残されていたことから考えれば、窪氏惣領の居屋敷を中心に同名や被官人、更には百姓層の屋敷地が散在して耕地が付随するという景観を想像することは可能である⁽³⁾。

青木村は豊臣期の田数が百七町五反大四十歩、畠数が十九町三反大⁽⁴⁾、石高が千五百二石八斗二升⁽⁵⁾を数えた大村で、慶長年間（1596～1615）までは谷、女原の両村も青木村の内とされていた。慶長五年（1600）の黒田長政筑前入部以降に青木村から谷村、女原村が分割され、更に今宿町は谷村の属村として位置づけられた。元来、「今宿」「新宿」という地名は「新しい町場」程度の意味を持つ普通名詞で、これが固有地名に変化している例は全国に見出しが出来る。『筑前国統風土記』（以下、「統風土記」）には、今宿の町立てが永祿年間（1558～70）に当時の領主原田氏によって行われたという伝承が記されている。青木村分割の際の位置づけとも併せて考えれば、今宿町の成立は近世初頭からそれほど遅るものではないと考えるのが妥当であろう。史料的制約から推測を重ねざるを得ないが、新たな町立てに

(1) 以上、各文書の内容及び解題については「新修 福岡市史 資料編中世1 市内所在文書」を参照のこと。

(2) 東京大学史料編纂所蔵叢書写本「児玉雄採集文書」四、同所HP所蔵史料目録D Bより閲覧。窪氏は元弘三年着到状で自ら述べるように鎌倉期以来の御家人であり、児玉が書き留めた窪氏家紋が三目結であること（少弐氏は四目結）、少弐氏系団に窪名字が見えることから、武藤少弐一族である可能性が高い。

(3) 中世の地侍層の屋敷數が現在まで良好な形で保存されている事例として、糸島市波多江の「丹波屋敷」（波多江氏居館、方60メートル規模）は重要なである（『福岡県史』通史編福岡藩（一）、六五六頁）。

(4) 「新修 福岡市史 近世史料編1」史料五二 天正十九年三月二十三日「志摩郡惣田数付之事」（伊都国歴史博物館寄託「朱雀家文書」）。

(5) 「同前」史料二四六 慶長三年同四年「志摩郡 石田治部少輔様御時物成并中納言様御時物成」（伊都国歴史博物館寄託「朱雀家文書」）。

は一定戸数の移住者が必要となること、近世今宿町が谷村の属村に位置づけられたこと、大塚遺跡の立地が谷村の集落に隣接すること、大塚遺跡で確認された中世村落が十六世紀後半には衰退していくことを総合的に捉えれば、大塚遺跡に存在した戦国期の集落と今宿町との間に連続性を見出すことも一つの可能性として許されるであろう⁽¹⁾。

2 長垂山と交通路

中世後期の青木村は志摩郡の東端に位置し、北の長垂山から南の叶岳に連なる山塊を境として東隣の早良郡山門村・拾六町村と接する。中世以来、長垂山を越える峠道は東の博多、大宰府方面から早良平野を経て、西の糸島半島、さらには肥前松浦方面へと続く交通上の要衝であった。この道は近世の唐津街道へと継承されるが、近世前期までには長垂山の北側、海に近い所に道が付け替えられて本道となつた。地理的関係から、前節で述べた今宿町の町立てもこの道の付け替えと関連させて考える必要がある。

『続風土記』以下の地図⁽²⁾には、長垂山付近を通過する峠道に幾つかの道筋が存在したことが記されている。第一の道筋は「油坂」と呼び、早良郡下山門村内の西端、小濱から南に向かい、「鉢の窪」「カナヤマバル(金山原)」という地を通過し、長垂山頂からやや東に下った隘部を越えて、青木村鈴崎の池の上に出るルートである。第二の道筋は「広石越」と呼び、早良郡野方村から北西に進み、長垂山南方、広石の峠を越えて第一の道筋と同じ鈴崎の池の上に出るルートであった。第三の道筋は広石の峠付近から、ほぼ東向きに早良郡拾六町村へ下るルートで、これを「石引道」と呼んだ。第四の道筋は「藤が坂」と呼び、野方村からほぼ真西に登り、叶岳北方の隘部を越えて怡土郡上原村に至るルートである。

前述の地理的な重要性から、長垂山付近が戦場となった事例を史料から確認することが出来る。寛仁三年(1019)の三月末に對馬島を襲撃した刀伊(女真族)の賊船は、壱岐島を経て四月七日には筑前国怡土郡に上陸して略奪や殺戮を働いた。刀伊は同日中に志摩郡、早良郡等も襲った後、翌日には能古島へと移動している⁽³⁾。四月七日の刀伊の移動経路は史料上不明であるが、一連の騒乱の収束後、同年六月二十九日に大宰府が朝廷に勲功者を注進した中に「怡土郡住人多治久明」が刀伊と戦い、敵一人を射殺した場所として「青木村南山邊」と見える⁽⁴⁾。この場所は長垂山の近辺、右に述べた何れかの交通路上であった蓋然性が高い。また室町期の応永(1394~1428)初年、筑前守護少弐貞頼配下の武士が在番した城郭として「星山城」の名が知られる⁽⁵⁾。現在この「星山城」の故地は確定されていないが、青柳種信は「拾遺」の中で青木村内、油坂と広石越の入口、池の西畔にある「星山」と呼ばれる小山がその城跡であると比定している。二つの道筋を抑える丘陵の地理的重要性は繰り返すまでもなく、現地の聞き取りによる地名の確認や遺構踏査が今後の課題として残されている。

3 高祖山との位置関係

なお貝原益軒は『続風土記』において、十七世紀末の段階で青木村の南隣、怡土郡上原村の境域に大規模な防衛施設、具体的には堀の痕跡が見られたことを記録している⁽⁶⁾。その内容を要約すれば、上

(1) 筆者は平成22年度に民俗行事「今宿上町天満宮鬼すべ」の映像記録製作を担当した。今宿上町在住の古老からの聞き取り内容の中で、古くから上町は商家よりも農家が多く、また同じ今宿町内の横町や松原よりも、青木村や上原村の住人に親近感があったという話が聞かれた。短絡的結論を求める必要はないが、これらの内容も本文で述べたような今宿町の成立過程と関連させて考えることが不可能ではない。

(2) 『筑前国続風土記』(文献出版、二〇〇一年)五〇七~五〇八頁、『筑前国続風土記附録』(文献出版、一九七七年、以下『附録』)下「九八~九九頁、『筑前国続風土記拾遺』(文献出版、一九九三年、以下『拾遺』)下「三四〇~三四一頁。4ルートの内の「油坂」と「藤が坂」は『続風土記』に既に見える。「広石越」と「石引道」は『附録』以降にしか記載されていない。

(3) 『朝野群載』所収寛仁三年四月十六日大宰府解(『大宰府・太宰府天満宮史料』卷四、四四四頁)。

(4) 『小右記』寛仁三年六月二十九日条(『大宰府・太宰府天満宮史料』卷四、四五九頁)。

(5) 年未詳十月二十二日少弐貞頼書状(重富次郎四郎宛/由比文書)、年未詳十二月二十七日少弐貞頼書状(柳原部入道・進藤弥三郎宛/柳文書)の2点に見える。本多美徳「室町時代における少弐氏の動向一貞頼・満貞期一」(『九州史学』91、一九八八年)所収の少弐貞頼免給文書一覧参照。

(6) 『続風土記』四八六頁、『同』六三二頁。

原村の南方、高祖山の北麓に位置する平原を「安上」と呼び、治承寿永の内乱期に鎮西の有力な平家与同勢力であった原田種直が安徳天皇と平家一門を迎えるに当たり、この地に内裏を建設する計画があったという説が地元に伝承されていた。堀もその内裏に関連する施設として人々に認識され、「山の中を切通して相原迄」掘った第一の堀、「上の原村のはつれ」に位置する第二の堀、「青木村の入口」に位置する第三の堀の三重の堀遺構を確認することができた。中でも当時田地に化していた第三の堀は、長さ深さ共に非常に大規模なものであり、益軒をして「そこはくの民力を用ひすしては、たやすく掘るべきに非す」と言わしめている。

但し続けて益軒は地元の安徳天皇にまつわる伝説に疑問を呈し、上原村の位置する谷筋が怡土郡高祖山の東北麓、搦手に繋がり、上原村の谷奥に原田氏家臣の宅跡が残されていることを考慮すれば、それらの堀は高祖山城の外郭を防衛する目的で構築された施設ではないかと推測している。

近年の北部九州における中世城郭遺跡の調査の中で、戦国期に勢力を拡大した肥前の国人領主筑紫氏に関わる勝尾城筑紫氏遺跡（国指定史跡・佐賀県鳥栖市）では、城下集落の展開する河内川の谷間を遮断する形で土星を伴う四重の堀遺構が検出されている。特に城下の最周縁に位置する懸構の堀は幅約10メートル、深さ約5メートルの大規模な薬研形の堀であった⁽¹⁾。太宰府市に所在する有智山城跡では、台地丘陵を遮断して城域を区画する長大な土星と横堀の遺構が古くから知られており、從来これは南北朝期の武藤少弐氏の活動に係る遺構として理解してきた。しかし近年の現地調査や再検討の中で、この大規模な防御施設はむしろ十六世紀後期に宝満山城を居城とした国人領主高橋氏、または天正十三年（1585）に同城を占領し、一時的に使用した筑紫氏の関与によって構築された施設ではないかとの見解が示されている⁽²⁾。

右の様な近隣地域の城郭遺跡に見られる大規模な防御施設の存在と照らし合わせれば、近世初期の上原村に見られた堀構築の主体に関する益軒の洞察は非常に鋭いものがあると言える。つまりは該当の防御施設が戦国期の高祖山城に関連する施設であった可能性は非常に高く、今後の現地踏査や埋蔵文化財の発掘調査等による実態の解明は大きな課題として残されている。さらに述べれば、高祖山から北方に延びる台地の突端、上原村が所在する問題の谷筋の入口を西方から扼する位置にある、大塚遺跡の発掘によって確認された戦国期村落の性格も、高祖山城との関係も視野に入れて検討を加える必要があろう。

2 天正年間に生松原周辺で発生した原田氏と戸次氏との合戦について

前節で長垂山付近を通過する交通路の地理的重要性について言及した。十六世紀後期、大内氏滅亡以後の怡土志摩両郡の政治的動向は、志摩郡における前代以来の大友氏の権益を保持する為、豊後から派遣された志摩郡代兼柑子岳城督と、怡土郡高祖山城を本拠に国人領主として独自の領域支配を目指す原田氏との対立を軸に進展する⁽³⁾。特に元亀三年（1572）には志摩郡池田川原において、両者の軍勢が大規模な合戦に及んだことが知られている。但し天正六年（1578）の日向高城川原合戦の後は筑前国における大友氏勢力の劣勢は窺い難く、柑子岳城は慢性的な籠城状態に突入したと考えられる。その様な状況下、長垂山から早良郡の生松原付近で、大友氏方の糟屋郡立花山城督戸次氏の軍勢と、原田氏の軍勢とが衝突することが度々であったことが史料に見える。本節では中でも重要であると考えられる天正七年と天正十年の両度の合戦について、関連史料を整理しながらそれぞれ概略を述べたい。

(1) 鳥栖市教育委員会編『勝尾城筑紫氏（勝尾城下町）遺跡確認調査報告書（2）』（二〇〇六年）

(2) 『福岡県の城郭』（銀山書房、二〇〇九年）一四四頁。

(3) 福岡市博物館部門別展示解説シートNo314「戦国時代の博多展7—大友氏と柑子岳城—」（振本一繁氏執筆、二〇〇八年）。

1 天正七年（1579）八月十四日の合戦

「豊前覚書」⁽¹⁾によれば、この日かねて籠城中の柑子岳城へ立花山城から戸次氏配下の軍勢が兵糧の補給に向かった。城下遠矢原まで隊列の見送りに出た戸次道雪は、従軍する足達連安他の物頭に対して、戸次勢が立花山へ籠城を始めて最初の交戦となるので原田勢が妨害に出れば即座に鎗を交えるようにと命じた。戸次勢が柑子岳城で目的を達した後、帰路を狙って原田勢が跡を付け送ってきたので、生松原で両軍の合戦となり、初戦に勝ち勢いに乗った戸次勢は高祖山城下まで原田勢を追い討ちした。戸次勢の死傷者も多く、頭立つ者の中で後藤隼人佐・井手七郎左衛門は戦死を遂げ、足達連安は重傷を負った。

「豊前覚書」は戸次氏に与した菅崎宮主坊の被官城戸氏による記録なので戸次氏寄りの記述が為されている。しかし関連する一次史料として、戸次氏、原田氏の双方が発給した感状を多く確認することができる。戸次道雪は八月二十六日付で合戦に参加した被官人に一斉に感状を発給している⁽²⁾。これら戸次氏の感状が将来の「配当御」の恩賞地給付を約束するのに対して、原田氏は合戦直後の八月十六日に志摩郡の土豪馬場藤介の軍功を賞し、柑子岳城城下の桜井村に於いて五町の所領を給付している⁽³⁾。結果的に九月に柑子岳城督の木付鑑実は城を放棄して立花山城へ移り、原田氏は継続的に配下の地侍へ志摩郡内の所領を充行っている⁽⁴⁾。史料を総合的に分析すれば、天正七年の生松原合戦は、その後の怡土志摩両郡における原田氏の優勢を決定的にした重要な事件として位置づけることが可能である。

2 天正十年（1582）二月の合戦

前項と同じく「豊前覚書」によれば、この月の某日、戸次氏は軍勢を派遣して早良郡山門村を「打破」⁽⁵⁾った。戸次勢の引き際に原田勢が生松原まで出張って銃撃を開始したので、戸次勢も鉄砲を用いて反撃した。午刻より未刻の末まで二時間以上の銃撃戦となったが、互いに死傷者が発生したので双方より軍勢を引いた。文中では「御籠城初り候而より、ヶ程之鉄砲戦ハ初にて候」と、この日の合戦でそれまでに無いほど大規模に鉄砲が用いられたことが述べられている。また戸次勢は同年の四月十六日に那珂郡岩門庄へ出兵し（「豊前覚書」）、原田方が構えた「久辺野切寄」を陥落させている⁽⁵⁾が、この二月の合戦と混同するのは誤りであろう。

3 小結

本章では主に大塚遺跡において確認された中世後期の集落遺構について、歴史地理的な関心から幾つかの問題を論じた。管見の限り、史料から問題の集落遺構の居住主体を特定することは出来ないが、掘立柱建物を伴う30メートル前後の方形区画が連続するという戦国期集落の形態を具体的に確認できた点で本遺跡の発掘調査成果は重要である。また本章では該当の集落と近世今宿町との間に連続性が見出せる可能性を指摘した。後段で述べた領主間抗争の問題も含め、議論を通じてクローズアップされたのは中世末期の怡土志摩両郡の領主原田氏の存在であった。原田氏の領域支配や高祖山の周辺集落、それらに隣接する土豪地侍層との関係性の具体的な検討は今後の課題として残されている。以上、本章で述べた内容が大塚遺跡の性格を考えるに際して一助となれば幸いに思う。

(1)『博多・筑前史料 豊前覚書』（文献出版、一九八〇年）。「豊前覚書」では八月十三日の日付と共に、本合戦の推移を述べる。十三日に立花山城を発した軍勢は、翌日柑子岳からの帰路にて合戦したと理解するのが整合的か。

(2) 小野鎮幸宛感状写（『檜垣文庫資料』／小野文書「三二」・橋詰彌三郎宛感状写（『檜垣文庫資料／橋詰文書』四）・米多比弾介宛感状写（『米多比文書』一七）、全て『新修 福岡市史 資料編中世1』所収。

(3) 天正七年八月十六日原田了栄感状（『馬場文書』四）、『同前』所収。

(4) (天正七年か)十一月十五日原田氏臣連署坪井付注文（『庄崎家文書』二）・天正七年十二月十三日原田了栄充行状（『山前文書』七）、共に『同前』所収。

(5) (天正十年)四月二十八日戸次道雪・統虎連署感状（『鷹野文書』三一）、『同前』所収。

VI まとめ

本書で報告した大塚遺跡第16、17次調査は大塚古墳の北側隣地を対象とした7000m²を越える大規模調査である。前者では弥生時代後期～古墳時代初頭・古代・中世前期・中世末の遺構がみつかり、後者では古墳時代中期・古代・中世末の遺構がみつかった。各時代の遺構変遷や周辺の調査との関係については、第Ⅱ章やそれぞれの報告の小結においてまとめた通りである。ここでは、16次と17次で一連の遺構群としてみつかった中世末の様相について、周辺の調査成果と併せて整理し、まとめとしたい。

中世末（16世紀前半を中心とする）は大塚遺跡の最盛期の一つである。遺構がまとまってみつかっているのは、第6、7、13、16、17次であるが、大塚古墳周辺のおよそ南北260m、東西130mの範囲の低丘陵上である（Fig.3）。北から各地点における当該期の調査成果についてみていただきたい。

第13次調査（第1025集）

中世末の遺構は調査区の東半部で検出した。大塚遺跡における当該期の遺構は、本調査地点が北限である。その中でも北部は水路（SD1～3）と水溜状遺構（SK9、10）で、建物等は調査区の南東部に集中する。掘立柱建物3棟以上と柵列1条のほか、地下式貯蔵施設と考えられる大型長方形堅穴状遺構（SK4）がみつかっている（Fig.38）。南側には17次調査のSD008があり、東西方向の区画溝と考えられる（区画H）。区画Hの西と北の限りはSD 1～3と考えられるが、その場合の区画は南北長40mとなる。大型区画であるが、北部は建物等の遺構が希薄である。これらの遺構の時期は16世紀前半が主体である。

第17次調査（本書）

本調査地点は遺構・遺物の9割以上が中世末である。溝による長方形区画が10群前後みつかっている。区画の規模は長軸長15～25m前後である。区画同士の切り合いではなく、区画と区画の間は通路としてのスペースが確保されていたものと考えられる。

区画の内外からは、掘立柱建物20棟以上、柵列10条以上、石組井戸1基、土坑19基（うち水溜状遺構が3基、小型地下式貯蔵施設が1基）である。地点によって、建物などの遺構の遺存状態がまちまちであり、遺構密度の薄い箇所は後世の削平によるところが大きい。このような屋敷地、区画の中で中心的なのが、SD013等で開まれた区画Fであり、遺構の遺存状況も良好である。本調査地点で唯一、石組井戸を有する地点であり、大型建物も存在する。また、このような区画の中には、区画Mのように、本来的に遺構密度が薄く、広場のような性格が想定できるものもある。区画Mの南側は、16次調査でみつかっているスロープ状遺構（丘陵上の集落と西の河道を結ぶ通路とみられる）に面しており、集落の入り口近くに設けられた、共有広場のようなものであったかもしれない。前述の第13次調査地点北部も遺構密度が希薄であるが、集落北側の入り口に面する広場・空き地であったのであろう。

これらの遺構の時期は16世紀前半が主体であるが、区画Fなど、16世紀後半段階まで存続する遺構もある。

第16次調査地点（本書）

調査区の南・北端に東西溝が走り、それらの間に掘立柱建物8棟、土坑などがある。溝で挟まれた範囲は南北幅約20～30mを測る。調査区東部の南北方向の溝は、後述の第7次調査周辺と第16次調査地点を区画する溝である。北縁の東西溝は複数の切り合いがあるが、東西長65m以上を測り、調査区西部のスロープに通じていたようである。また、調査区西部は遺構密度が希薄であり、広場・空き地となっていたのであろう。本調査区の建物群は北・東・南は区画されているが、西側を限る遺構がみられず、西に開いた区画となっている。これを17次調査での呼称と連続させて区画Oと呼んでおく。これら

の遺構の時期は16世紀前半が主体であろう。また、南隣地の大塚古墳であるが、墳丘調査で当該期の遺物や溝がみつかっているようであり、何らかの利用がなされていたとみられる。

第7次調査（第256集）

丘陵東部に位置する。北側の2区は16次からの延長とみられる東西溝が検出され、掘立柱建物が1棟みつかっている。南側の1区は、2区周辺との間を区画する東西方向の溝群や柵列がみつかっているほか、掘立柱建物、土坑、石組井戸などの遺構がある。16次調査からの延長の溝で区画された2区周辺を区画P、1区周辺を区画Qと呼んでおきたい。区画Pは推定で東西22m、南北17mを測る。

これらの遺構の時期は16世紀前半が主体であろう。

第6次調査（第224集）

今宿大塚古墳の南側にある第6次調査では、調査区東部において、方形区画溝と掘立柱建物2棟以上、調査区西部においては区画遺構がみつかっていないが、掘立柱建物10棟以上を検出した。調査区西部で溝等の区画施設はみつかっておらず、西部の建物群は区画外に位置する可能性が高い。

調査区東部の区画内を区画R、西側の区画外をS地点と呼んでおく。区画Rは東西20m以上、南北10m以上である。大塚遺跡では短辺が20mを越える区画がみられないで、東西方向に長い区画と考えられる。これらの遺構の時期は16世紀前半が主体であろう。

以上のような溝等による区画は屋敷地の区画と考えられ、大塚古墳周辺をとりまくように中世末の屋敷群が広がっていると考えられる。周辺の調査状況からみて、北限は第13次調査地点と言えるが、南限が第6次調査地点であるかどうかは不明である。

これらの屋敷群の中で中心的な位置を占めるのは第17次調査地点周辺であるが、中でも区画Fは中心的な屋敷であったと考えられる。大塚遺跡の中世後期の集落は16世紀前半を主体とし、後半には衰退すると考えられるが、区画Fやその大型建物等は改修が繰り返されて、16世紀後半まで存続する。

16世紀後半以降、衰退傾向にある大塚遺跡であるが、近隣の青木遺跡は当該期以降の遺構・遺物が増加しており、大塚から青木村や今宿村等への移転が行われた可能性が高いと考えられる。18世紀の『筑前国続風土記』では青木村が今宿平野の有力村落の一つとして記述されているが、大塚に関する記述はみられない。

このような屋敷群で構成される集落を営んだ集団の性格や階層はどのようなものであったのか。

大塚遺跡の方形区画は、一町や半町規模を有する「方形居館」や「方形城館」と比較してはるかに小規模である。大塚遺跡のような小規模な方形区画が群集する集落を考えるうえで参考になるのは、大野城市御笠の森遺跡等である（林潤也2005『御笠の森遺跡Ⅱ』、山崎龍雄2011『筑前地方における戦国期の村と城』福岡市埋蔵文化財センター考古学講座資料ほか）。16～17世紀の方形区画群がみつかっており、一辺70mを越える規模の大きなものもあるが、一辺30m前後の規模が多く、有力農民層の集落と考えられている。大塚遺跡の方形区画溝を伴う屋敷群も名主などの有力農民層によって営まれたものであり、博多湾沿岸において、有力大名の大内・大友の対立が激化する不安定な社会情勢下、自衛手段としての集落形態であったと考えられる。15世紀以前の集落から連続的に発展するものではなく、15世紀後葉から16世紀前半頃に突如として成立するものであるので、在地領主（大内氏や原田氏関連？）の管理下で組織され、計画的に配置された村落と考えられる。

報告書抄録

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1144集

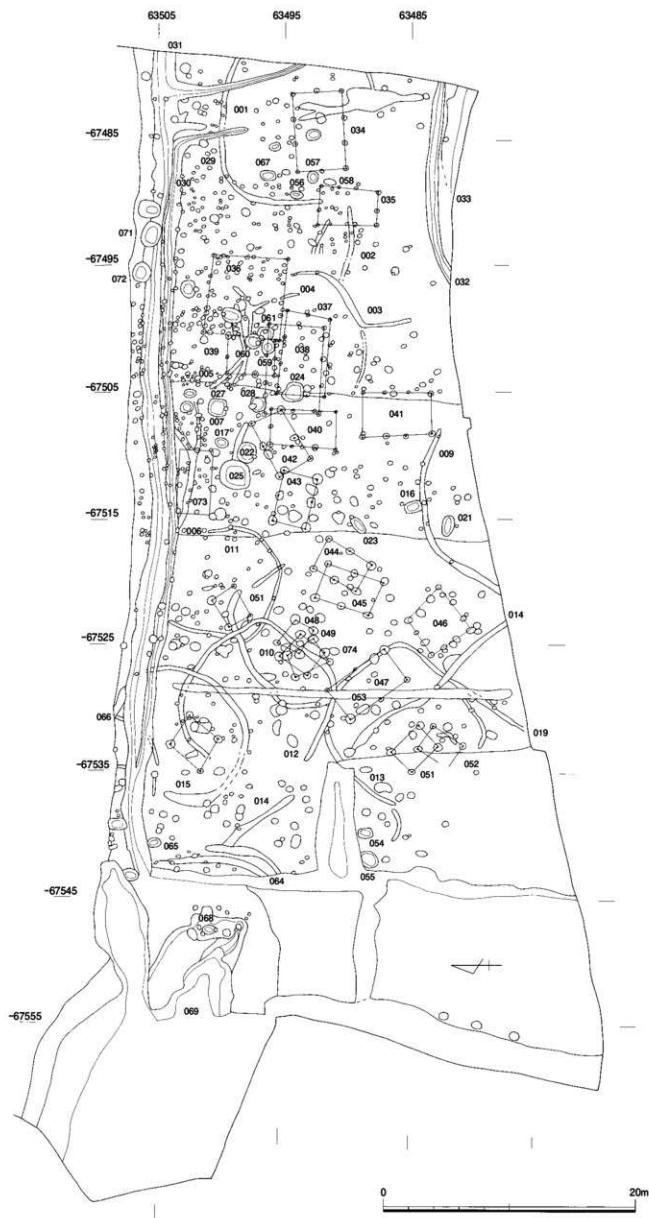
大塚遺跡 5

—第16次・17次調査の報告—

2012年（平成24年）3月16日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1-8-1

印 刷 松影堂印刷株式会社



付図 I 大塚遺跡 16 次調査地点遺構配置図 (1/300)



付図 II 大塚遺跡 17 次調査東部遺構配置図 (1/200)



付図Ⅲ 大塚遺跡 17 次調査西部遺構配置図 (1/200)



付図IV 大塚遺跡 17次調査北部遺構配置図 (1/200)